
炎の召喚士フレア

Lolo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

炎の召喚士フレア

【Nコード】

N7204V

【作者名】

Lolo

【あらすじ】

注意？

「召喚」とありますが、人気の（？）現代の人々が異世界に強制的に呼び出されてどうのこうのという話では御座いません。

注意？

攻撃的なタイトルですが、戦闘シーンは片手で数えるほどです。

注意？

あまり詳しくないのですが、どうやらチートとかいうらしい気配があります。

以上が余り気にならないお方へ。

平凡な女の子が、ドラゴン召喚をきっかけに魔法使いとして生きていくハメになるお話です。

プロローグ（前書き）

つまらないプロローグです。よろしければ、第一話を読んで善し悪しを判断して頂けると幸いです。

プロローグ

レミユエル王国、王都リーゲル。

王に仕える文官の1人であるダグラスは王宮から離れた、とある貴族邸にいた。

王の側近の1人であるダグラスは貴族の中でも特にあちらこちらへ顔が利く方に入る。

30代半ばの、痩せこけた頼りない印象の彼は容貌からは想像もつかない、陰謀を語っていた。

「協力してくださった暁には、貴方に、王位について頂きたい」

低めた声でダグラス。

「面白い男だ。こんな計画を立てておいて、自身は王位に興味がないと？」

相手の声は意図せずとも低い。声を聞くだけで威圧感を受ける。

しかし、声の主は背が高くとも大男という印象ではない。筋肉で引き締まった身体は武人としては寧ろ細いほうになる。

「私は、今のこの国が気に入らない……それだけですよ。」

まあ、1つくらい野心を出さねば怪しまれそうですからお願いを1つ。貴方が王位に就いた日には私を宰相として登用してください」

「頼まれるまでもない。俺は文官には詳しくないからな」

ダグラスは答えを聞くと、口元に笑みを浮かべた。

「では、またご連絡にあがります」

ダグラスは、まだ夜も深まる中、王宮へ急いで戻って行った。

約10年前のこの日、全ての因果が始まった。

ドラゴン召喚！？　ちょっと待って、聞いてないよっ！！

王都リーグルも、北方は王宮を中心に城下町で賑わっているが、南へ行くと農民達がつつましく暮らす静かで穏やかな農村地帯となる。

そんな、リーグル南方の小さな家の屋根裏部屋をフレアは掃除していた。

16歳のフレアは農民にしては珍しく学校に通っていた。これも、父のお陰である。フレアの父は以前この国の軍に在籍しており、しかも召喚士であった。

召喚士というのは、魔法書から魔獣……召喚獣を呼び出し、戦う軍人の事をいう。魔法書があれば誰でも召喚が行えるという訳ではない。戦闘能力とは全く別の、魔法を使う為の体力のようなものである、魔力が強くなければ、強い召喚獣は呼び出せない。彼女の父、アークはSランク……つまり最高位の魔獣を召喚する力を持っていた。

だが、今は此の世にいない。

死因については不明だが、フレアには大方見当がついていた。

この国では貴族が能力の有無に拘わらず武官や文官として幅を利かせている。平民、特に貧乏な農民は虫けら同然に扱われる。

アークはきっと、その才能を貴族達に疎まれて、身内に殺された

のだとフレアは考える。

『能無し貴族が父さんを殺したんだ』

父を尊敬していたフレアは、10になるよりも前から貴族を恨み、忌み嫌うようになっていた。

「いけなっ」

何も考えず、作業に没頭していたら本棚にぶつかり中身をいくらか落としてしまった。

身体の小さい彼女は上の方に本を戻すのにも一苦労である。

「あーあ、やんなっちゃう」

ぶつぶつ、小言を漏らしながら本を集める彼女の手が止まった。

「これ……」

赤い革表紙の、分厚い本。金文字で古語……つまり魔法用語が書かれている。

「魔法書だ……」

パラパラとページを繰ってみる。

綺麗な字で書き込みがたくさん入っている。相当、使い込んでいた

ようだ。

「折ってある」

魔法陣のページの一箇所が、目印のように折られていた。

「えっと、……Sランクの炎属性ドラゴン……か」

フレアは、アークが炎の召喚士と呼ばれていたのを思い出した。

何となく、目の前が滲む。

そして突然思い立った。

召喚を試みよう、と。

一般人の召喚は禁止されているのだが、出来るわけが無いのだから、真似事くらい構わないだろうという思いであった。残りの本を棚に押し込み、スペースを作る。

本を床に置いて魔法陣に向き合って座る。血を一滴、垂らさねばならないので先ほど片付けたガラス片を取った。

深呼吸を1つ。

左手の人差し指の腹を、そっと切る。

「痛っ……」

これを召喚士は毎回やっているのか。

小さな雫が、魔法陣に落ちた。

本に手を当てて、呪文を読む。

間違えないようにゆつくりと。

出来もしないことを本気でやっている自分がくすぐったかったが、誰も見ていないからまあいいかと思う。呪文を読み切る。

やはり何も起こらないようだ。

笑って立ち上がる。

「さっ、続きやんなきゃ……えっ?」

コルク栓を思い切り抜いたような、軽い、景気の良い音に振り返ると本から赤い煙が出ている。

「えっ!? えっ……どういうこと!?!」

フレアの頭を過ぎったのは『Sランクのドラゴンが出て来たら、ウチが壊れる!』だった。

思わず床に這いつくばり、煙を凝視する。煙が晴れ、現れたのは……。

「エヘン、ゴホッ。まーったく、いつもながら煙いったらないぜ!で、お前は誰だ? 街を幾つ潰すんだ?」

フレアは、思わずポカーンとした。

「ト……トカゲ？」

「あん？ トカゲ？ そんなもん、どーでもいいから、とっとと命令しろ ってガキッ！？」

引つ繰り返らんばかりに驚いているのは、20センチくらいの高さで、2本足で立つ赤いドラゴン（らしきもの）。大きければ、強そうに見える骨に幕が張られたような翼があり、金色の角がある事を除けば只のトカゲだ。2足歩行で喋るトカゲ、だが。

「あんた……何？」

「何？ だつて！？」

お前が召喚したんだろぅが！
クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンよっ！」

「ク……クーファ？」

フレアは頭がどうかしそうであった。

さっきまで見開いていた黒くぱっちりとした目を閉じ、頭を抱える。

「これは夢よ、夢……フレア、そろそろ起きなさい！」

目をそつと開くが……。

「何やってんだ、お前よお？」

「やっぱ、いるっ」

今度は崩れ落ちるフレア。

「ねえ……ドラゴンって、こんな小さいの？」

「あん？ 小さいもんかつ！

いやしかし、お前はデカイなーあ、巨人か？ 俺様が小さくなった気分だぜ！」

「あたしは人間！ 名前はフレアっ！

あんたが小さいのよっ！！

何この本……父さんのじゃなかったのかな。こんなふざけたトカゲがSランクトドラゴンな訳ないもん！」

「ま……待てよ、お前……。

人間なのか？ フツーの？」

「そつよ、寧ろ小さい方よ！」

もう訳が判らなくなり、喧嘩腰になっているフレア。

「お……おおっ、落ち着けよお、フレアあ」

「あんたが落ち着きなさいよ」

クーファはいきなり窓から飛び出す。

「あ、コラー！！」

フレアは我に返った。

これがSランクドラゴンであってもなくても……例えばEランク（最低ランク）の魔獣でも一般人の召喚には厳罰が下される。下手をしたら、青春を牢屋で送ることになるかも！

「待てーっ！！ 戻ってこーいっ！！」

叫んだフレアの顔に、戻ってきたドラゴンが激突し、フレアは引っ繰り返るハメになった。

「ほ……本当に俺が小さくなってる……」

「小さくなってる？」

「おうよ。俺はSランクドラゴン……。お前なんか、鼻息で飛ばせる超ビッグサイズのはずなのに」

思い悩んでいるようだ。

テンションが一気に低くなっている。

何となく気の毒になってきたフレアだった。

「あ、あのさ……あたし、たまたま、冗談のつもりであんたの事を呼び出しちゃっただけだから。帰っていいよ。」

そう、そう。あたしの魔力が足りてないから大きくなれないのかもよ？。」

ドラゴンは

「それもそ・だな」

と言いかけ、止まった。

「冗談で俺を呼び出したあつ!？」

「ご、ごめんなさいっ!！」

謝ったフレアだが、相手は怒っているのではなく酷く驚いているのだった。

「待て、つまりお前は召喚士じゃねえのか!？」

「う、うん。一般人。」

だからあんたを召喚した事がバレると大変な事になるの。だから戻って、早く、お願いっ!！」

パチン、と顔の前で手を合わせた。

「おかしいぞ! そいつはよお。」

召喚者の魔力が関わるのは寧ろ、召喚そのものだ。呼び出すのに足る魔力を持っていれば召喚後は、ガス欠になってようが一切構わねえくらいだ。

つ・ま・り・だ。

フレアつつたな?

お前は俺を呼び出せる魔力を持っていたのに、正しく召喚が出来てねえつつう真にファンタジックな状態な訳だ」

「ファンタジックの意味判ってる？」

腕組みして考え込むドラゴン。マッチ棒のような腕だ。……否、前足だ。

「えっとさ、それはもういいから戻って、ね？」

「フン、普通は一秒でも長く召喚する為に四苦八苦するもんだがな！」

ドラゴンは「じゃーな」と消えていく　　はずだった。

「……ん、あれ？」

「へっ？」

「待てよ、今、戻るから」

「うん」

静寂がたつぷり10秒は続いた。

「戻れねえ」

「は？」

「ど……どうすんだ！　戻れねえぞっ！！」

「こっちが聞きたいわっ！！」

どういう意味よ、戻れないって!？」

「だから戻れねえんだよ！」

「あたし、すっごく困る!!」

「俺も、すっごく困る!!」

また、静寂が今度は20秒近く続いた。

それを破ったのは……。

「フレア、どうしたの？ 叫んだりして？」

ひょっこり、母が顔を出す。

「あっ」

「あら、その子は？」

ドラゴンとフレアの母、ソフィーの目がぱっちり合った。

「こ、こここれはねっ」

「クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンだっ！」

「名乗るなあっ!!」

入軍志願するハメになった。青春を返して欲しい。

ソフィーは目をぱちくりさせて両者を見比べ、そして床の魔法書を見た。

「まさかフレア……召喚したの？」

「ご、ごめんなさい」

ところがソフィーは手を叩いて大喜び。

「やっぱり父さんの子だわっ！！」

凄いわよフレア！ その子はドラゴンなの？ 素敵！

クーファちゃん、下でお茶でも飲む？」

「待つて母さん、そんな……友達が家に来たとかじゃないんだから！」

脳天気にも程がある対応。ずれている。

「紅茶か？ ミルクと砂糖たっぷりな！」

「飲むんかいっ！」

こちらにも呆れる。フレアは本当に頭が痛くなってきた。

「てか、母さん……クーファって？」

「そんなお名前でしょ？」

「いや、クーラファンドラ・フレイム・ドラゴン」

クーファが訂正するも

「うん。クーファちゃん」

悪気は一切無い笑顔。クーファは言い返す気も起きなかったらしい。大人しくソフィーの肩にパタパタとドラゴンの飛行について適さないが本当に、パタパタといった感じで飛び上がり、階下へ行ってしまった。フレアもやむなく続く。

「それにしても、長いわね」

紅茶を一杯、ゆとりと飲み終わるとソフィーは言った。

「何のこと？」

「クーファちゃんの召喚時間」

フレアとクーファは「あつ」と、顔を合わせた。召喚士の娘であるフレアは絵本代わりのように、魔法書を読んでいたので一通りの知識ならある。

「そうだ、お前みたいな小娘が10分以上も俺を召喚し続けてピンピンしてるなんて、おかしすぎるぞっ！」

クーファが問題を正確に述べてくれた。彼（？）の言う通り、普通、高位魔獣の召喚と維持には膨大な魔力が必要で、Sランクドラゴンなど並みの召喚士では召喚できないし、できたとしてもものの2、3分でタイム・オーバーとなる。

「訳が判らない……っ」

フレアはまた、黒い髪をくしゃっと掴んだ。

「あのね、もしかしてフレア……あなた、永久召喚したのかもよ？」

「……はあ!!?」

フレアとクーファの声が重なる。

「ムリ無理むりっ!!!!」

「でもね、それならクーファちゃんが自力で戻れないことの説明がつくわよ？」

「にしたって、Eランク魔獣の通常召喚もしたことないあたしが、Sランク魔獣の永久召喚なんてできないって！」

「そうだぜマダム、俺を永久召喚なんて出来たら、生きる伝説になれるぜ？」

「そうかしら？」

通常召喚とは、時間制限付きの召喚。術者の魔力切れか、術者の

意思により召喚獣は消える。初歩的であり、最もよく使われる召喚法である。

一方で、永久召喚はそれと随分異なる。術者の命が尽きるまで魔獣を自らの元に留めておくというもの。これの難易度はEランク魔獣の永久召喚でもSランクの魔獣を召喚するのと同じか、それ以上とさえ言われる。クーファが伝説級と言ったが、大袈裟ではない。

またこれと似たものに契約召喚というものがあるが、こちらは若干難易度が下がる。召喚者と魔獣の契約により、その術者が死ぬまで、契約魔獣を他の者が召喚出来なくなるというもの。

「とにかく、あたし……どうすればいいの!？」

このままではいつかバレて、捕まるだろう。

フレアが落ち込んでいると、ソフィーが、とんでもない事を笑顔で、さぞ、名案! という風に言った。

「召喚士になればいいじゃない!」

「……はあっ!？」

召喚士になるということは、王城に仕える武官になるか、国内に7名いてそれぞれ自らの軍を持つ大將軍の下に入隊するかだ。この国の貴族が大嫌いなフレアのような者は後者の、しかも平民の大將軍である2人の内どちらかの軍に入るしかない。

「いーじゃねーか」

クーファまでそんな事を言っている。

「あのねクーファ……」

「俺を召喚できたんだからな！
一生、自慢できるぞっ」

「自慢したら牢屋行きなのっ！」

「だから、正面切って自慢するために、正式に召喚士になっとけ！」

フレアは特大の溜息を吐く。

「なっとけ！……って、簡単に云わないでよお」

ちらりと発案者ソフィーを見ると、彼女はどこからかビラを取り出した。

「今、平民出身の女性大將軍エレイズ様の軍で公募が行われてるわよ！

エレイズ大將軍は、若くて有能な方だし、部下も8、9割が平民と
いうことで有名よ、いいじゃない！」

フレアは、理性が大反対すると同時に、それしか牢屋行きを逃れる
手がない事も判っていた。

「わかった。行くっ！」

「よくぞ言ったぜ、未来の大將軍っ！」

「クーファ、うるさいっ！」

入軍試験の受付に行くも、周りを見る限り既に落ちたような気分となる。

翌日、フレアはエレイズが城主を務めるダークヒル城へ向かった。クーファは上着の大きなポケットに隠れている。やはり1日経っても、クーファはそのままなのだ。

「はあ、あたしの日常はどこ行つたの……」

「日常なんて、紙にくるんで屑カゴに捨てとけ！」

「ガムじゃないんだから！」

ダークヒル城は、王都から馬の足で3日、普通の少女が歩けばその倍はくだらしく掛かる。それだけでもめげそうになる。

「しかし、ダークヒルなんて陰気な名前だなー。エレイズっての、暗い奴なのか？」

クーファが言うと、フレアは少々ムツとして言い返す。

「違うわよ！ ダークヒルは、城のある地名！」

エレイズ様は、クールで名前とかにこだわらないから城名にそのまま地名を使ったの。

すつごく綺麗で強くて とにかく、完璧なんだから！」

「……ふーん」

フレアは というより平民の殆どはエレイズかもう1人の大将

軍、ウォーレンのファンである。

人気の高さ故、この2人は無事に出世しているとも言える。この2人を処分したとなると、ただでさえ評判の悪い国王への信用が減るどころか無くなるからだ。また、能力をとつてもこの2人とその軍を欠くと国の軍事力がことごとく減退する。

大將軍となるには、Sランク魔獣を召喚することができる「上級召喚士」として認定されるか権力の行使かである。平民は前者でしか道はないが、5人の貴族大將軍の内3人は後者で「中級召喚士」（BからAランクの魔獣召喚ができると認定された者）。これくらいなら、エレイズやウォーレンの軍にはザラにいるのだが。

「そっぴやお前、ただの魔法も使ったことなかったのか？」

クーファが思い出したように聞いた。

「無い。」

呪文唱えて、炎とか雷とか出すアレでしょ？ 全っ然判らない」

「全くの魔法ド素人に召喚されたのか、俺は……。
プライドがギタギタだぜ。はゝあ」

フレアは何度目かの確認をする。

「あんた、本当に炎属性のSランクドラゴンなのね？」

「ったり前よ！」

「あんた、嘔吐けそうにないしなあ」

魔獣はランク、種族の他に属性でも召喚の難易度が変わる。上から順に光、炎、氷、水、雷、土の6段階であり、クーファは最高ランク、最強種の第2属性ということになる。

「あのさ」

ダークヒルを目指して3日目。安宿に泊まり、毎日ひたすら歩いてもうクタクタであるが、まだ半分。

「何だよ？」

「あんた、アークって召喚士知ってる？」

「お？ おう、懐かしい名前だぜ！

俺はあいつの契約魔獣だったんだ。俺が背中に乗せてやった人間は未だにあいつだけさ！

いゝい奴だったな！ 俺とあいつの作った武勇伝の数々っ！ 伝説にでもなってるのかな」

「ううん。父さんは平民だもん。……大將軍でもなかったし。手柄は全部、貴族連中にとられちゃった」

「ふーん、お前の父さんが。

待てよ、父さん！？

アークの娘だつてえ！？」

フレアは頷いた。思い出すと悲しいし、腹も立つてくる。

「そうか。ってことはアークの奴が何かしたんだな？
あいつは今どこだ？ 出張か？」

「ううん。

死んじゃった」

「死んだ……？ あいつが？」

「あんたが、あたしに召喚されたのが、何よりの証拠でしょ」

クーファは暫くぼーっとしていたかと思うと、いきなり大声を上げて泣き始めた。

「死因……はっ？ ううっ」

「わかんないの。

貴族に隠蔽されたの。多分、貴族連中に殺されたのよ。

父さん、優しい人だったから……能無しで屑キレ以下の貴族でも同国人を殺せなかったんだと思う。相手が他国の“敵”なら、父さんが負けるわけないもん」

淡々と喋るフレア。

彼女は父のことで泣くのを自らに禁じていた。目が潤んでも、涙を流したり、しゃくりを上げてはいけない、と……。誰に言われたのでもなく、自分で決めた。

それから更に3日後の夕方少し前、フレアとクーファはダークヒル城に着いた。飾り気のない、白塗りの城壁。高い城門と濠で囲まれた城だ。今は北の正門が解放され、公募受付がなされている。

フレアが列の1番後ろに並ぶと、明らかに場違いであった。若者から中年くらいまで、年格好は様々だが、見る限り筋骨隆々であったり、どう見ても武術家を思わせる鋭い目付きの者……。エレイズの軍という事もあり、女性の志願者も少なくないがフレアのように「小さな女の子」は当然いない。

フレアが何も始まっていけないのに、諦め、気落ちしていると順番が回ってきた。

「次い」

前の男が大きすぎて、今までこのやる気なげな声の主は見えていなかった。

「んあ、珍しいな」

「ど……どうも」

「名前書いて。あと、志望動機」

フレアは一瞬、困ったが次のように書く。

【名前：フレア

志望動機：召喚士であった父のようにになりたい】

フレアを見ていた男は何故かニツと笑う。

『嘘がバレた！？』

「俺はリア。エレイズの副官な。」

試験は明日の午前10時からだ」

「は……はい！」

落ち着いて相手を見ると、変わった男だ。……見た目の話だが。

20代の半ばくらいだろう。ワックスでガチガチに固めているらしい赤い髪は、クーファの体の赤さと良い勝負。この辺りの者に多い、緑色の瞳は切れ長で鋭いが、どこか人なつっこい猫を思わせるような印象がある。

「あいつ、なかなかできるな」

クーファは真面目な口調で言った。

「どういうこと？」

副官ならば当然だが、一応聞いておく。

「多分あいつ、俺に気付いていたぜ」

「そんなっ！」

通報されたらどうしよう！」

「落ち着けての。
ありゃ単に面白がってるクチだぜ。てか、通報ならあの場で出来た
だろ」

「そ、そっか……」

「安心ではある。」

しかし、試験に悪影響なのでは？ いや、そうに決まっている……。

入軍試験当日。……これって試験？？

そして翌日。10時きっかりに志願者達の入城が始まった。

大広間に通される。床から壁、天井まで真っ黒である広間は大きな窓から明かりが差し込んでいる。真ん

中辺りまで押し込まれたフレアは、床の中央の模様に気付いた。

鋭い眼光を放つ、巨大な純白の狼である。そういえば、エレイズの契約魔獣はSランク獣族、氷属性の狼型魔獣と聞いたことがある。きっと、城主の趣味なのだろう。

「はいはい、全員入ったな？」

リアが広間突き当たりの扉から現れる。どうやら廊下に行く扉らしい。

「今から呼ぶ奴らは俺に付いてこい。で、残りは後の奴に従って2手に別れて左右の部屋に。じゃ、呼ぶぞ。1回しか言わねえからな」

リアがだらだらと呼び上げたのは、20名前後の名。その中にはフレアもいた。

リアに従い、真っ直ぐ長い廊下を歩く。

廊下の絨毯はやはり、黒。ランプ立ては狼の頭の形をしている。

「じゃ、ここで待機な。好きにしてろー」

ヒラヒラと手を振り、廊下の真ん中辺りの部屋に志願者を残して彼は出て行ってしまった。

黒基調のインテリアが置かれた広い部屋。ソファなどは全員が座っても余りあるが、遠慮してか誰も座らない……と思っていると、1人がまず腰を下ろした。

細い身体 of 少年。フレアより少し年上というくらいだろうか。長い茶髪に、黒い瞳。顔だけ見ていると、少女と見違えそう。

「座ったら？」

何となく目が合ったフレアに言ったらしい。

につこりすると、本当に可愛らしい。

隣にフレアが座ると

「俺はシュウ。よろしく」

と丁寧にあいさつをくれた。

「フレア。こちらこそよろしく」

「同じ年頃の人がいて良かったよ。年上ばかりだと、無駄に気疲れしない？」

よく喋るなと思いつつ

「そうなんだよねえ。あたしなんて、明らかに場違いだし……」。

この城目指して歩いてたのに、道行く人に『こっちはエレイズ大將軍の城じゃないぞ』
なーんて言われて!」

と、文句が口を次いで出て来た。

「俺も似たようなものだよ。
それにしても……どうして俺達だけここなのかな」

「3つに分けるにしたって、まだ100人は残ってたよね」

フレアは頷きつつ言った。等分したのではないのは、明らかだった。
意図は何だろうか。

「取り敢えず、見かけ倒しがここにいないのは確かだね」

微笑みつつ、フレアとシュウの前に座ったのは30代前くらいの紳士然とした男。

「俺はジェイド。まあ、今日でさようならにならない事を互いに祈ろうか」

シュウは微笑みを返す。

「さっきの言い方、自信がありそうですね」

「まあねえ……。
そうそう、入り口のところで見たかい？ 無駄に自分をアピールするためかわざと争いを起こして腕っ節をアピールしていた男……」

「あつ、あのヤな感じの人ですね？」

あたしの方見てニヤニヤするから、睨んでやっただけとお」

思い出すと苛々してきたので、即座に便乗したフレア。

「脳内まで筋肉なんだろうね。あんなのじゃ、ダメ貴族のボディガードくらいにしかねないよ」

ジエイドも、品の良い雰囲気にならず、貴族嫌いの平民らしい。

「そうですね。あれよりは俺の方が、望みある気がします」

シュウも軽く笑ってそう言った。

そこで扉が開かれた。

「はいはい。じゃあ、今から1人ずつ来てもらうからな。面接的なモノやるから」

リアは入ってくると、そう告げた。まず、部屋の奥に1人佇んでいた男……恐らく剣士が呼ばれた。ガリガリに痩せているリアなど、軽く弾き飛ばされそうな長身でがっしりした体格。

「面接って、やっぱりエレイズ様とだよな？」

フレアが言うと、2人は首を傾げつつ頷くという変わった事をした。

「まあ、そうじゃないかな」

とシュウ。

「脈アリって事かな。俺達は」

ジエイドが言う。そして

「1対1なら、口説いちゃうかもなあ」

などと、嘘か本気が判らない事を付け足した。

10人目にそのジエイドが呼ばれた。

「戻ってこないから、どんな面接なのか判らないままだね」

シュウが部屋を見回しつつ言った。

そしてフレアの番。

「じゃあ、頑張って」

「うん、ありがと……」

緊張してリアの後ろに付いていく。

「そんな、びびんなっての。」

取って喰おうって訳じゃねえんだから」

笑われたが、心拍数は順調に上がる。

「んじゃ、お達者で」

明るく背中を押され、部屋に通された。

小さい部屋に、1人だけ座っている。顔は知っているがこんなに近くで見るのは初めてである。憧れの人、エレイズ大將軍。軽くウェーブした銀髪は背中 of 辺りまで届いていそうだ。座っていても判る、スタイルの良さ。そして何より、美しい顔立ち。黒い瞳、すっとした鼻、薄桃色の唇……完全なバランスは彫像のようだ。

「やあ」

思いの外、軽い挨拶が来た。

「……は、初めまして、よ、よろしく願いしますっ!」
クスリ、と笑われた。

『うわあっ……綺麗……』

「座って。フレア？」

「は、はい!」

「緊張しないでいいよ。ポケットの子は？」

「えっ、ええつと」

クーファは自ら、パタパタと出て来た。

「ちょっ！クーファ！！」

机の上に腕組みして（小さいが）堂々と立つクーファ。

「クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンだ」

エレイズはにつこりとした。

「だからクーファか。」

面接だから、わざわざ召喚したの？」

「ええとそれが……」

フレアはポツリポツリと真相を語った。

黙って聞いてくれていたエレイズは一言。

「リアに受け付けやらせて正解だった」

「……え？」

「君には凄い力があるって事。

受付の時、リアにある程度組み分けをしておいてもらったんだ。他の組も一応見たけどやっぱり掘り出し物は無かったなあ」

「でもあたし、今まで魔法なんてこれっぽっちも触れてきてなかったし……。あ、父さんの魔法書は昔読んでましたけど、ほんとにそれだけで……」

そこにクーファが割り込む。

「フレアは合格って訳か？」

「うん」

軽い答え。

「第1組の23人は全員合格。あとはやっぱりダメだった」

ここで言っていていいんですか！？　　という思いのフレアは放っておきクーファは話を進める。

「フレアは恐らく、Sランク炎属性ドラゴン族の俺を永久召喚したようなんだが。どういう訳で可能だったのか俺もコイツもさっぱりなんだ。何か判るか？」

残念ながら、エレイズは首を横に。

「こんな例、見たことない。

それに……クーファの力がここまで制限されてる訳も。Sランクドラゴンは、完全な状態で召喚する方法と何割か力を強制的に制御して召喚する方法があるけど……。ここまでの制御は有り得ない」

そして、少し考えてから言った。

「あいつなら判るかな」

「……あいつ？」

「うん。ウォーレン。頭、良いんだよ」

常日頃、のけ者にされている平民出身の大將軍2人が同期の上、今でも仲良くしているのは有名な話の1つ。

「今度聞いておいてあげる。

じゃ、面接終わり」

可愛くバイバイされ、へなっとなってしまうっフレアだった。

兎に角、良かったという気持ちで一杯だった。

合格発表。……クレマーってどこにでもいるんだねえ。

翌日、合格発表が行われた。

形だけであり、合格者は全員結果を知っている。知らないのは不合格者のみ。

「はいはい。じゃあ合格発表」

リアがさらさらと名前を読み上げる。

「以上、23名。残りはまた今度か、他の軍で頑張れよって事で」

フレアは肩をトントン、と叩かれた。シュウである。

「向こう見てよ」

笑いを堪えているらしい。

フレアが見ると、昨日やたらと目立っていた男が怒りで震えていた。

「ちょっと待てー!!」

「来た来た」

シュウは確実に楽しんでいる。

「ろくに力も見ないで、何が試験だっ！

普通の職場面接に来たんじゃねえぞ！」

すると、それに乗じて不合格者のうち何名かが声を上げ始める。

「リア副官はどうするのかな」

シユウはにこにこ、わくわくとしていた。

「よし、ちょっと待ってろ。」

文句なら、ウチの可愛い将軍が聞く！」

リアが面倒くさそうに、横に待機していた衛兵にエレイズを呼びに行かせた。

数分後。

エレイズが現れた。何となく、だるそうというか眠そうである。

「2日連続で午前中に起こさないでよ」

すごい文句を言っている。

しかしフレアは、やはり言動よりも姿に注目してしまう。寝起きそのままで、くしゃつとした髪が背中に垂れている。大きな目はとろんとしていた。胸元が大きくカットされている純黒のワンピースは寝間着か。

「文句、聞くけど」

目をこすりながら、話を聞いていたのか予想がついたのか「文句」の発信源をじっと見た。

その時フレアはぞくりとした。

無表情な美貌に隠れているものが見えた気がしたのだ。例えようもなく強い力とでもいおうか。シユウを始めとした、合格者達はフレアと殆ど同じ感覚を抱いていたが他の者は気付いていない。例の男が一瞬ばーっとしたのは単にエレイズと目が合ったからだろう。

「俺は試験方法に納得できねえと言ったんですよ！
顔見られただけで、決められちゃ困るっ」

便乗犯は更に増えている。

「顔、見ただけで判るんだけど……まあ、いいや」

微笑んだが、冷たい笑み。

氷の女王……そんな印象である。

「じゃあ君、今から君が納得できる試験してあげる。
君が合格したら、全員受け入れてあげる。こちらの不備って事になるから」

リアがエレイズに耳打ちしているのがフレアの目の端に映った。エレイズはそれを首を振って否定する。

「ま、お好きにどうぞ」

リアのそんな言葉が聞こえた。そして更に

「おい、お前ら、担架の用意しとけ」

と言ったのも聞こえた。

「エレイズ様とあいつが戦うとか？」

フレアが言うと、シュウはちょっと首を傾げた。

「戦いにもならないと思うよ？」

エレイズが即席ルールを発表した。

「そうだな……」

自分の足で、小さな円を描いてその中に立った。

「私をここから出せたら、君の勝ちだ。」

どんな手を使ってもいいけど、制限時間は……ん」

フレアを見た……何故？

「好きな数字は？」

「えっ、え……と、……5?」

「じゃあ5分。ヨーク、計って」

「はい」

近くにいた衛兵が時計を見て、カウントを始める。

「あと10秒、9、8、7、6、5」

男は勝ちが決まりとでも言うように、にやにやしている。

「4、3、2、1、開始」

男は助走をつけて、拳を引く。

「悪く思わねえでくだせえ!」

「その言葉、返すね」

男の拳がエレイズに当たった　と、誰もが思った時、吹き飛んだのは男の方だった。

「何で!?!」

フレアが目を丸くすると、シュウが小声で見解を述べる。

「多分、將軍は魔力で結界……というかバリアを張ったんじゃないかな」

「よく判るわね！」

「ちよつと、勉強しててね」

召喚魔法が余りにも有名なので、それ以外の魔力の使い方はおろそかにされがちなのだが、どちらも実践では大いに役立つ。本当に強い者はどちらも手を抜かないものだ。

「1分経過あ」

もう決まってるのに、よくやるよ……という表情でヨークという兵が告げる。

大勢の不合格者から、しつかりしろとの声が掛かる。彼らの運命も掛かっているのだから当然だ。

「くつそお」

男は立ち上がる。見かけ通り、身体は丈夫らしい。

ズボンのポケットから何か取り出す。

「おつ、魔法陣。召喚するのかな？」

かなり目がいいらしく、シュウは言った。

「それって、流石にまずいんじゃない？」

「どーせEか、せいぜいDじゃない？」

男が、さつきできた傷口の血を指につけて魔法陣に押しつける。

クーファの時とは比べものにならない大きな音、煙の中から大熊が現れた。

「おっ……大きい」

フレアは目を丸くするも、

「Dランクの土属性、獣族。大したことはないな。大きいだけというのは、術者と同じだ」

「ジェイドさん……よく知ってますねえ」

フレアは感心したように、彼を振り返り見た。

「召喚を使えるという事は、どこかの軍にいたか、資格を得たんだろうけど」

「……資格？」

「あまり知られていないけどね。

軍人になる、以外に、年に2度開催される召喚士試験に受かった者は召喚資格が得られるんだよ」

「へ……へえ」

知らないことばかりだ。

「行けえっ！」

男が大きく指さした方向へ、つまりエレイズに向かって熊が猛スピードで突進する。熊が頭からぶち当たっていくが、やはり彼女は慌てない。

「君に恨みはないけど……」

そんな悠長な事を言いながら、右手を伸ばす。

ピタリ、と熊が止まった。

ぐらつと大きな体が揺れた、と思うとそのまま横転。

「おいっ！ 何してんだ！？」

男が叫ぶも、熊は起きあがらず出て来た時と同様、音と煙を立てて消えていった。

「はい、3分経過あ」

声と同時に男は、やけになったように、また自ら突っ込む。

殴ってダメなら、掴んで投げようという安易で無駄な発想をしたらしい。エレイズの腕を捕らえ、背負い

投げの如く放り投げようとするが、やはり無意味。

何とエレイズは男の半分程しかないと思える細さの腕で男の腕を逆

にひねりあげ、円の外に叩きつけた。

まだ彼女は半径１メートルもない円の中、１歩も動いていない。

それから終了のコールがあっても、男はとうとう起きあがらず担架が使われた。

部隊分けと、その理由へわけ

「はいはい。じゃあ、合格者以外、さっさとお帰りあれ」

リアの言葉で、完全に勢いを失った、残りの不合格者　つまり担架の上の男に同調していた者達は帰って行った。

「じゃあ23名、こつちに来てくれ。部隊分けについて説明すつから」

フレアが昨日、帰ってから大慌てで調べたところによるとエレイズの軍は大きく4つに分かれていてそれぞれをエレイズが統括しているということだ。副官の2人、リアともう1人のセフィーロの隊が一般的とも言える戦闘部隊。後の2つは詳細不明。暗部などと呼ばれるものだろうか、推測した。

大広間に並ばされたフレア達。1人の男が待っていた。

「長かったな。問題でも？」

その彼がリアに言った。

リアよりは肩などがしっかりした印象である長身、長髪の彼は声も表情も物静かな雰囲気。

「おう、問題アリアリ。ま、將軍がサッパリ解決したけどな」

答えてからリアはフレア達に男を紹介する。

「こいつが俺と同じく、副官のセフィーロな。部隊長の1人だ。あとの2人は都合により今日は城内にいらなくな」

喋るのはリア、という役割分担でもしているかのようにセフィーロは黙ったままである。

「部隊分けの前に、どうやってお前ら23人を選んだか言っとくな」
リアがパチンと、指を鳴らす。それと同時に音が立って、煙と共に小さな影。

「そんな生き物いたっけ？ てな顔してる奴も多いな。
幻獣族って奴だ。高位の幻獣族になると、ユニコーンだとかフェニックスだとか、神話でお馴染みの魔獣もいるが、こいつはDランクのキマイラって魔獣だ」

緑色で、ぱつと見はトカゲやカメレオンのような姿だが目が正面に1つしかない。また尾が短い。はつきり言って不細工。

「Dランクの光属性、幻獣族キマイラ有能力、知ってるか？」

答えられる事が判っているかように、ジェイドを見た。

「自分よりも、強い魔力を持った存在が 術者を除き 近付くと表皮が赤くなる、でしたな？」

「」名答。

つまり、こいつが赤く変色した相手がお前らってこと。手っ取り早

いだろ？

逆に言えば、こいつが赤くなりや志望動機が何であれ、喧嘩したら一瞬で吹っ飛びそうなのヒョロヒョロでも合格なんだ。

今、能力がなくてもいいんだ、別に。人手は足りてるからな。成長が見込める連中ってワケなのさ」

そして、付け足す。

「俺の今の召喚法だが、召喚対象より自分の魔力が大幅に強けりやこついうのを身につけとけば指に怪我しなくても良いつつもんだ」

リアが上着の裏を見せると、たくさん、というか隙間ある限り魔法陣の描かれた布が縫いつけられてあった。

「あと、誤解されると嫌だから言っとくぜ。
俺の契約魔獣は、Aランク炎属性の獣族な」

そこで、セフィーロがやっと口を開く。

「そろそろ始めろ」

「はいはい。んじゃ、怒られたところで部隊発表。

人数分けを言つとくと、俺の隊が8人、セフィーロの隊が9人。もう2つは情報部隊に2人、隠密に4人」

名前が呼ばれていった。

フレアはリアの隊で、シュウは情報、ジェイドは隠密と折角、気安く話せると思った2人とは分かれた。

「じゃ、俺の隊と隠密は今から第1会議室で詳細説明する」

リアが言い、

「残りは第2だ」

とセフィーロが続け、それぞれ左右に分かれて歩き始めた。

「まず、俺の隊だが」

全員が会議室……どうも唯一と思われる白い内壁の部屋の椅子に座ると、リアが口を開いた。

「魔力を使った戦闘に向いてる奴が中心になってる。潜在的なモンも含め、今のところこの氷属性……つまり第3属性程度の召喚が可能な魔力を持つてる奴か、もしくは全く以て武術に向いてなさそーな奴がココ。この後、裏の魔法訓練塔に行ってもらう。そこで2人ずつ小隊分けをされて、優しい上官からもっと丁寧な説明を受ける事になる」

そこで言葉を切った。

「次に隠密だが、経歴持ちが多い。自分で判るな？能力的にはバランス重視。これは、隊長がコエーから念入りにチェックしたんだが。魔力も召喚、攻撃用、防御用、その他で必要とされるセンスが違うんだ。その、バランス。」

明日には隊長が帰ってくるが、この後は補佐官からちよつとした説明がある。大広間に戻って、そこで落ち合ってくれ、以上」

それから一同を見た。

「質問はあ？」

「あと、2つの隊は……どういう基準で？」

20代前後くらいの青年。説明を聞いた今なら頷けるが、武術には向いていなさそうな小さい身体。背は普通だろうが、子供っぽい丸顔の所為で小さく見える。

「セフィーロの方は、俺のこと逆な。これも、経歴持ち……特に剣士やなんかとして働いてた奴が多い。」

情報の2人に関しちや難しいが……俺の隣で、受付の時に黙って見てた姉ちゃん覚えてるか？」

一同、首を傾げた。

「ま、普通気にしないわな。」

あいつがぐれつつった2人だ。

あいつは不思議ちゃんでなあ……いや、悪口じゃなくて。苦労するね、あの2人」

フレアは何となく、シュウはそういう相手に苦労しない気がした。

リアに従ってフレア達は1度外に出た。城の一部、通り抜けできるようになっているところを抜けるとそんなに高くない塔が建っていた。

「ちなみにココは、全員が魔法の訓練に使うからな」

「それにしても小さくないですか？」

たまたま、隣を歩いていたらフレアが質問を投げると彼はにやりとした。

「入ったら、ビックリするぜ」

リアがドアを開ける。真っ黒な大して高くも、奥行きがありそうにもない塔の中は……。

「えっ、広い!？」

思わず、声に出したのはフレアだけではなさそうだ。外観からは想像もできない大広間を軽く越える床面積があった。

「どうなってるんですか？」

1人が質問する。

「狭い土地だから、マジックフィールドを作りだして、強制的に広げたんだ。」

ウチの將軍だから出来る事さ。……ま、ウォーレンも出来るかねー

え」

呼び捨てかいつ、とフレアは思ったが、触れないでおいた。何となく、リアのこういった自由な雰囲気は好感が持てるし。

彼もきつと、身分などが嫌いな平民出身なのだろう。

「とにかく、だ。俺はここまで。

ホラ、あの4人な」

リアが奥に目をやった。

「後は頼んだぜ！」

彼の言葉に4人は揃って低頭すると、進み出てきた。

上官から丁寧な説明。この人、頭良いんだろうな。

「第1小隊隊長、クロウです」

まず名乗ったのは、恐らく4人の中で一番若い青年。

首を隠すくらいのすっきり短い髪、切れ長の黒目勝ちな瞳。背が割と低いので、女性と見違いそうだった。

「エドワード、フレアは僕に付いてきてください」

私が第1小隊！？ と、驚くフレア。どう考えても、数字が小さい方が実力などが高い小隊に違いないのに。クーファの話がいつているのだろうか……。

「よろしくな」

隣に並んできた青年が笑いかけてくれた。

「えと……エドワードさん？」

「ああ。『さん』は要らねえって。
フレア、だな」

「うん」

小さいフレアからすると充分だが、エドワードは標準より小柄である。声と同じく、明るい印象の顔立ちで、取り敢えず人間関係の心配は無さそうだったフレア。

フレアとエドワードは、1つ上の階に連れてこられた。壁を隙間無く本棚が覆う、中央に大きな丸机のある図書館のような部屋。

「その辺りに座ってください」

クロウが示したところに2人は並んで座る。

「まず、小隊について話しておきます」

そういえば、何も説明がなかった。

「この、エレイズ大將軍指揮下の軍は約2400名。少ない方ですが、1人1人の実力を重視して選抜するとこんなものです。」

その中で、僕ら魔法戦闘部隊、通称リア隊は約1000名います。それを50名ずつ20に分けたのが小隊です」

“ここまでで質問は？”というように、2人をさっと見、反応が無いので続ける。

「小隊もまた、10名ずつ5つの班に分かれています。詳細な連絡を伝える場合、または出陣前、帰還後

の人数確認の為便宜上作られているだけです、大きな意味はありません。」

あなたたちは、この第一小隊の4班にフレア、5班にエドワードとなります。4班の班長はサラ、5班の班長はゴードンです」

責任職にいる女性が多いのもエレイズ軍の特徴と聞くと、やはりそ

うらしい。さっきの隊長4名の中にも1人、女性がいた。

「補足ですが、僕は第一小隊隊長とリア隊補佐官を兼任しています故、不在が多くなります。

その場合、第1班班長のカイが代理を務めますので覚えておいてください」

それにしても、丁寧な人だなとフレアは感心。丁寧口調の上、一切、長い説明が滞る事がない。

もともと頭がいいのか、何事も几帳面に準備する性格なのかはまだ判らないが。

「戦時でない限りは見張り当番である日を除いて、起床や就寝時間は定められていません。ただ、6時から7時には起床する者が多いです」

「そんな遅くていいんですか!」

フレアは思わず口に出してしまった。

クロウは少し驚いた目をしたが、微笑んでくれた。

「あ……その、あたし農民だったので。

夏場なんか、4時5時が基本で……」

「好ましいです」

見た目通り、だらけた生活は嫌いなのだろう。

「あの、見張りって何人くらいでやるんですか？」

エドワードが、話が止まった隙に質問した。

「2人1組が基本です。セフィーロ隊とも合わせ、計8組がそれぞれ城内外の警備をします。

交替は普通、3時間。おおよそですが10日に1回くらいとっていただきます。

見習いの期間は、班長と共に2人以上で回る事になるでしょう。前日に、集合時間などが直接伝えられます」

そして、フレアの関心事へ。

「それと、給金についても話しておきます。

月払いが基本で、見習い、下級兵、中級兵、上級兵……または各位に等しい階級の者……と額が変わります。下は30万Gから上は、100万以上となります。戦などがあつた場合は戦功により上下しますが、今月あなたたちには30万、給与されるかと」

それでも、フレアには目が飛び出そうな程の大金であつた。平民、特に農民の一ヶ月の生活費は高くて5万なのだから。

「日々の訓練も、戦前の演習など以外は強制されませんが毎日欠かさずという者が殆どです。訓練の際は、どの施設も使用できます。ここにある魔法書も、自由に読むことができます」

そして言葉を切り、2人を見た。

「因みに、僕の所見ではフレアは炎、エドワードは雷の魔法と相性
がいいようです」

「あつ、あの」

フレアが口を挟んだ。

「召喚以外の魔法って……」

「召喚魔法と同じく本を読めば　そして、自らの力量と合えば
大体、扱えることでしょう。」

判りにくい場合は僕のように銀の襟章を着けている上位兵、または
白い襟章の中位兵を見付けて質問するのも良いでしょう。用事がな
い限り、断る者はいないはずですよ」

襟章については、フレアも（昨日、慌てて調べて）知っている。エ
レイズと、副官、隠密部隊隊長、情報部隊隊長が黒、その下が銀、
白、青となる。寒色ばかりだ。軍に依って違うそうなので、やはり
エレイズの好みだろうか。

また、見習いに襟章はなく代わりに軍服着用が義務づけられる。黒
いコートのようなもので、洒落ているため、位が上がっても好んで
着用している者も多いとか。因みにクロウは、黒いロングパンツに
白いジャケットという出で立ちで襟章は細いチェーンに通して胸元
に下げている。

「僕からは以上です。」

もう少しで、4班、5班の班長が来ますので兵舎など案内してもら

ってください」

そう話を閉じると、時計をちらりと見てから急ぎ足で出て行った。仕事でもあるのだろうか。

その後フレアは、迎えに来た4班の班長サラと兵舎へ向かった。サラは、見たところ20代くらい。

フレアと同じく、堅苦しいのが嫌いなタイプらしく呼び捨てでいとまで言った。

「だってここ、階級なんて月一単位でコロコロ変わるんだから」
とのこと。

「雑用係を雇う軍も多いんだけど、ウチはそういうの一切なくてだから、部屋の掃除で今日は終わるかもね」

笑いながら言ったサラが開けた部屋の中……。

確かに、そのようだ。

物は無いが、放つとらかしだったため埃が凄い。掃除用具については、各階に共用のものがあるそうで。

また、兵舎の掃除は上級兵であろうと何であろうと整備系の当番が回ってくるそうだ。

「え、クロウさんも？」

「そうよ、てか、あの人が整備した翌日が一番綺麗（笑）。あんなに美形だけど、隙が無いから彼女できないのよお」

フレアも思わず嘖き出した。

「じゃ、何かあったらいつでもどーぞって事で。私は行くね」

「ありがとうございますあ」

サラがいなくなると、クーファがポケットから顔を出す。

「ぷはあっ！

「たたく、苦しいったらないぜ！！俺、隠れる意味あんのか？」

「あるわよ！　だって……」

エレイズに言われたのだった。

『クーファの事は、なるべく他に知られないように。ウチの上層部とかウォーレンはともかく、他の軍に知られると面倒な事になりかねないからね』

面倒な事がどういう事なのかは不明だが、將軍の指示は聞かなければならない。

「じゃ、クーファも手伝ってね！」

「は？」

「これ、窓枠のどこ頼んだわよ」

クーファに小さなハタキを持たせたフレア。自分は棚などの埃落としから。

「はあっ、お前って奴はよお……」。

クーラファンドラ・フレーム・ドラゴンにハタキかけさせた女として、歴史に残るぜ」

「やったあ」

皮肉と承知しているが、あえて気にせず。

クーファも小言を言いつつ、なかなか真面目に働いている。これから、高いところの掃除は羽根があるクーファに任せようところそり決めたフレアだった。

落ち着いたと思ったら、また不可避の問題事ですか！？

フレアが入軍してから1週間。なかなか、ここでの生活にも慣れてきた。班のメンバーも班長のサラを中心に感じの良い者ばかりだし。商人の家の裕福な平民や、貴族に奇妙なものを見るような扱いを受ける学校よりもよっぽど居心地が良かった。母、ソフィーからの手紙によると、退学手続の時、理由を知った教員の呆然としたり悔しげにしたりする様が見物だったとか。

「ねー、クーファ」

城のすぐ近くの店で買ってきた朝食を部屋で食べながら。

「何だ？」

クーファもサンドイッチを頬張っている。

「あんたって、今も戦えるの？」

「うーん、そーいや試してねえな……」。

でも万が一、俺様の本来の力が発揮されちまうとこの城どころか丘一帯が消えるからなあ」

首を傾げる。と、そこでノック。

「（クーファ、隠れて！）
はいー」

フレアがドアを開けると。

「リ、リア副官!？」

「へへっ、んな驚かなくても。

エレイズが、例の奴と一緒に来いってよ」

やはり、リアも知っているようだ。

「判りました。えっと、どこへ……」

「この敷地内で、いんや、この国で一番“安全”なところ……エレイズの私室だ」

その口ぶりに首を傾げたフレア。

「安全？ そんな、まるで……」

自分が今、危険の中にいるような気にさせられる。

「説明は向こうでな」

リアの表情、声色が固かった。

城の最上階、最深部にある黒塗りのドア。エレイズの部屋はそこだ。

リアが戸を叩くよりも先に、本人がドアを開けて2人　正確には2人と1体　を招き入れた。

「座って……長くなるから」

エレイズは先に部屋の奥にフレア達を進ませると、扉に触った。

扉が銀の光に覆われ、その光がぐるりと部屋の壁を一周し、天井や床にまで広がった。

「盗聴防止」

フレアのきょとした顔を見て、そう言つとエレイズも椅子の1つに座った。

「クーファ、出て来ても大丈夫」

その言葉を待ちわびていたかのように、クーファは黒コートの大きなポケットから飛び出した。

「ふう、いつもながら、苦しいったらないぜ！」

エレイズは口の前で指を立てた。

「自然発生的な音漏れは防げない。声は低めて」

「お……おっ」

「待ってください。何で盗聴なんて……」

「状況が変わったんだよ」

リアが真剣な声音で言う。

「状況……？」

「たった1週間で、一体何が変わるってんだ？」

クーファが大人しい声量で問うと、エレイズは苦い表情を見せた。

「変わる時はあつという間……早い話、これを見て」

エレイズが机に出したのは、政府からの令状であつた。実物を見るのはフレアも初めてであつたが、資料としては知っている。法改正の通知などの目的で、軍の統括者、学校長、その他諸々の団体の責任者に送られるものだ。

上から下へと流し読み、フレアは絶句した。

「何これ!？」

声を抑える理性はあつたものの、驚かずにはいらなかった。

それは主に、刑罰の変更についてだ。

「一般人だけじゃなくて、見習いも、平民に限っては召喚を違法とみなされる事になった」

エレイズが概要を述べた。

「それって……」

「しかも、刑罰の嚴重化。
見て……。Sランク魔獣を無権利の者が召喚した場合、最悪死刑」

フレアは自分の心配もあるが、今は別の事が頭に浮かび胸がむかついた。

「これ、従来みたく“治安維持”が目的じゃありませんよね……？」
上官2人は頷いた。

「平民って限定がある通り、平民中心の軍の弱体化、貴族の地位拡大が目的だ。
そのうち下級も召喚禁止になるかもな」

リアが言った。

「莫迦だよ。味方を弱体化させたりして……。
自らの首を絞めてる」

本当に、あきれ顔のエレイズ。

「でも兎に角、今は君の身の安全を図る」

「ど……どうやって」

リアがやっと、彼らしい笑みを浮かべた。

「コイツを受けて合格しろ」

彼が突き出したのは『召喚士認定試験』のビラ。その実施日は……。

「1週間後じゃないですかっ!!」

「できる、できる、お前なら」

軽く言うリアだが、フレアはまたもや選択不能の無茶振りか！という心境だった。

「これしか道はない。

しかも、この日程を逃せば半年後……。調査が来たら、よっぽど無理しなきゃ隠し通せない。

君をあつさり下級兵に出来ればそれが1番楽なんだけど、腹立つ法律があるんだよね。入軍1ヶ月はどのような者も見習いとして扱われなければならないって感じの法律……」

エレイズは溜息をついた。

「どうすれば後1週間で……」

泣きそうな声でフレア。

「私が個人レッスンしてあげる」

「そうですか……ってええっ!？」

今度こそ大声を上げ、上官2人とさつき怒られたばかりのクーファにまで静かにしろと身振りで示された。

「永久召喚でも、常に近くにいなきゃならんって訳じゃねえ。クーファ、お前はフレアが合格するまでこの部屋に幽閉な」

「ゆうへっ!？」

おかしな声を上げるクーファ。

「それ以外に手はないんだ。
フレア、クーファ、いいね？」

両者は頷くしかなかった……。

どうやら、一癖も二癖もありそうな同僚達。

魔法訓練塔（フレア、勝手に命名）にエレイズとフレアが入ると、そこにいた者達は驚き、大慌てで低頭した。いくら身分に五月蠅くない平民軍であっても、こういうところは流石に軍らしい姿だ。

「計られるのは知識7割に残りが一般魔法実践」

エレイズとフレアは、資料室にいる。見習いの召喚禁止令がその後伝わったようで、ガツカリしながら魔法書を返しに来る者が先日、顔を合わせた新入りも含め、何人かいた。

「召喚が出来たって事は、古語、読めるんだね？」

フレアは頷いた。

「さっき言った、知識は古語の現代語訳が中心だから。あと、召喚に関する基礎事項。下級召喚士資格だから、こんなもの」

「どっちも、大体……」

だよね、とエレイズは微笑む。

『うつうつ、綺麗!!』

余計な事を考えているヒマはないのだが。

「じゃあ、問題は後者だけだ。」

荒療治だけど、1週間で出来るようになってもらっよ」

エレイズは立ち上がると、一見適当とも思えるほど、さっさと数冊の本を棚から抜き取った。

「警備だの、何だのは全部私が断っておいてあげる。2日で読み切って」

相当な量だが……。

「2日くらい、寝なくても大丈夫」

「はい……そうですねえ」

徹夜は確かに必至だと思いつつ、フレアは部屋へその後すぐ戻り、読書に没頭した。

その頃、上官に呼び出された者がもう1人いた。

「こっちは張り出されていないけれど、もう少しで公布されるであろう法令」

手渡された書類を読むのは、ジェイド。

「ふう、移民法……ですか。

しかし隊長、よくお気づきになられましたね。言葉の訛りも、身なりに気を配っていたのですが」

「私の目は誤魔化せないよ」

苦笑するジェイドに妖艶な笑みを投げている男は、セバスチャンという隠密部隊隊長。

女性も羨むような、艶やかな黒髪、柔和な光の奥に厳しさを隠し持つ瞳。人形のように整った美貌には寒気すら覚える。

「はつきり言つて、君は即戦力であり、私が欲しいと思っていた人材の1人」

「それは、光栄ですね」

頭を下げつつ、恐縮、という雰囲気は一切ないジェイドだった。

「君が国外退去となつては、かなり困るんだ……。
だから君には、政府に対する身元隠蔽が可能である唯一の部隊に入つてもらつ」

「隠密特殊諜報部隊……ですな」

「よく知っているね」

2人は互いを疑いこそしなくとも、腹の底を見せる気は毛頭無い笑みをぶつけ合った。

「そして」

セバスチャンは、封筒をジェイドに渡す。

「初任務だ」

「これは早い……。拝見します」

ジェイドは中を読み、流石にセバスチャンをじっと見た。

「こんなことまでしているとは」

「必要なんだよ」

「承りました」

ジェイドは退室し

「ちょっと面倒くさい事になったなあ」

と、小さく呟かずにはいらなかった。

「面倒な事になってるけど、俺は移民じゃないし当分召喚の勉強する気もないから関係ないや」

張り出された令状を見て、誰もが顔をしかめる中、けろっと笑ったシユウ。それに対し、隣にいる同じ年

頃の女、情報部隊だった1人の同僚は見透かしたように笑う。

「関係ない理由はそれだけじゃないでしょ？」

「嫌だなあ、イアリス。
俺はただの家出小僧だよ」

シュウが言つと、イアリスは肩をすくめた。すると、シュウはその顔を覗き込む。

「ほら、可愛い顔が台無し」

「この上なく余計なお世話！」

品が良くせに時々、棘を出すシュウと気の強いイアリス。すぐに言い合いとなるが互いを嫌っているというより、やりとりを楽しんでいるという風である。

「とにかく、あたしには迷惑な話よ！」

シュウの言った通り、きつそうだが可愛いと、充分に言える顔をしめる。

「この国の政府って、ほんと莫迦！」

「それは俺も同感」

憧れの大將軍の個人レッスン。……こんな贅沢あっていいの！？

その夜。

「クーファって、何食べるの？」

部屋に戻ってきたエレイズ。彼女は仕事する時は別室の執務室などを使うため、クーファは時々フラリとやってくるリアが相手してくれるだけであり、ヒマを持て余していた。

「メシか！ 何でもいいぜ。」

腹減ってもー辛いつたら。寂しいしよお……」

「じゃ、これでいいね」

大將軍の食事とはとても思えないもの……その辺で買ってきた弁当を袋から2つ出した。

「今、フレアの奴はどうしてんだ？」

身体のサイズに合わぬ、猛スピードで食べ進めながらクーファは思いついて言った。

「魔法書読んでる。」

あの子なら、多分それで出来ちゃう」

「あんたはよお」

クーファは（彼にとっては）大きな鶏肉の塊を一口に飲み込んだ。

「フレアの事、どこまで見当ついてるんだ？」

「あの子には……区別が付きづらいけど、2種類の魔力が混在してる。1つは彼女自身のもの。これも、かなり強いものなんだけど、もう1つはもつとすごい。正体不明なんだけど」

クーファは黙って、暫く考えた挙げ句打ち明けた。

「あいつの親父、炎の魔法使いアークなんだ」

エレイズは驚いたらしく、クーファの半分以下の速度でノロノロ食べていたがとうとうそれを止めた。

「まさか、彼の魔力……ううん、有り得ない。本人が生存してるならともかく、死後、魔力を他の者に与えるなんて……。血縁者だろうとそんな事が」

「因みに、俺はアークの契約魔獣だった。

只の偶然で処理できるか？」

「……血筋によって、得意分野が偏る事は多いけど」

クーファは宣言するように持論を出す。

「偶然が偶然重なったなんて言い訳は納得できねえ、いや、俺はしねえ！

アークの死の事実関係が隠蔽されてるそうじゃあねえか。……何かあるはずだぜ」

「うん。慎重に掘り下げてみるよ。だけど、フレアには伏せておいて」

「……だな。試験どころじゃなくなる」

「その後もね。時が来たら、私から話す」

何か言いかけたクーファだが、エレイズの目を見てやめた。何か考えがあることは容易に察せられた。

2日後の朝。フレアは何とか、渡された資料を読み切った。5冊で、中には薄い物もあったがなにしろ初めて見る代物。

難しいといったらなかった。

寝てもいいだろうかと思っていると、ノックもせずにドアが開かれた。

「あつ」

「不用心だな。鍵、閉めないと」

フレアが驚いたので、してやったり的な笑みを浮かべたエレイズ。ここは怒らねば！と、思っただけで終わった。やはり、へなつとなる。自分でもどっかの親父かと、突っ込みたくなる。

「読み終わった？」

「なんとかあ……」

「じゃあ夕方……5時くらい。訓練塔にいて」

そう言ってエレイズが出て行った後、フレアのすることは決まっていた。

目覚まし時計かけて、寝るっ！！

5時。フレアは、訓練塔でエレイズを待っていた。眠くて仕方がないのだが、そうも言っていない。早く来てくれないと立ったまま眠ってしまったそうだ……そう思っていると、待ち人は現れた。

先日の通り、大きなざわめきと敬礼。フレアも倣う。

「じゃあ、おいで」

「はい！」

目がぱちりと覚めた。

そして顔も知らないド新人が大将軍に連れて行かれる光景を皆、ただ驚いて見送った。

「できそう？」

ズバリ聞かれる。

「試してみないと……でも、召喚の方が複雑、ですね？」

「うん、そうだね。フレアが受けるのは、下級認定試験だから、簡単だよ」

そう言いつつ、本のページを繰る。

「やっぱり、炎と相性良いと思うんだ」

「あ……クロウさんにも」

「言われた？ 彼の言う事は、大抵合ってるからね」

「へえ……」

今回、2人は書庫ではなく訓練場にいる。

「ちょっと見てて」

エレイズが掌を前方へ伸ばした。その掌周辺の空間がいきなり赤い色に染まったと思うと、大きな炎の玉が出来上がった。

「イメージが大事。」

本ばかり見てるから、貴族はダメなんだよ。書を捨て、何とやら」

フレアは曖昧に頷くと、促されるまま、同じようにやってみた。

さっき見た過程を思い浮かべる。

理論は頭に入れた。魔法とは、召喚以外は魔力の具現化である。血管と同様、普通は視認できないが魔力の流れる管が体中を張り巡らされている、らしい。それを手なら手、足なら足に集中させることから始まる。

「そうだな……自分の身体を人の形じゃなくて一本の川とでも考えてみて。流れ込む先が、その右掌」

想像する。

赤い魔力の流れる、川……。

「あっ！」

掌の周辺が赤く染まり始めた。

まだ、熱くはない。

「思い描いて……」

円盤のように赤い光が形になり始める。だが、球体にするのが難しい。

と、エレイズが四苦八苦するフレアの肩に触れた。

その瞬間、円盤が球体となった。

「今、一気にイメージが……！」

掌を下ろし、魔力の球体を消してからフレアが言つとエレイズは頷いた。

「ちょっと、手を貸したの。」

魔法の1つだけど、イメージを共有するというもの。情報部はね、まずこの魔法を覚えさせられるんだ」

「何で……ですか？」

「喋れなくなつても、生きている限り、知り得た情報を伝えられるでしょ？」

何となく、冷たいものを感じた。

そうだ、この先は死と隣り合わせの人生なのだ……と、今になって実感した。

「今のイメージ、覚えられた？」

フレアが頷くと、エレイズは微笑む。

「じゃあもう一度、やってみて」

4日後。

「もう大丈夫だね。第2属の術が使えれば、誰も文句言わない」

「はい！」

フレアは頭を下げて

「ありがとうございます！ エレイズ様のお陰です！」
と言う。

「ううん。君の実力だよ。後は、自分で精度を上げる事」

「はい」

試験当日、フレアは殆ど緊張はしなかった。午前中のペーパーテストの出来も上々だったように思える。

『実践も大丈夫！』

「受験番号0110番、前へ」

「はい」

10人が1つの広い部屋にまとめて入れられ、術を試験官へ見せる方式。下級試験だからか、10番目、最後のフレアより第2属、

炎の術を使った者はいない。

設置された円形の板で出来たターゲットを狙う。コントロールと威力を見られるわけだ。

フレアはもうこの5日間で慣れっこになったイメージ、炎の球体を思い描き魔力を放つ。

どよめきが起こった。

炎の、人の頭より大きいくらいの球体は真っ直ぐに飛び出し、砲弾のような勢いで板どころかそれを支える鉄の棒までを破壊したのだ。

『あ、やば……っ。やりすぎたかも』

リラックスはしていたが、気合いは入っていたんだと自分の事ながら今更気付いた。

やっと戻ってきた平穩（？）

それから1週間後。フレアはエレイズに呼び出された。用件は言われなくとも判っている……試験結果についてだろうと。

「失礼します！」

余り、結果については心配していなかった。それどころか、試験終了その日から一般職務に就いていたくらいに落ち着きであった。エレイズの私室に入る事の方が、よっぽど緊張である。

「入って」

軽い返事に従ってドアを開くと、リアもそこにいた。

エレイズの正面、デスクの上にはクーファが偉そうに腕を組んで立っている。クーファとは2週間ぶりだ。

「判ってたとは思っけど、合格だよ」

「おめでとさん」

エレイズとリアにこう言われると、心配などしていなくともホッとした気持ちとなった。

「ま、俺様を召喚したんだ！
これ位は当然つてもんだよな」

「何であんたが偉そうなのよ」

フレアは思わずそう言ってしまった程、クーファは偉そうに頷いたりしている。

クーファは構わず、パタパタと飛び上がってフレアの肩に乗った。

「もうコソコソしないでいいんだな？」

クーファの確認に、エレイズが頷いた。

「ただし、Sランクドラゴンって事は内緒にしておいて。噂が城外にまで広まると、厄介だから」

との忠告も。

「ふう、有名なのも辛いぜ」

クーファがわざとらしい溜息をついて言うから、フレアは渋い顔をした。

「まあ、あんたがフレイム・ドラゴンだなんて言われても誰も信じてないだろうけど」

「んなつ」

「せいぜい、Dのリザードかな」

リザードは、ドラゴン族最下位の種族。サイズはクーファくらいのものから、数メートルの大型まで様々。

「オーイおい、フレアあ、いくら何でもそりゃ、俺の心がギタギタに……」

エレイズとリアは揃って、噴き出すのを堪えながら小さいドラゴンと小さい（背丈の）女の子の口喧嘩というか、言い合いを見ていた。

「ふーっ、これで日常がやってくるわ」

自室に戻ったフレアは、ばたんとベッドに倒れこんだ。

「何だ、適応が早いじゃねーか」

フレアの頭の横に、ちょこんと立ってクーフア。

「へ？」

「大將軍の部隊に入って、召喚士資格を得て過ごす日々を日常と呼ぶとはなかなか肝が据わってきたな！」

「うっ……」

さらりと口から「日常」という言葉が出て来たが確かに、1ヶ月と少し前の自分が見たら異常と言うに違いない状況にいるのだ。

「今日は見回りの当番じゃないし……。訓練塔、行こうかな」

ぐいっと上半身を起こし、それから立ち上がった。

「えー訓練!？」

「何よ、クーファ。どうしたかった訳？」

「いやー、外に連れてってもらえたり……」

「ペットみたい」

フレアは思わず笑った。

「しっ、仕方ねえだろうが! 流石に単体でフラフラ外に出ると、目立ってしょうがねえしよお」

「じゃあ、庭の方にもいく？」

フレアは笑って言った。

「あたしもまだ、ちゃんと城内歩き回ったことないし。丁度いいか」

「おお!」

クーファは嬉しそうに飛び上がった。

「いやー、お前が戻ってくるまでずっと室内にいたからもう、ガツチガチだよお」

「ああそっか」

何だかんだと忙しく、クーファの状況を忘れていたのでちょっと申

し訳なかったかなと反省したフレアだった。

城内をフラフラ歩くと、すれ違う人は皆、クーフアについて驚く。イレイズの案で、召喚資格を得たから練習しているのだと答える事になっている。そうすると、誰でも納得してくれる。見習いの身分でこうしている者は少ないが、白い襟章の中級兵くらいになると、フレアとクーフアのように日常から一緒にいる場合は多いようだ。

「あ、フレア」

「シュウ、久しぶり！」

同じ年代の彼とは、入隊試験合格発表の日以来だった。

「あれ、そっちは？」

「あたし、召喚資格を取ったんだ。練習中ってとこ」

「へえ」

じつとクーフアを見たシュウは、意味深に笑ってフレアに囁いた。

「Sランクドラゴンなんて、やるね」

「え！」

彼は明るく笑う。

「ま、秘密なんですよ？ 黙ってるから安心してよ」

「何で判ったの??」

「俺、どうやら魔力探知が得意みたいなんだよね。ロザリア隊長…情報部隊の隊長はそれを見抜いて俺を入れたみたい」

「えっと、つまり……召喚獣の強さが見るだけで判るの!？」

「まあね」

尊敬の目を向けるフレアに、シュウは苦笑した。

「ここまでではつきりと判るのは、その子の魔力がめちゃくちゃ強いからだよ。

ていうか、フレアの方が凄いんだって」

「そうだぜフレア！ お前はこの俺様を召喚した、つつ自覚が足りねえぜ！」

クーファが言う。

「うーん、だって……こんな小さいと」

「オーイおい！」

シュウはそんな2人を見て笑いつつ、声を低めて尋ねた。

「何て種？」

「クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンだっ！」

「クーファ、声大きい！」

シュウは目を輝かせた。

「うわー、第2属！　すごいなあ！
クーファって呼んでるの？　俺も呼んでいい？」

「ま、いいぜ」

久し振りに、然るべき感動の視線を受けたクーファはかなり嬉しそうであった。

「あ、そろそろ戻らないと。イアリスに怒られる……じゃ、ばいばい」

シュウは名残惜しそうにクーファを見ると、急いだように廊下を駆けていった。

持つべきものは、おしゃべりで情報通の友人。

「しかし、こうしてみると、この城はあんまでかくないな」

「え？」

クーファがしみじみと言うので、フレアは驚いた。

「充分広いじゃない！」

「おうおう、田舎者らしい発言だな」

ムツとしたフレア。

「他の城にいた事、ある訳？」

「おうよ。」

ま、いたというよりその上空を旋回してたって方が正しいけどな。
お前、ガルブレイク城って知ってるか？」

「知ってる。英雄ガルブレイクが、神の如き力を持った召喚獣を操
つて、単独で敵軍を一掃した伝説的戦い……って、まさか」

クーファは腰に手を当てて、胸を反らして得意げに鼻を鳴らした。

「そいつは、俺様の力さ」

「ええっ!？」

召喚獣に寿命がないという話は知っている。だから、歴史にクーフアが登場してもなんら不思議はない……はずだが、やはり驚いてしまう。

「もしかして、だからシユウはあんなに感激してたのかな」

「だろうな！」

まあ、あの歴史に関して言うത്真実と記述が微妙に違うな」

「どう違うの??」

「ガルブレイクの奴は確かに、召喚の才能はとんでもなかったが俺を召喚してから2分も保たずダウンしてな。

『クーラファンドラ・フレイム・ドラゴン、あとは頼む……』なんて言って、終戦まで寝てたぜ。だから、あいつと俺が協力して敵軍を追っ払ったってのは、でっち上げた」

「そ、そんなあ」

フレアは普通の者がそうであるように、ガルブレイクを英雄として尊敬していた。この、当事者の語る事実は些かショックだった……。

その後、城内をだいたい一周してしまったので、フレアは自室に戻った。

明日の夜は、見回りの仕事があるので早めに寝るとしたのだった。

翌日、フレアはクーファを置いて魔法の練習をすることにした。下級レベルとしては群を抜いた威力であっても、あくまで下級。中級以上でなければ実戦では役に立たないといわれている。

時間は充分に掛けられるので、先日見付けた本に従って地道な手順を踏むことにした。

やはり大事ななのは、頭の中に具体的な形を浮かべることなのだが、いきなり形にせず空間を光らせる事が出来たらその光を少しずつ広げていくようにする。

球体ではなく、ぼんやりした靄のようなものがフレアの突き出した右手を中心に薄く伸ばされるように広がる。魔力の色はやはり赤である。クロウが言った通りに、フレアは炎の魔法と相性が良いらしかった。

『血筋って、関係あるのかなー』

と、少し思った。もし、自分がいつか「炎の召喚士」と呼ばれることとなったら、嬉しい。

靄がだいたい、フレアを中心に2メートルくらい広がったところで、イメージを強くする。

一番簡単な形が球だが、それはあまり実用的でなく威力は期待できない。だから、フレアは様々な例を見比べた結果、目指す形を決めていた。

渦の形である。

言ってしまうば、炎の竜巻。安定させることができれば、効果範囲は相当に広い上、相手の攻撃に防がれたり破壊されにくい。

目を閉じて集中した。

薄く広がっていた赤い魔力が、熱を発しはじめて炎となる。だが、中心のフレアには一切影響がない。靄が、フレアの正面に集まり始め、だんだんと渦を巻き……そこで消えた。

「あー、もうっ！」

その後、何回もやったが、いつでも同じところで止まってしまう。力量が足りないのか、集中力の問題があるのか、それとも回数の問題なのか……。

「うーん、イメージを固定化させすぎてるのかもねえ」

「そっか……えっ？」

フレアが、驚いて勢いよく振り返るとそこにはシュウ……。

「あっ」

気付かなかった。

「えっと、どういうこと？」

いたものは仕方ないので、フレアは驚くのをやめて話を聞いてみる。

「うん。完全にイメージが出来上がってる所為で融通が利かなくな

ってるんだ。

もう殆ど出来てるのに、自分でそれを否定しちゃってる」

「……ええと？」

「100%じゃなくて、70とか80%で許してあげたら？　ってコト。

俺の見たところ、フレアの魔力って相当な強さだから。多少不完全で不安定でも、かなり実用的だと思うよ」

「えっ……うん。

シュウ、得意そうだね」

「まあね」

そう言った彼は、簡単にピンと立てた指先の上に金色の光でできた球体を浮かべた。それは少しもぶれず、宙を浮いている。

「うわ、すごい！

小さい形ほど、コントロールが難しいのに。しかも光属性！」

フレアが無邪気に感動を示すと、シュウはちょっと得意げに微笑む。

「まあ、得意分野は色々だから。

俺、ひまだから練習みてあげようか？」

「うん、ありがと！」

魔法訓練塔の、訓練部屋の中心に巨大な炎の渦が出来上がった。
ぱっと消えたと同時に、フレアは笑顔で振り返った。

「出来たっ！　ありがと、シュウのお陰だよっ」

「出来る子は教えがいがあるよ」

「うわ……2時間も……。ゴメンね、付き合わせて」

フレアは時計を見て、しまった、という顔をした。

シュウはそれを見て、安心させるように微笑む。

「最初に言っただけど、今日は仕事なくていい日だからね。問題ないよ」

「仕事……か。情報部って、どんな仕事してるの？」

「スパイから送られてくる情報の整理、近隣諸国の“噂話”の選別と真偽の調査。あと、地味な書類整理……。まあ、新人はこればかりだね」

「へえ、大変そうだね」

フレアの言い種に、シュウは噴き出した。

「他人事みたいに。」

戦時に一番大変なのは戦闘部隊なんだから。戦時以外でも、情報部が戦闘部隊の協力を扇ぐコトもあるってウチの隊長が言ってたし」

前半は当然の話なのだが、後半については初耳であった。多分、階級の高い……というか様々なところの訳が判っている人が行くのだから、見習い期間の段階では話されないのだろう。

「炎属性の魔法なら、リア副官が詳しいんだろうな」

「えっ、そうなの？」

初耳だ。頭髪の色がそれらしいと思ったが。

「Aランク炎属性獣族の、馬型召喚獣が契約魔獣。すごく能力の高い召喚獣だね。あの人は、炎の騎士って呼び名もある」

「……く、詳しいね」

「情報部の資料を勝手に見る権限が出来たからね。他にも色々判るけど……。まあ、あんまり口外していると怒られるな」

「暇そうにしてたら、リア副官にアドバイスもらったら？」

「そんな恐れ多い！」

シユウは本気で言うフレアを見て、思わずといった風にまた笑った。

「大丈夫じゃない？ フレア、あの人に気に入られてるよ。副官の業務は、セフィーロ副官がこなす事の方が多いいみだし」

「それも情報部の？」

「これは、俺の観察結果」

フレアは曖昧な表情となった。

「いやあ、後半はともかく……」。

前半については、あたしに問題がありすぎるってだけじゃないかな？」

クーファの件を中心に。

「そう？」

最近、驚くような事ばっかでどうしたらいいか……。

その日の晩は、城内警備の担当であるから集合場所である2階渡り廊下へ行った。大きな窓がある渡り廊下は、城内のどこもそうであるように飾りといえば狼の頭を摸した燭台が並ぶだけ。自分が毎日を送る城の一部なのだが、真っ暗な廊下に狼が浮かび上がると、少しゾツとしてしまうのだった。

「遅くなりました」

「いえ！」

フレアはぼんやり、今日の相方が来るのを待っていたが声を掛けられると背筋をピンと伸ばしてしまった。月明かりに浮かび上がる、綺麗な細面……クロウだ。

フレアは、この人はいつ休んでいるのかと思う。時々、城内で見かけるがいつでも仕事中。

部下に指示を出しながら歩いていたり、スタスタ歩きながらも書類に目を通していたり。そして、見回りも清掃も決して休まない。少年と表現したくなるほど、細いこの身体のどこにそんなエネルギーがあるのかと、感心してしまう。

「リア副官からお聞きしました。資格取得、おめでとうございます」

「あつ、ありがとうございます！」

クロウは柔らかに微笑むとすぐに

「今日は南棟の1階から3階の見回りです」

と、どちらが次いでか判らない調子で追加した。

「はい」

「そういえば、……異状があつた事はあるんですか？」

無言でひたすら歩いていたのに辟易してきた為、フレアは前々から思っていたことを質問する。

「ええ。僕は話を聞いたというだけですが……他国の密偵が見付かつた事があるそうです。」

まあ、この国の場合、この軍とウォーレン大將軍の軍を攻略してしまえば他に畏れるものはありませんから。驚く事でもありません」

「最近は？」

「聞きませんね。しかし、貴重な情報などを大量に管理していますし内部密偵がいないと決めつける事は出来ませんから」

内部密偵という言葉に、フレアは思わず緊張した。こういうことがあると、ここはやはり軍なのだと実感する。……むしろ、こんな話

が無ければ大した緊張感のない日々。

学校に通っていた時の方が精神的に疲れていたかもしれない。

「……疑われてる人とか、いるんですか？」

「僕は聞かされていませんが。取り敢えず、今回の面接を通じて入軍したあなたたちは全く心配されていません」

「え？」

「エレイズ様の人を見る目は確かですので」

とにかく、エレイズは深い信頼を得ているようだ。上官の話を聞くといつもそれが伺える。

「見回りをしながらする話でもないのですが」

と、断りを入れてクロウは話を変えた。

「来月から早くも、あなたを見習いから正規兵に昇格させる事をエレイズ様とリア副官はお考えになっています」

「ええっ?!」

ここは、真夜中の廊下であるという事はすっかり忘れて大声を上げてしまった。

「辞退は勿論、可能です」

「あ、あの……」

「はい」

「あたし、まだ軍の事これっぽっちも覚えてないんですが」

クロウは頷いた。

「普通は1年以上を掛けてじっくりと覚えるものですから、特に説明などされませんので当然でしょう。」

もし、辞退の理由がそれだけというなら、心配は要りません。リア隊補佐官の僕が責任持って説明します」

フレアは、これ以上クロウの仕事が増えても大丈夫なのかと余計な心配をした。

クロウは続ける。

「急で申し訳ありませんが、今週末までには返事をお願いします。出来る限り、リア隊執務室にいるようにしますので」

「はい……」

そのあとは、大した会話も無く3時間が過ぎて交代の時間となった。

「じゃあ、お疲れ様でした」

フレアが丁寧と言つと、やはり

「お疲れ様です。おやすみなさい」

と、丁寧な返事が返ってきた。

「いいじゃねーか！ よつ、出世頭っ！！」

「そんなこと言うとは、思ったのよねエ」

翌日、クーファに昨晚の話をしてみると予想通り彼は大賛成をしたのだった。フレアが思うに、自分の召喚主が見習い兵というのが意識的にか無意識的にかは不明だが、気に入らないのだろう。

「まあでも、召喚成功と初級レベルの魔法使用可能ってところで下級兵の条件は満たした事になるのよねえ」

クーファは大きく頷く。

「むしろ、俺様を召喚したんだから飛び級で上級兵になってもいいくれーだ！」

「だ・か・ら、あんたがSランクドラゴンって事は秘密なの！」

「それがなんだかなあ。エレイズの奴、何を心配してんだ？」

腕組みして考え込んでいるクーファ。

「それは……」

「それは？」

「何でだろ」

「ほらな。今までならともかく、召喚士の資格を得た今、何の心配がある？ 単純に、物凄い才能の召喚士で通しても悪いことあねえぜ」

フレアは思わず唸った。

「でも、気安くエレイズ様に聞きに行く訳にはいかないし」

「戦時中でもないんだ、暇してんだろ！ 俺が……幽閉されてた時も、毎食部屋で食ってたしよ」

「そういう問題じゃないのよー。わっかんないかな」

「わっかんないね！」

フレアは溜め息をついた。

「真っ赤な副官は？」

「リア副官？ うーん」

エレイズよりは小指の爪ぶんくらいは気安いが……。

「い……いつか聞いてみる」

「なるべく早くしろよな」

「うーん」

クーファに急かされたものの、決心が着かないままズルズルと日々が過ぎる。だが、そうしていると下級兵昇格の件についての締め切りがやってきてしまった。

「よし、下級兵になるっ！」

「よく言ったぜフレア！ま、あんまカッコイイ宣言じゃねえけどな。下級ってところがよ」

「それでも、とんでもない話なんだって。未だに信じらんない」

「グダグダ言わず、行ってこーいっ！」

フレアは緊張を既にしながら、リア隊の執務室に行った。

「失礼します」

「どうぞ」

クロウの声が返ってきたので、ドアを開いた。

「ええと……」

何と切り出せばいいか迷っていると、クロウの方から

「どうするか、決めたんですね？」

と先を促してくれた。

「はっ……はい。」

あの、あたし……正規兵にならせて頂きます！」

クロウは微笑んで頷いた。

「その返事を聞けて安心しました。それで、正規兵に必要な軍の事を説明する役は当初は僕がする予定だったのですが。リア副官が請け負ってくださいましたので」

「ええっ?!」

「明日の午前10時にまた、ここへ来てください」

フレアは驚くのをなんとかやめて

「はい」

と答えた。

リアに話を聞く機会が向こうからやってくるとは思わなかった。

予想だにしていなかった大事に巻き込まれているらしい。

翌日、午前10時。執務室へ行ったフレア。既にリアが待ち構えていた。

「よし、来たな」

何をするでもなく、椅子の背にもたれていたリアは勢いをつけて立ち上がった。

「色々と昇級以外の質問もあるだろうが。まとめて聞くから、ちょっと移動するぞ」

「は、はい！」

何でもお見通しらしい……。

見習いの身分で、もはやお馴染みとなってしまったエレイズの部屋へ通された。

「あたしみたいなのが、ちよくちよく入ってて他の人達が怪しみませんか？」

フレアが率直な心配を口にする、待ちかまえていたエレイズが小さく笑う。

「大丈夫。私、割と自室に人を呼びつけるから」

「あ……そうなんですか」

「先に、昇級の件を話すね」

エレイズは簡単に説明した。

「この軍の構成はもう判ってるよね？ 正規兵になると、全部で4つある部隊の仕事を部隊の枠を越えて任せられるようになってくる。例えば、情報部隊の護衛役とか隠密部隊の人数調整とか……ね。特に、セフィールの軍と合同で動く事が多くなるからそのつもりで。まあ、緊張する事でもないけど……」。

また、正規兵は1番下が5人隊長という事になる。つまり、君には来月から4人の部下が出来るわけだ。一緒に入った見習い連中の4人となると思うけど……もし、上下関係が嫌なら気にしないというのもアリだよ。各軍の隊長はセフィール以外、私の事、呼び捨てだしさあ……」

ちよつと不満げにリアを見たが、彼は素知らぬ顔。

「また、見回りなんかの仕事を取り仕切る立場にもなってくる。城内図は、悪いんだけどなるべく早く暗記して。それから、テレパスの魔法を覚えてもらう。知ってる？」

フレアは頷いた。

「魔力での対話ですよね？」

「うん。見回りの時は、常に私にテレパスを送れるようにしておいてほしい。で、何かあったら即座に呼ぶようにって決まり。フレアなら、1日で出来るようになるから」

フレアの事なのに、何故かエレイズが自信満々だ。

「これくらいだっけ？」

エレイズはリアを見た。

「ま、そうだな。後は、口で言うよりやってみた方が早いな」

「うん。ウチの軍、あんまり軍規とか厳しくないから、多少の事はご愛敬で済むよ。フレア可愛いし、その辺は大丈夫」

「ええっ?!」

「ご愛敬で済むというのにも、エレイズに可愛いと言われた事にも「ええっ?!」であった。

「それから……気になってる事があるんでしょ？」

フレアは一気に、緊張感を持った。

「はい……。あの、どうしてクーファの事を……神経質と言ったら、言い過ぎかもしれませんけど、隠しておく必要があるんでしょ? もう、あたしは召喚士資格を得たわけですし。それと、以前から

將軍が仰ってる、『厄介な事』とは？」

エレイズは頷いた。

「当事者の１人だから……今から、極秘事項を話すよ。この軍では私と、副官２人と情報部、隠密部隊の隊長しか知らない話だ」

フレアは、予想だにしないほど話が大きくなったようで反応が出来なかった。

「ウラデイスって大將軍……判る？」

「は、はい」

貴族出身の大將軍で、実力で大將軍の位を得た内の１人。下級貴族なので、そんなに家柄が良いとは言えない。無論、平民と比べれば天と地の差だが。

「彼が、謀反を企んで動いている可能性が高いんだ」

「……は？」

「何年前から、彼がそれを意図して動いていたのかは判らないんだけど……。ウチの隠密部隊が先日、証拠となりうる情報を持ち帰ってきたんだ。彼は、実力で今の地位を得たわけだから、そんな事をする必要はないのに多額の賄賂を３人の能無し貴族大將軍に送ってる。もう１人の貴族將軍……ラファインには手を出してないみたいだけど。まあ、あいつは清々しい程の清廉潔白人間だから無駄だと思っただろうね」

エレイズの発した清廉潔白人間という言葉は、悪口ではない。寧ろ、感嘆を込めているようにフレアには聞こえた。そして、そのラファイン将軍がエレイズ、ウォーレンと親しくしている唯一の高位貴族であると思い出した。

「あの、それがどう関係して……」

「謀反を起こすには、力が必要でしょ？」

「あ……、まさか！」

フレアはエレイズの言いたい事を察して、そして顔色を悪くした。

「あいつは、恐らくこれから……どんな手を使ってでも優秀な人材をかき集め始める。特に、Sランクドラゴンを召喚できるような強者をね」

「……っ」

「お前が、クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンを召喚できる実力を持った者だとあいつが知ったらまず、狙ってくる」

リアが深刻な表情で言った。

「エレイズやウォーレン、それからラファイン、各軍の重役達は力ずくでも言うことを聞かせるのは難しい。しかしだ。まだ軍に入っただばかり、実戦の経験はなし。……なんていう黄金の卵を見付けたらそりゃあ、ほうっっておかねえだろ？」

フレアは頷くしかなかった。

「でもあたし、何を言われたって、そんな人に協力しませんし、この軍を離れようなんて考えません！」

「此の世には、禁術ってのがあるんだ」

リアの声がいつもより、低い。

「例えば、記憶の改変、精神の乗っ取りなどなど」

フレアは身震いした。

「だから、今は兎に角、君の力を隠す事が大事なんだ。それと、さつさと強くなつて高等魔術書の閲覧資格を得てもらいたい。君は今、下級魔術師だから。第3術書までしか閲覧権が無いからね……それだと、さっきリアが言ったような禁術への対抗魔術を知る事が出来ない。私が教える事も出来ないわけじゃないけど、それは違法だ。ちよつとした法に触れる事ならちよこちよこやってるけど、こついうものは隠しづらい。私が全権剥奪にでもなつたら、それこそアウトだし。」

判ってくれた？」

「……はい」

エレイズは、すっかり沈んでしまっているフレアの肩に手を置いた。

「大丈夫。君が自分で自分を守れるようになるまでは、私達が君を守ってあげるから」

リアも頷いていた。

「ありがとうございます……」

フレアは1つ深呼吸して、気を取り直した。

「この事は、クーファに説明してもいいですか？」

「こっそりね」

エレイズは頷きつつ言った。

予想だにしていなかった大事に巻き込まれているらしい。(後書き)

なんかシリアスになってきてしまいました。
悪い癖ですorz

導き出された結論には疑問も多く。

「よお」

迎えに出て来たリアに軽く手を挙げて挨拶した黒髪に紫の瞳を持つ男。どこをどうとつても端正な顔立ちだが、表情の効果で気安い雰囲気に見える。リアよりも背が高く、引き締まった強さのうかがえるスマートな体つき。

「どーも」

どうしてか、リアにはいつもの彼らしい愛想の良さというか、お気楽な感じがない。

この男 エレイズと肩を並べる実力を持つ平民出身大將軍ウォーレンを相手にすると、リアはいつもこうだった。

「まーだ怒ってんのか」

呆れたようにウォーレンはリアの顔を覗き込んだ。

「よく考えてみるよ！」

あいつと2人きりになって、口説こうと思わない男がいるか??？」

「たくさんいるぜ」

ふん、とそっぽを向いたリアは背を向ける。

「それではウォーレン大將軍、ご案内致します。
くれぐれも間違った真似をなさいませんよう」

当てつけのように普段は使わない敬語で言つと歩き始めた。

「リアの奴、まだ怒ってんぜ」

エレイズの部屋に通され、椅子にどかっとな腰を下ろしたウォーレンは彼女を見た。

「私も危うく、あんたへの信頼を失うところだった」

ちょっと冷たい目でエレイズは言った。……もう失っていきそうな雰囲気であるが。

「そう言つなつて！ どうだ、あの時の続き……」

「リザを呼ぶよ」

「勘弁ッ！！」

反応は早かった。リザとは、ウォーレンの副官の名前である。

「で、本題なんだけど」

「変わったガキがいるんだって？」

エレイズは口止めをして、詳細を語った。フレアとクーファの事だ。

「ほう……そいつは驚きだな。」

召喚未経験者がSランクドラゴン……」

「しかも、恐らく永久召喚だ」

「魔法書なら、ありったけ読んだが。そんな例は知らんな」

「そう」

エレイズは少し残念そうに溜息をついた。

「理不尽だが、そのフレアってのがとんでもない才能を持ってた……で片付けるしかないんじゃないか？」

「とんでもないといっても……」

「ああ、その顔はわかる。」

普通、1人の人間が持ち得る魔力量の限界を超えてる……Sランクドラゴンの永久召喚なんてな。

俺の契約魔獣がSランクアクアドラゴンなわけだが。その子の魔力は俺より何十倍や、何百倍も強くなきゃならん。どうなんだ？」

「そんな感じはしない。」

たしかに、強いことは強いけど。私よりも弱い。高く見積もっても、なりたての上級魔法使い」

「何が何やら、だな。……ったく」

「会ってみる？ フレアとクーファ」

「……そうだな」

フレアはエレイズの部屋に呼び出される時の常より何十倍、何百倍も緊張していた。ウォーレン大將軍が来ているというではないか。

「リア副官……」

「んあ？」

「ウォーレン大將軍って、どんな方なんですか？」

リアはすると、顔をしかめた。

「魔法使いとしての実力は天下一品で、頭もサイコーに良い、が……」

「が？」

「女たらしのお軽いチャラ男だ。気を付けろよ」

「え……ええっ！？」

フレアが驚いている間に、エレイズの部屋の前に辿り着いた。リアが軽くノックした。

「入って。リアは仕事に戻っていいよ」

ちよつと不服そうな顔をしたリアだが、何も言わずフレアに軽く手を振ると去っていった。

「失礼します」

フレアが部屋に入ると、ドアを背にして座っていたウォーレンはぐつと上半身をひねった。

「ふーん、本当に子供か……魔力も、うん、エレイズの言うとおりだな」

勝手に頷いたり、首を傾げたりしている。

「コレがウォーレンね、フレア。
クーファ、出て来て良いよ」

エレイズが言うと、軍服のポケットからクーファが顔を出した。

「へえ、お前がウォーレンか！
ふんふん……ドラゴンの^{ニオイ}気配がすんな」

「おつ、判るのか」

ウォーレンは少し目を驚かせた。

「俺の契約魔獣は、スウィンドーラ・アクア・ドラゴンなんだ」

「ほう、あいつか！ 水属性とはどうも気が合わねえんだよなア」

「ふーん、そうなのか」

クーファの存在に一切戸惑わず、日常会話の調子で話し始めたウォーレンはやはり、ただ者ではないなとフレアは思った。

「見ても判らない？」

エレイズが言うと、ウォーレンはあっさり頷いた。

「だがお前……ええと、フレア。妙な魔力だな？」

「……え？」

「なんつつか、2種の魔力が混在してるような。誰か、とんでもなく強い魔法使いに魔力授与されたか？」

クーファとエレイズは顔を見合わせた。フレアはそれに気が付く。

「何か……ご存じなんですか？ エレイズ様」

「クーファと以前に話したんだけど、君が持つ魔力と、ウォーレンがさっき言った魔力は根っこのところが凄く似てるんだ。だから、突拍子もないことは承知で1つの仮説を立てた。それは、君の父親アークさんの魔力なんじゃないかって」

フレアは思わず、ぽかんとした表情でエレイズを見た。しかし、ウォーレンの方は納得した表情。

「成る程、アークさんか！」

あの人なら……俺やエレイズの知らない魔法を知っててもおかしくない。SSランクの魔法書閲覧権を持つてた人だからな」

「え、それって？」

ウォーレンが説明する。

「SSランクの魔法書の閲覧権は、当然ながら俺もエレイズも持っていない。国家試験で最優秀成績を収め、魔法開発でも相当に優秀な成績を収めたと認められた者にのみ与えられる特権だな。魔法書なんて、閲覧可能なものを全て暗記してるようなレベルだ」

フレアは、それはそれは驚いた。

「……知らなかった」

「お、俺もだ」

クーファも同じく、啞然とした顔をしている。

「だから、……どんな魔法なのかは判らないがフレア、お前に起こってる様々の不思議はアークさんが仕込んだ事と考えて差し障りないだろ。術者の死後も続く魔力授与、Sランクドラゴンの永久召喚」

ウォーレンはそう、結論付けた。

「父さん……そこまで凄い人だったんだ」

「ちなみに俺も今年、挑戦するがな」

と、ウォーレン。

「落ちちゃえ」

「エレイズ、お前な〜！」

「あ、でもウォーレンが受ければSSランクの魔法書を調べられるのか。じゃ、前言撤回。フレアの為に頑張って」

「俺の事はどうでもいいのか！」

「うん」

「ちょっと、待てよ」

クーフアが、難しい顔(?)をして口を開く。

「俺は確かに、アークがその資格てえのを持ってたのは知らなかった。けどよ、あいつの為人ならよく判ってる。あいつは、決して戦いやらなんやらは好きじゃなかった。

だから、そんなあいつが可愛い一人娘に、自分と同じ道を歩かせようと思えるか？ 母ちゃんと田舎でのびのび暮らしてくれって願うような奴だと思っぜ」

フレアは思わず息を飲み、エレイズとレインは顔を見合わせた。

「理由、か。問題は」

エレイズが首を傾げる。

「何か必要があつたって事だな。……自分が死んだ後を心配してた」

「まさか、ウラデイスのことをその頃から知ってた？」

エレイズの呟きに、全員がそちらを見た。

そして、脳裏に1つ……全く同じ仮説が浮かんた。

「父さんを殺したのは、ウラデイス？」

「その可能性は高い。陰謀を知ったからアークさんを殺したのか、逆に話を持ちかけたところ断られたから殺したのか。もしくは、計画の妨げになるからと殺されたのか」

ウォーレンが淡々と動機を挙げ連ねる。

「最初の可能性が高いね。」

ウラデイスの陰謀を知ったと同時に、いつか自分が殺される事も考慮に入れてフレアを守ろうとしたんだ」

「え？ あたしを戦わせようとしたんじゃない？……？」

「そうじゃない。」

多分アークさんは、自分に代わってクーファにフレアを守らせようとしたんだ。魔力の事もそう……。大きな魔力は、それだけで身を守るから」

「凄い人だな」

ウォーレンが感嘆を込めて言う。

フレアはしかし、小さな声で呟いただけだった。

「そんな事するより、生きててほしかったなあ」

部下を連れて見回り。正規兵としての初仕事。(前書き)

骨休めっぽい話ですね。

部下を連れて見回り。正規兵としての初仕事。

それから1週間後。くよくよと考えるのは性に合わないフレアは、すぐに気を取り直した。エレイズが保障した通り1日でテレパスを使いこなせるようになって教えてくれたサラを大層驚かせた。また、城内図も殆ど間違いなく覚えたということで今日から見回りの代表を務めることになった。2人の新入り……つまり、同期と共に回る。

「あたしの事、呼び捨てでため口、でいいからね？」

フレアはそう前置いた。

「同期だしさ」

「いいんですか？」

ちよつと首を傾げたのは、小柄な青年。20代の始めくらいだろうと思われる。丸顔で、目もくりっとしているから平均的な身長なのだろうが、小さく見える。

「うん」

フレアがすぐ頷くと、その彼は小さく笑った。

「じゃあ、そうするね。僕はロズ。よろしく願いします、フレア隊長」

「うーん、隊長って慣れないなあ」

「俺はスペルグ。どうぞよろしく」

そう名乗った方は、ロズと違って余り、隊長へのため口には抵抗を持っていないようだ。

ロズよりも頭1つは背が高い青年……年も、ロズより上だろう。体格も、リア隊の者にしてはがっしりとしていて、よく日に焼けた顔は爽やかな印象。

「よろしく。……じゃ、行こうか。」

今日は2階の東側一帯の担当ね」

フレンドリーな始まりであったが、やはり初めて人の前に立つのでフレアも緊張している。まあ、何も起こらないだろう……と自分にこっそり言い聞かせるのだった。道さえ間違えなければ、大丈夫。間違えたとしても……初めてだから、まあ、確かにエレイズの言ったとおり“ご愛敬”で済むだろう。

「しかし、すげーよな。俺達と同期でもう、5人隊長なんてさ。召喚士資格も、持ってるんだろ？」

スペルグが歩きながら話しかけてきた。

「あ、うん……。何で知ってるの？」

召喚士資格を得たという事は、別に誰にも話していないのだが……。

「誰から聞いたっけなア。ほら、人の口に戸は立てられぬって言うだろ」

「そうみたいね。エレイズ様が言うには、この軍で下級召喚士に任命されるより召喚士資格試験で下位召喚士の資格を得る方がずっと簡単なんだって」

ロズは頷いた。

「どこよりも……同じく平民軍のウォーレン大將軍の軍よりも、昇級試験が難しいって話だからねえ。ここの軍」

「年末に1回だっけか」

「そうそう。僕は挑戦も無理かな」

「俺もまだだろうな、うん」

フレアは2人の話を聞きながら、それは自分の事が噂となるわけだと思った。正規兵になったという事はすなわち、下級召喚士に任命されたという事なのでそのロズが言った昇級試験に合格したと同義なのである。

「嫉妬とかじゃねえけど、フレア、どうやってエレイズ様に認められたんだ？」

スペルグが言うと、ロズも興味深そうにフレアをじっと見た。

「ええと……。あたしにもよく判らなくって。でも、魔力が強いとかどうか」

「ポテンシャルか」。じゃ、俺らは真面目に頑張るっきゃないわな」

「いや、フレア隊長だって真面目に頑張ってるんでしょ」

「あ、わりわり。他意は無いよ」

慌てたようにスペルグが言うので、ロズもフレアも笑ってしまった。笑ってから、すぐにここは真夜中の城内であると思い出して2人も慌てて笑い声を止めた。

「じゃあ、お疲れ様でした。おやすみ」

「おつかれっした」

「お疲れ様です」

3人は交替の時間となったので、解散した、フレアはこのまま次の見張り担当者に結果報告をしなければならぬ。だから、次の見張り担当者達の集合場所である2階階段ホールに向かった。

1人で深夜の城内を歩くのは、実はこれが初めてである。暗いし、少し寒い。また、燭台も全て狼の形をしており、その口から明かりが漏れているものなので余り安心できる明かりではない。慣れればどうということはないのだろうが、今はまだ静まりかえった古城を

1人歩いているような、ちょっとした恐怖がある。クーファをポケットに突っ込んでくればよかったかなと考えてから笑いそうになった。それではまるで、ぬいぐるみのような扱いではないか。

そうこう考え事をして気を紛らわしながら、2階の階段ホールに着く。先に来た代表者が待っていた。他の者はまだのようで、早めに来れたとフレアは少し安心した。

「2階東側担当、第1組のフレアです。異常なしです」

「了解」

答えたのは、フレアは見慣れぬ女性。

「あ、初めましてだ。私、リア隊第8部隊の隊長、アリーシャ」

「リア隊第1部隊、5人隊隊長のフレアです。初めまして」

フレアがペコリと頭を下げると、

「あ、そっか！」

と言って相手は近付いてきた。かなり背が高い女性である。フレアはぐっと見上げなければならなかった。

「話には聞いてるよ。当代一の出世頭ね！」

「そ、そんな事は……。というか、誰がそんな事を」

「はは、リア隊長が言ってたよ」

アリーシャは、暗がりでも見えなかったがそれでも随分と派手な容姿だなとフレアは思った。軍の女性にしてはかなり濃いメイクをしていて、髪の色はこれまた派手な金。高いところで1本にまとめ、はつきりした顔立ちが余計に気が強そうに見える。

「あ、来た来た」

アリーシャは、こちらへやってくる2人組に目をやった。

「じゃあ、おやすみ！」

「お先に失礼します。おやすみなさい」

フレアが部屋に戻ると、クーファが枕元に丸まって既に眠っていた。……どこからどう見ても、ペットのトカゲである。これが天下に名を馳せるクーラファンドラ・フレイム・ドラゴンであるとは思わないことだろう。

女の子の休息。……こんなんびりしてていいのかしら。(前書き)

小話って感じでしょうか。
ガールズトーク(笑)

女の子の休息。……こんなんびりしていいのかしら。

翌日、魔法の訓練をしていたフレアは最近、よく話すようになった同年代の、1期先輩であるエマに呼ばれて振り返る。

「ねえ、フレア！」

「どーしたの？」

いつもは、フレアよりずっと、おしとやかな雰囲気のエマなのに、今日は大きな黒い瞳がキラキラと興奮の色に染まっていた。

「ウォーレン大將軍が数日間、滞在なさるんだって！ 会えるかな
あ」

「へーそうなんだ」

実は一週間前、慌ただしくやってきて慌ただしく去っていった日に会っているフレアの反応はそんなものだった。

「反応薄い！」

「あ、ごめんごめん！
でも、何かあったのかな？ この前も来てたのに」

「うーん……」

ぐぐつと首を傾げたエマ。長い髪がサラサラと流れる。こっという何

気ない動作を見ながらフレアは、「美人さんだよなあ」と思っていた。

「エマって、ウォーレン大將軍、好きなの？」

「えっ、すっ！？ いやあ、そんな、私なんか……」

「いや、そうじゃなくって」

少々呆れたフレア。

「なんていうか、ファンなの？」

「あ！ そうそう……」。

戦ってもお強くて、頭もよろしくて。とても端正なお顔で……はあ」

『うーん、女の子してるなあ、エマって』

別に、フレアも色恋沙汰に興味が無いわけではない。ウォーレンのこと、たしかに格好いいと思うし。……しかし、エマのようになるかと思ったら、ないだろうと思う。

「フレアって、あんまり男の人のこととか言わないよね？」

「うーん、そうだね」

「好きな人とか、タイプの人とかいないの？」

エマはこういう話が好きなのだ。というか、一期前……つまり、フレアたちが入るより前の入軍者たちには特に若年の者が少なく、1

0代の女といえばほんとうにエマしかいなかったのだ。それが今、フレアと仲良くなってガールストークのできる喜びを噛み締めているらしい。

「リア副官とか、クロウ隊長は？」

「うーん、リア副官はいい人だしクロウ隊長は綺麗だと思うけど」

騒ぎ立てる事ではない。

「クールなんだから」

「そっかなあ？」

エマは「ま、いいか」と、1人で結論付けるとフレアに両手を合わせてお願い、のポーズをとる。

「あのさフレア、ちょーっと、城内とかうろつろしてみない？ てか、付き合って！」

「ウォーレン大將軍捜し？」

「えへへ……」

フレアは確か、2つくらい年上のエマを見て、呆れたように腰に手を当てて溜息。

「ま、いいよ」

「ありがとう！」

2人で城内を歩く。同じ年代か、もしくは少し年上の男達がエマを見ると嬉しそうに挨拶していく。

「もてるね、エマ」

「えっ、そんなことないよー」

本人の否定はさっぱり無視して、やっぱり可愛いもんなアと自分で頷くフレアだった。

2人……というか、エマは運の良いことに庭園に望む外廊を歩いている時、ウォーレンとエレイズを見付けた。

「あっ」

エマがちよっと嬉しそうな声を上げると、先にエレイズが2人に気付いた。

「フレアとエマだ」

「！」

2人は改まって敬礼した。フレアはともかく、エマはエレイズに顔と名前を覚えてもらっていたことに感動しているようだ。

「お、この前の」

ウォーレンも振り返ってフレアを見た。再度、低頭する2人。

「もしかして何か用事？」

エレイズが愛らしく首を傾げ、エマが慌てて言いよどむ、と、フレアは少し意地悪を試みる。

「はいー。エマが是非、ウォーレン大將軍に」

「ちょ、ちよっとフレア！」

「お目に掛かりたいと」

「うつつ……」

顔を真っ赤にして俯いてしまったエマ。

「ほっほっ！」

まんざらでも無さそうな、女たらしのチャラ男（リア談）は、エマを上から下までよく見た。

「可愛い子ならいつでも歓迎だぞ」

「ふえっ、そんな、カワ……」

テンパっているエマ。フレアは大笑い。エレイズもクスクスと笑う。

「あ、そういえば……」

フレアは聞いて良いか迷ったが、ダメなら、はぐらかされるだけだ
と思って質問した。

「わざわざ外で……何をなさってたんですか？」

「あー、俺がエレイズの部屋に入ると、エレイズの可愛い副官が不
機嫌になるからここで喋ってたんだ」

ウォーレンがあっさり教えてくれた。

「リア副官、そんなに気になさってるんですか……」

「エレイズに関するあいつの心配はもはや、病気だからな、うん」

それからしばらく雑談した後フレア、そして幸せそうなエマが去
っていくとウォーレンは物憂げにエレイズを見た。

「ものは次いでだから言っとくが」

「何？」

「いつまで……過去に縛られてるつもりなんだ」

エレイズは美しい瞳に、深い深い憂いを浮かべてからそれを閉じた。

「永久に」

初任務が言い渡された。主導権を相棒に奪われる気がする。

「うーん……」

「何だよ、難しー顔しやがって！ 似合ってねえぞ」

「五月蠅いなあ、もう！

これでいいのになって……」

「は？」

クーファは首どころか上半身（そう呼べれば）を横に折ってフレアを見た。

「そりゃ、あたしには何もできないけど……」。

ウラデイスの事とか、気になるというか、何かしなきゃいけない気がするというか……」

クーファは、成る程、と言ってから頷いた。

「ま、確かに俺もエレイズやウォーレンの奴らは吞気過ぎる気がするな」

「まあ、エレイズ様の事だから何かしら理由があるんだろうし、無策って事はないと思うんだけど」

「でたな、最近流行りのエレイズ至上主義」

「ヤナ言い方！」

フレアはつん、と顔を背けながらも少々反省する気持ちも出て来た。確かに、最近、全てがエレイズ任せだ。軍に入るといのは、そういうことなのか？　とも思うが。

「もしも、將軍達の考えが正しかったら……あたしはどうするべきなのかな」

「そりゃ、ウラディスとかいう野郎をぶっ潰す以外に無いだろうがよ！」

「でもそついうのって、トップの方が……」

そこで、ドアが叩かれたのでクーファは毛布の下へ飛び込み横目でそれを確認したフレアはドアを開いた。

「久し振りだね」

「サラ班長！」

フレアは目を驚かせた。

「突然だけど、明日出発の任務に来てもらうことになったから！」

「えっ」

「あんたはそろそろ実戦経験を積んだ方がいいっていう上の判断。セフィロ隊と合同出兵で、魔獣を使って犯罪を行ってるちよつとした組織の討伐。詳細はコレ読んでおいて」

数枚の書類が手渡された。フレアがそれを受け取るとサラは

「じゃ、明日はあたしも行くからさ。よろしくねー」

と言い、出て行った。

「クーファ、任務だつて」

「おう、聞こえてたぜ。……よーやく、俺の力が日の目を見ることに！」

「た……戦えるの？ その、サイズで」

すると、クーファは腕を組んで胸を反らした。

「お前が試験やらなんやらでバタバタしてた時、エレイズに付き合つてもらつて“実験”したんだ」

「実験？」

「オウ。念のためにエレイズがガツガチに防壁を張った中で技を使ってみたわけよ」

「そしたら……？」

ちよつと、ときどきして身を乗り出すフレア。

「エレイズいわく、100%近くじゃないのが信じられない威力！」

フレアは本当の本当に驚く。

「力、制限されてるんでしょ!？」

「だーから言つたろ？ 制限されてなかったら、防壁なんて一切の効果なく、この城、いやこの地方を火の海にしちまうんだって」

「うわあ……」

しばらく、ポカンと口を開けていたフレアだが、こつ言つ。

「じゃあさ、明日の任務頼むね！」

「任せときやがれてんだ！
一気に上級兵にまで昇級させてやる!!」

「いや、それは流石に……」

しかし、クーファはやる気満々。

「勝手な事はしないでよ!？」

「俺の方が、お前より実戦慣れしてるんだから大人しく見学しとけ、な？」

「うつうつ」

どちらが召喚主か判らない。

集合時間の、朝6時より少し前にフレアは城の1階エントランスホールへ行った。“練習”という言い訳で片を付ける訳にいけないため、クーファはポケットの中でじつとしている。

数分で全員が揃う。ぐると見渡したサラは頷いた。

「時間通りね、結構、結構。」

初めましてもいるから自己紹介するわね。

リア隊、第1部隊4班班長、サラよ。今回の任務の責任者を任されたからよろしく」

全員が低頭した。セフィーロ隊の者も皆、サラより階級が下の者らしい。リア隊についてはフレアは大抵顔を覚えている。同期の者も数名いるようだ。

「じゃあ行くわよ」

先頭を歩くサラに続いて外へ出ると、人数分の馬が出されていた。

「乗馬は覚えさせられたよね？」

サラが新卒兵達を見て言うと、フレアも含めた全員が頷く。身体が小さいフレアには最初のうちはちょっとした苦役であったが、最近少しずつ慣れてきた。

下級兵には専用馬などおらず、共用のものを使うのだがフレアはその中の一頭と仲良くなっていた。今日も並んでいる、ジェミニと

いう黒い毛並みの馬。下級兵になって増えた仕事の1つに馬の世話があるのだが、その中で懐かれた。

ジエミニはフレアを見付けると自ら近寄ってきた。

全員で20名の混成部隊は開けた旧街道を進んでいく。目的地には馬の足で3、4時間とのことだ。

優秀な戦士が良い上司であるとは限らない訳でして。

「ウラデイスは本当に動くと思う?」

「ああ、まず間違いないね」

ウォーレンは瞳に聡明な色を宿して頷いた。

「セバスチャンが情報を掴み、ウチのブライグも確認した……。もはや、事実と言っても過言じゃない」

「ふう、嬉しくない保障だな。
ラファインはなんて?」

「現王家を守るのが、自らの役目だと。ま、つまりウラデイスとは敵対する気満々だ」

「ウォーレン、どうするつもり?」

「は?」

エレイズは黒い瞳で紫の瞳を覗いた。

「あなたは、いや 私も、現王家には何の恩義も感じていない。
国属戦士の名誉なんて言葉、無縁だし」

ウォーレンは頷いた。

「確かに王家を救ってやる義理はないが……ラファインが孤立する事態は見過ごせないね。あいつにはかなり恩を受けてる　仇で返すような真似は趣味じゃない」

「王派か」

ウォーレンは少し目を細めた。

「随分、率直な言い方だな」

「もう2極対立は始まってると考えて良いと、あんたが言ったんだ。国王派と　貴族派とでもしょうか？」

「じゃあ、お前はどつする」

エレイズはそれには直接答えず、懸念を口にする。

「問題は、アークさんがクーファを召喚出来るようにしておいたって事だよなあ。

彼が、クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンなくしてはウラディスを止められないと考えた、ということだ」

「確かに、そう言えるな。

しかしなあ……。奴は貴族としては珍しく、実力と地位が同等な男だが、俺やお前より戦えるかというと首を傾げたくなる。そんな奴に、Sランクフレイム・ドラゴン……」

「もっと調べないと。

うん、やっぱり私も王派だな」

ウォーレンは、満足そうに頷いた。

「可愛い部下に、親の仇かもしれない者達と手を取って戦わせるなんて酷いし。

それに……」

「？」

「ウラデイスはこの国を変えるんじゃないじゃなくて、壊す、そんな気がしてきた」

ウォーレンはじつとエレイズを見てから、頷く。

「そういう勘はお前の方がいいからな」

「ラファインとも近い内に話さない」と

「やっぱ、ここだろうな。」

あいつのところは王都に近すぎるし、俺はまあ、その……」

「日頃の行いの所為で、監視が厳しいんだよね」

「そういうことだ。」

取り敢えず、ラファインを呼ぶのは俺が帰ったと思わせてからだな」

「そうだね。仕込みは？」

「既に」

「その辺は、流石」

「惚れたか？」

「小指の爪の先程も」

「ちえっ」

＊＊

「リザ副官！」

ウォーレンが城主を務めるコルドワークズ城の執務室……本来、城主のいるべき室に副官のリザはこのところ缶詰め状態であった。

「何？」

苛ツとしたような声に、少々ひるみながらも重要な用件なので情報部隊員は

「失礼します」

と、中へ入る。

不機嫌そうな顔で書類と戦っているのは20代前半くらいの若い女。リザはきりつとした黒い瞳を入室者に向けた。

「阿呆将軍が何か言ってきた？」

「はい、その通りであります。」

あと1週間はエレイズ大將軍のダークヒル城に留まる。また……こ

れは言えば判るとおっしゃられたのですが、例の件は今日から頼む
とのことですよ」

リザは大きな溜息をついた。きつく2つに束ねられた金髪を掴む。

「こっちの苦勞も知らず……っ！　いいわ、じゃあ次いでにベルに
同じ事伝えといて」

「かしこまりました」

リザは1人になると、天井を仰いだ。

「たく、この忙しい時に狙い澄ましたようにいなくなりやがって、
あの×××將軍ッ！　監査の連中が明日来るしさあ。もう、×××
×××、×××××！！」

乙女が吐くとは思えぬ暴言を吐きまくった。

「ローベルグ副官！」

さつきリザに命じられ、ベルことローベルグ副官へ伝言に向かった
者は、対リザの半分も緊張していない。

「なあに？」

振り返った男の顔を見て声を聞けば、それも納得。

顔も身体もぼつちりと丸っこく、どこをどうみても攻撃的とは思えない。そして、その見かけ通りの人物なのだ、ローベルグは。

「はい。大將軍からの伝言なのですが」

最後まで聞くと、ローベルグは苦笑した。平和的な坊ちゃん刈りの頭に手をやる。

「こっちの苦勞は省みずだからなあ、あの人。

エレイズ殿かラファイン殿のそこへ逃げたいよ、ほんと」

「……はあ」

「まあうん、了解。さてさて、忙しくなってきたぞ」

腹をばよぼよと弾ませながらも、相当スムーズにローベルグは走って行った。

「てことです、ブライグさん」

「フフフ、実行か。ベル、スマートなイケメンになる心の準備はできてるな？」

「外見はともかく、喋り方がきついですねー」

「まあ、そこに立て」

副官に命令し、床に描かれた魔法陣を指したのは長い黒髪に白髪が交じってきている年齢の男。ローベルグの上着に彼が2人分はいるのではないかと思える程に細い。だが、顔は優男と程遠い、軍人というよりも殺人犯で指名手配されていそうな凶悪な印象。彼はブライグ。ウォーレン軍に、ウォーレンが勝手に作った独自の部署、魔法研究室の室長。

人道的なものから人には言えないようなものまで、数多の魔法を編み出している。

これから使うのもその1つ。

外見を別の誰かの者に変える術……つまり、変身術といったところ。

“ウォーレン”を用意して、監査の目を欺き、追求から逃れようという作戦なのだ。

「そっといえば、ボクがいない説明は？」

「豚でも1頭、用意しとくから心配するな。フフフ」

「ちよっ、ヒドー!？」

ローベルグが人の好きそうな顔でビックリというか、心外というか、そんな声を上げるとブライグはさぞおかしそうに笑う。

「お前は1週間、有給使って旅に出てる」

「え、どこに？」

「そこはしらばつくとれないと、捜しに行かれた時に面倒でしょうよ」

「あ、そうでした」

ブライグはパンパンと手を叩く。

「んじゃ、やるぞ。緊張するねえ、記念すべき実験第1回だ」

「ええっ!？」

ローベルグの悲鳴は気にせず、ブライグは床にかがみ魔法陣に手を当てて詠唱した。

「あ、あれ!？ 大將軍、いつの間にお帰りに？」

「おう、今さっきだ」

すれ違う兵がみな、驚いて“ウォーレン”……ローベルグを見る。
このことを知っているのは上層部だけなのだ。

ローベルグがときどきしながら、やっとのことで執務室にたどり着くと、にやにやしたりザが迎えた。

「よくぞお帰りになれました、大將軍」

「リザっ」

リザは極力近づいて、声を落とす。

「はいはい、そういうベルっぽい反応はダメよ！」

「お……おう」

「プッ」

リザは“ウォーレン”を執務室に引っ張り込むとドアを閉じた。

「あゝおかしい！」

「ひどいよーリザ！　ボクだってやりたくてやってるんじゃないんだからね？」

「わゝかってるって」

リザはしかし、本当に面白がってローベルグの腹を突きまくる。

「あはは、かたーい！」

「リザ、誰が入ってきたら一大事だよ！？」

「ノックで判るわよ」

そして、嬉々とした表情でデスクを示した。

「さ！　大將軍の仕事してくださいね」

「あわわっ」

情けない声を出したローベルグは、リザによってデスクの前に押しやられた。元気よく、リザは執務室を出て行くのだった。

飛び級にも程があるでしょうよ……（焦）。

それから2日後。

「うんうん、監査の目は上手く誤魔化せてるみたいだな」

ウォーレンはエレイズの居城の一室で、ブライグの報告を受けていた。ウォーレンの魔力あつてできる事だが、この場所からコルドワークズまでテレパスを繋いでいるのだ。

「ウォーレン大將軍は少し見ない間に、低姿勢になったと噂になるぜ」

ブライグの声は、笑いを含んでいた。

「ま、丁度良いさ。その方が、奴さん達も俺に対して油断するだろうし」

「じゃあ、こっちの事は任せろ」

「助かる」

「それと、可愛いエレイズに手を出してエレイズ軍全てを敵に回さないようにな」

笑いながら忠告をしてブライグはテレパスを遮断した。

「今日の午後に、ラファイン大將軍が到着なさるようです」

セバスチャンがエレイズの執務室に来て告げた。

「うん、了解……」

上の空とも言いたくなる調子で答えたエレイズを、目を細め、首を傾げてセバスチャンは眺めた。

「何かありましたか？」

「色々ありすぎ」

「……まあ、そうでしょうね」

エレイズは、深く溜息をつく。

「何人かのリア隊の上級兵から、フレアを上級兵にしてはどうかって提案が来てるんだ」

「それはそれは……。まあ、確かに彼女の力は異常ですね。しかし、それは余りにも目立ちすぎるのでは？」

「私の懸念はそれなんだ。ついこの前入隊した子を上級兵に昇級させたら、かなり目立つ。だけど、下級兵が一組織を一撃で壊滅させる力を持つドラゴンを召喚できるなんてのも目立ちすぎる」

セバスチャンは頷いた。紫がかった黒髪がサラサラと揺れる。それを耳にかけてまた、首を傾げる。

「いつそ、私の部下にしてみますか？」

「……それも考えたけど、彼女に君の隊の仕事は出来ない」

「人間的に？」

「そう、人間的に」

「実戦訓練をさせたのは、失敗だったのですかね」

「かもしれない」

先日の任務で、……言ってしまうえば、クーフアが調子に乗りすぎたのだ。リーダーのサラも吃驚の強大な力で、たった一撃の炎で、問題の組織を建物ごと焼き払ってしまったのだった。

「あのね、仮説を聞いてもらっていい？」

エレイズは、疲れたように顎を両手の上に乗せたままセバスチャンを見上げた。

冷静沈着で通っているセバスチャンですら、危うく見惚れそうになったものだ。

「……どうぞ」

「私が、クーフアの力を見た時の話、したよね？ あの時、そこ

までの力が無かったように思えるんだ」

「それは、単純に召喚者が近くにいなかったからでは？」

「それもあるかもしれないけど、もう1つ。

クーファの力は、フレアが魔法使いとして力を上げるほどに強まっていくなのかもしれないって」

セバスチャンは口元に、優雅に手を持っていくと暫く考えていたがやがて頷いた。

「可能性は、ありますね。調べてみない事には何ともいえませんが、召喚獣の魔力管理に召喚者の魔力が関係していてもおかしくはないいえ、そもそもおかしいことだらけなのだから……。アーク殿が、フレアの力が上がるごとにクーファの力が本来のものへと近付いていくようにしていたと考えても……」

「無理はない」

「はい」

「本来は、召喚時から……。永久召喚であっても、召喚獣の強さは変化しないものなんだけどね」

2人はちょっとした間、黙り込んで同じ事について考えていたがそうしていても埒があかないのでセバスチャンは軽く一礼すると執務室を後にした。1人になったエレイズはセバスチャンが持ってきた報告書をもう1度眺めると複雑そうな表情を浮かべた。いつも、単純な感情表現は余りしない彼女だが、それにしても複雑な表情だった。

「だから言ったのに……」

フレアは、リアから現在、勃発している問題について聞きクローファをなじった。

「いや、だってよお。俺だってあんなに力が出るとは思わなかったんだって！」

「それにしたって、加減とか出来たんじゃないの！？」

「全力でやつても、限界値は高が知れてると思ってたんだよ！」

エレイズとセバスチャンが頭を悩ませていた問題である。リアは、思わず苦笑して渦中の少女とトカゲのようなドラゴンを見比べた。

「ま、一応、口止めはしておいたから……コトがそこまで大きくなることはない、はずだが。人の口に戸は立てられぬって言うしな」

「ですよねえ」

フレアは、同じコトを言った同年代の部下を思い出していた。フレアが内密の内に受けて合格したはずの、召喚士試験のことをその彼らは当然のように知っていた。今回のクローファのデタラメな強さについての噂もすぐに広まってしまいう気がする。

「俺達の懸念は、実は1つだけだ」

リアは、話を改める。

「お前のその才能がウラデイス一派にまで伝わって、連中がお前をあの手この手で利用しようとするんじゃないか、ってコト」

「……はい」

この前の結論からすれば、ウラデイスは……またはその仲間は父の仇である。洗脳されたとしても手を組みたくなどない。また、今までなら自分と力を制御されたクーファなど何の役に立つ？ と思っていたが、今回の実戦任務でその疑問は払拭されてしまった。ただ、一度クーファが……ろうそくの火を消すくらい気安さで息を吐き出すと、その灼熱の息で鉄製の大きかりな建物が全焼し、中の召喚獣は魔力に当てられて消え去り、人々も意識を失ったり、酷い者は当然ながら大やけどで死亡した。

「あ……あの」

フレアは困った挙げ句、言う。

「リア副官は、そのお……」

「どうすりゃいいと思うか、か？」

「はい」

無責任だろうか。しかし、自分1人で決めるにはどうしても重すぎる。

それは、相手も判ってくれているようだ。自分は上官に恵まれたとつくづく思う、フレアである。

「俺の個人的見解だが、もしもウラデイスがウチの軍から優秀なのを引つ張り出そうと考えてるんなら既に奴の手の者が紛れ込んでいてもおかしくない。また、紛れ込んでいなくとも精神をばれない程度に操られていたり、禁術だが何キロと離れた場所の会話を盗み聞きするのは不可能じゃねえ。つまり、お前のコトは知られていてもおかしくない」

「あ……」

「だから、こいつはエレイズにも言ってみるつもりだが定石通り……というか実力通りにお前を上級兵に上げちまってウチの軍全体に説明しちまうのが良いと思う。包み隠さず喋っちまえば、寧ろ噂は収まる。真偽が定かじゃないから、みんなあちこちで噂する」

クーファも頷いた。

「てか、その方がスッキリするな。それに隠し事を持つてると、いざという時に面倒だぞ。特に軍の中ではな」

彼は、よく考えれば何百年、いや数えるのもくだらない程、昔から軍やら何やらの中で人を見てきたのだという事をフレアもリアも思いつ出した。いつもの迂闊な発言や行動の所為で忘れがちだが……。

「お前はどうか、フレア？」

真っ赤な髪の上官と、真っ赤なドラゴンに見られたフレアはちょっと

と固まっってから、頷いた。

「リア副官の……それからクーファの、言っとおりだと思います。何人かは、もうクーファの事を知ってしまった訳だし。それに、確かに隠し事はよくないし」

リアは大きく頷いた。

「よし。じゃあ、ここ3人は取り敢えず意見が一致って事でエレイズに伝える。」

まあ多分……エレイズもそう考えてるだろうし、フレア、上級兵に飛び級する心の準備しとけ？」

最後は、冗談めかされていたがフレアは笑っている余裕を持ち合わせていなかった。

『てか……クーファの言っとおりになっちゃった!？』

自由でのんびり楽しくが売りの情報部隊長。他隊は頭を悩ませる。

フレアの、上級兵任命は来週行われる事に決まった。フレアの決心、クーファとリアの意見をエレイズと他3名の隊長達が了承したのだ。

「はーあ、フレアはもう上級兵かあ。格が違うねえ」

情報室で、隊長からフレアの話が聞かされたシュウは天井を仰いだ。

「あら？ 私も、あなたの了解があれば早く出世してもらいたいんだけど」

につこり微笑みかける、情報部隊隊長であるロザリア。長い金髪をふんわりと頭頂部でまとめていて、表情も柔らかい。外出を殆どしない事で有名な隊長であるだけあり、深層の姫君も吃驚な白い肌。優しいな栗色の瞳を半分程閉じて、シュウを眺めるようにしている。

「それは困りますって。隊長、事情知ってらっしゃるくせに」

どこの隊よりも情報部内の上司と部下のやり取りはお気軽だ。シュウやイアリスといった新米中の新米でも同じような口の利き方をする。

「うーん、残念。そうそう、ガーディにお菓子買ってきてもらったんだけど、食べる？」

「あ、頂きます」

職務中に、焼き菓子を頼張っている隊も他にありそうにない。ガーディというのは、ロザリアの副官の名前である。ロザリアとは打って変わった、真面目一本の老紳士。しかし、紳士の過ぎて女性の頼みを断れず、悪気のないロザリアの副官というよりパシリにされている。

「まゝた、のんびりしてるし！」

そこへ入ってきたのはイアリス。ロザリアとシュウはすっかり、仕事よりもお茶会に重点を置いている状況であった。

「ガーディさんと私がセバスチャン隊長から怒られるんですからね！　ホラホラ、働くっ」

情報部と隠密部は共同で仕事を持つ事が多い。しかし、ロザリアが追いつめられないと仕事をしない性格で、几帳面で仕事は一日でも早く片付けるセバスチャンとかなりの齟齬をきたす。だが、文句を言っても全く効き目がなかったためセバスチャンのお小言はガーディと最近情報部に増えた、話の判る新人イアリスに向くようになったというわけ。

「イアリス、苛々してる？　このクッキー、牛乳をたくさん使ってるからカルシウムが多いと思うの」

「あ、頂きます……じゃなくって……！」

「怒っていると可愛くないよ、イアリス」

「シュウ、お黙りっ」

頭を抱えるイアリス。

ロザリアはこれが本来の性質なのだが、シュウはそれに便乗しているというか悪ノリしているだけというのが判りきっているだけに苛々するのだ。

『2人揃って、どうして情報部の仕事できる人ってこうなの??』

「とにかく、これ見てください」

イアリスはズいっとセバスチャンから受け取ってきた書類を、ロザリアに見せた。

「あら……大変」

ロザリアも流石にクッキーを食べるのをやめた。シュウも身を乗り出して一緒に眺める。副官でもないのに、隊長宛の書類を断り無く見るのはシュウくらいかもしれない。

「まあ、判り切ってたことではありますね」

シュウの言葉にはロザリアとイアリスも頷く。

「でも、形として出て来たのは初めてだからやっぱり大事よ。ロザリア隊長、隠密部と共同で諜報部隊を組織することになりましたから、御指示お願いします」

「うん。じゃあ、シュウ、行ってみる？」

「はい」

「あと、ガーディに行ってもらおうかな。じゃあシュウ、その旨セバスチャンに伝えてきて」

出て行くシュウの背中を見送っているロザリアを見て、イアリスは何だかんだ言ってこの人は流石だと思うのだ。セバスチャンが各隊2名ずつの4人部隊を作ると言ったことをイアリスが説明する前に、書類の内容から任務内容と必要人数を導き出したという事だ。それから、他の隊の者が見たならシュウを選んだのは、いい加減な判断だと思うだろうが、違う。シュウの実力は、副官のガーディと並べて何ら遜色ないのだ。本人が病的なまでに、自分の実力を隠しているものだから情報部でも知る者は少ないのだが。

フレアは、ひたすらに何をしているかと言うと過去のリア隊任務記録を読みあさっていた。また、クロウに時間がある時は彼の講義上級兵として動く為のイロハを学んでいるのだ。

「はあ、100人隊の隊長だなんて……」

フレアはがつくりと頭をうなだれていた。

「いいじゃねえか！ 部下は多けりや多い方がいいだろ」

「良くないわよお。あたしより、ずうつと戦歴の長い人だつて中にはいるんだよ??」

「それを言うなら、エレイズやリアだつてそうだろ。あのクロウつてのも若いし」

「ううん……それは確かにそうなんだ、けど」

上級兵とは、すなわち100人隊以上の隊長の事なのだ。また、部隊長も全員上級兵なのだが現在、欠員が出たわけではないのでフレアがいきなり部隊長に任命される事はない。班長は中級兵であり、フレアはそれをすつ飛ばして100人隊長となるわけだ。前回の任務で大変そうだなあと思った、サラの仕事よりもよっぽど大変で複雑な仕事をする事になっていく。クーファは、

『ま、どんな仕事でも作戦も計画も関係無しに俺様がぶつ潰せばいい話だろ? 心配ないない!』

などと言っていたが。そう言う問題でもないようだ。任務遂行が勿論、最重要事項なのだが任務の中で下位兵に経験を積ませてやるというのも大きな目的の1つであるという。また、その任務の中で、言ってみれば今回のフレアのように現在の地位以上の実力がある者を見付けたらそれをチェックしておくのも隊長の仕事だそうだ。自分の事にだけ構っているわけにはいかないというわけ。

大將軍達の話し合い。(前書き)

時系列が狂って、済みません……。投稿順を間違えたので、苦肉の策でした。

大將軍達の話し合い。

時間は、前日に戻る。

ダークヒル城に、ラファイン・ディオ・バーフォンハイム大將軍は時間通りにやって来た。しかし、それは彼の狙いであってエレイズやウォーレンの勧めでもあったのだが、彼の簡易な服装を見る限りこれがこの国きつての大貴族バーフォンハイム家の長男だとは思われないであろう。黒い質素なロングマントの下は、大した飾りもないが上品な白いシャツと革製の乗馬ズボンという出で立ちだった。

それでも、顔を見れば“ああ、これは高貴な人なのだな”と誰もが感じてしまうような雰囲気がラファインにはあった。流れるような黒髪は、品良く整えられていて茶色がかった黒い瞳は温和そのもの。一見するとほっそりした優男であるが、魔法にも武術にも優れた立派な大將軍である。

「お待ちしておりました」

そんなラファインを迎えたのはセフィーロ。敬意など知ったこつちやないリアではなく、セフィーロを迎えに出した方が良いとエレイズは判断した。とはいっても、ラファインはこれまた大貴族には珍しく身分やらに五月蠅くない人物であって、彼自身が他人に対して低姿勢なほどである。

「わざわざ済まない」

につこりセフィーロに微笑みかけた。セフィーロの方は仏頂面で（

不機嫌なのではない。彼は表情を作るのが大層苦手なのだ。一礼すると、

「それでは、こちらへ」

とエレイズの執務室へ案内した。

「エレイズとウォーレンは、どうするつもりなのか聞いているかい？」

ラファインが廊下に入気が無かったから、セフィーロに小声で質問すると相手は首肯した。

「お二方共に、有事の際は国王陛下の御為に兵を動かされる心づもりでいらっしゃいます」

「そうか」

どうやら、ラファインの緊張のようなものが解けたらしい。2人の友と、戦う事にならずに済み、ほっとするのは当然の事であろう。

セフィーロがドアをノックすると、エレイズの返事が返ってきたのでドアを開いた。

「やあ、久しぶり」

「本当に。ウォーレンはともかく……エレイズは、1年振り以上か」

エレイズは、そうだねと頷いてからセフィーロを見た。

「じゃあ、戻って大丈夫だよ」

「失礼します」

「さてと、ここの3人は取り敢えず同じ事を考えてるわけだが」

ウォーレンが2人を見た。

今、3名の大將軍は執務室の小会議テーブルを囲んでいる。

「セフィーロに聞かされた時は安心したよ」

ラファインは目元を緩ませた。

「まず、事実の確認をしておこうか」

エレイズは紅茶を口に含むと、告げた。

2人とも頷いた。

「判っている事のうち、確実な事はかなり少ない。

ウラデイスがここの3名以外の大將軍を抱き込んで、反乱を起こそうとしている事。その為に、国内どころか国外からも優秀な人材をかき集めている事も確認できた。また、これは昨日はつきりしたばかりの、セバスチャンの持ってきた情報だけど王城内の文官にもウラデイスに与する者がいるようだ」

ウォーレンはそんな事だろうと思った、という表情であったがラファインは明らかに憤慨しているようであった。

「その代表的な者が、ダグラス」

「宰相ダグラスだと!？」

思わず叫んだラファイン。ウォーレンも流石に目を驚かせた。

「何故だ？ 現状に不満があるから起こすもんだろ、反乱つてのは……。宰相なんて地位に何の不満があるってんだ？」

ラファインに睨まれそうだが、率直に云うとこの国を動かしてるのは王じゃなくてあいつ、ダグラスだ。こんなにも重用されてる文官は、他にいないぞ」

「推測しかできないから、動機については放っておこう」

エレイズはそう斬り捨てた。

「兎に角、事は我々が最初に見当を付けたよりもどんどん大きくなっていつている。ウラデイスは最近、自らの軍の大変革を行った。身分で雇っていた貴族連中を下級兵に引き下ろして、平民だろうと移民だろうと武力、ただそれだけで人選を行って軍の上層部を固めている」

「それで、どう動く？」

ウォーレンは言った。

「残念ながら、向こうが行動を具体的に起こさない間は動けない」

エレイズという言葉にラファインも頷いた。

「証拠とはいっても、我々の身内が集めたものばかりだからな。で
つち上げと言われれば、それまでだし……また、逆に我々が反逆者
扱いされては話にならない」

「そういう事。」

だから、今できるのは見張る事だけじゃないかな。結局。そして、
一秒でも早く連中の動き出しを確認して、対策に移る。

嫌な話、ウラディスの居城はそうでもないけど、その味方に付いた
大將軍達の居城はラファインのところに、向こうを張る程、王城に
近い。大貴族と呼ばれるのがいるしね。

だから、第一の防衛線はあんただ」

エレイズはちょっとラファインを見た。当然、という風に相手は頷
く。

「だが、限度があるだろう。それに、王城内にだって敵はいる。中
から始められたら事だ……やはり、出来る者を王城内に忍び込ませ
ておく方が良い」

「だが、暗殺をするならともかく、止めるとなると……。実行者よ
り相当に力が上でなくてはならない。そうすると、各軍の上層部だ
が……それでは顔がばれている」

そこで、ウォーレンとエレイズは顔を見合わせた。

「おい、エレイズ」

「……多分、同じ考え」

「何だ？ 説明してくれ」

置いてけぼりのラファインは困ったような顔をした。

エレイズは、ざっと説明した。……フレアの事を。

「成る程……。しかし、いくら実力があろうとも20に満たぬ少女なのだろう？ 些か重すぎる役目ではないかな」

「すぐに、という訳じゃないんだし。まだ、当分は動かないでしょう？」

これはウォーレンに意見を求めたのだが、彼はすぐさま頷いた。

「むこうさんも、俺らが敵に回る事は前提の上で動いてる。どんな手を使うつもりかは断言できんが、俺達の力を越えたという確信を得るまでは動かないだろうよ。」

この国の3強を敵に回すんだ。準備には相当な時間を掛けてくるさ。長丁場になるな」

「だから、さっき言った子を上級兵にして鍛える期間は充分に見える。」

賛成してくれないかな」

「……任せよう。どう考えても、お前達2人の方が今の状況をよく考えている。私は正直、まだ……そんなに好いていなかったとはいえ朋輩と呼んだ者達が主君を裏切ろうとしている現状を信じたくない気持ち強いようだ」

「ま、ある意味、その面倒くささがお前だからな」

ウォーレンは莫迦にするというよりも、愛情を込めて自嘲的な溜息をついたラファインを見た。

新たな任務に吃驚したんだけど、2人の同行者にも吃驚だわホント。

フレアの上級兵任命式当日。式とはいっても、大袈裟なものではない。集められるのは上級兵のみだから隊長達も合わせて50名をやや割る。それでも、今まで見上げると首が痛くなるような場所にいた人々が自分一人の為に集まっていると考えると、右手と右足が同時に出そうだった。

ここは、氷晶の間と呼ばれるダークヒル城の最奥部。名の通り、壁一面は涼やかな青色で教会の如く並ぶ長椅子は氷のように透明な素材で出来ている。床もまた、ガラス質の為、初めて足を踏み入れる者はその輝きに戸惑うかもしれない。氷晶の間は、たった1つの公式行事用の場所である。上級兵以上の任命式から、大会議や――前回のラファインの場合は親しい間柄であつたからエレイズの執務室を利用したが――大將軍またはそれ以上の地位の者の公式訪問を受ける場合も使われる。

フレアも、初めてここを訪れる者の例に漏れず、まさか土足厳禁と言われるのではないかと考えて立ち止まってしまったが、それを感じ取つたらしく半笑いのリアに背中を押されて中へ入った。

既に、氷晶の間の奥にある壇上にはエレイズが控えている。彼女も、他の者も全員……当然フレアも……軍服を着ている。

「んじゃ、達者で」

リアは、半笑いたままセフィーロの隣……最も壇上に近い副官用席についた。フレアは1人になり、ゆつくりと前へ歩き始める。クーファは連れてきていない。実は、今日の事で一番時間を掛けた話

し合いがクーファをどうするか、であった。フレアと同時に紹介してしまうかという意見もあるにはあった。しかし、やはり、永久召喚の件は伏せておこう、クーファはフレアの契約魔獣ということにしておこう……というので話が纏まったのだった。

「これより、上級魔法兵任命の儀を行う」

エレイズが告げた。慣習に則って、厳粛な空気ですべてが行われる。

「魔法戦闘部隊第一部隊第4班所属フレア、前へ」

「はい」

壇上に上げられるフレア。

「レミユエル王家に仕えし大將軍にしてダークヒル城城主エレイズ、この者を100人隊隊長である上級魔法兵へと任命する」

膝を着いて低頭したフレアは間をおいて立ち上がる。そのフレアに、エレイズから魔法杖が与えられる。

これは、まさに慣習以外のなにものでもない。太古の魔法使いが、身分の証のために持ち歩いていた木の棒。太さや長さは様々であるが、今フレアに手渡されたのは小枝くらいの細さであって、フレアの腕半分くらいの長さ。木を削って創られたものであるから表面は多少ごつごつしている。

それから、フレアの新たな所属が発表される、実はフレアも『聞いてのお楽しみ』とエレイズのこの上なく愛くるしい笑みにはぐらかされて聞いているのだ。

「今日より、魔法戦闘部隊第一部隊第4班所属フレアは魔法戦闘部隊第零部隊所属とする」

俄に、ざわめきが起こった。リアとセバスチャン以外が全員、――あのセフィーロでさえ――目を丸くしていると言って過言でない。

第零部隊というのは、簡単に言ってしまうえばスパイ専門部隊。王城に潜入させる為にフレアを上級兵にしたのだという過程を知るのは、決定を下したエレイズとセバスチャン、事前に話を受けたりアのみフレアは、周りが驚いている事に驚いているようなものであった。何が起きているのか、第零部隊というのが何なのか、さっぱり判らないのだ。しかし、今この場でそれを質問する訳にはいかないので説明された通りに杖を捧げるようにして膝を着き、頭を垂れる。

「副官……」

「判ってる。説明するから、クーファとエレイズの私室に來い」

リアは式の後、疑問だらけの表情で自分を見たフレアに言った。

「わ……判りました」

*

「第零部隊っていうのはね」

エレイズはすぐにやってきたフレア、それからクーファに説明をした。

フレアはただ驚き、クーファは怪訝そうにエレイズを見つめる。

「なりたてはやほやの、素人上級兵を就ける役職じゃねえよな。何が狙いだ？」

そもそも、俺様の力は屋外の戦闘向きだぜ」

エレイズは頷いてから、先日のウォーレンとラファインそれからセバスチャンとのやり取りについて説明をした。

「つまりだ。フレアを上級兵にした理由の1つは、これ以上、尾ひれの付いた噂を巡らせるより事実を突きつけた方がましだという事。もう1つがそれって事か。

王城に誰か優秀な連絡係、そんでもっていざというときにはウラなとかの手の者を相手に出来る部下を潜ませたい。ところが、ウォーレンとラファインって奴のところの実力者の顔は王城の連中に知れてる。で、フレアしかない、と」

「全部説明してくれたね」

エレイズは言った。

「そして、これは正式発表を終えた命令だからね。行ってもらうよ……王城に」

フレアは思わず、息を飲んだ。

「あたしと、クーファだけで……」

すると、エレイズは小さく笑んだ。

「そんなスパルタは、流石にしない。2人、君と一緒に行ってもらう事が決まってる。」

「どちらも、よく知ってるはずだ」

そこで、タイミングを計ったかのようにノックがされた。

「失礼します」

まず、優雅に一礼したのはセバスチャン。そして後ろに……。

「ジェイドさん!？」

「やあフレア……いや、フレア殿。お久しぶりですね」

「やめてくださいよっ……え、まさか」

フレアは大きくエレイズを振り返った。

「彼が、1人。もう1人も来るはずなんだけど」

「彼女が時間通りに何かを成し遂げたなら、奇跡です」

セバスチャンが美しい顔を微妙にしかめて言った。その直後、不満そうな……しかし、穏やかである声が聞こえた。

「ぎりぎりなだけで、締め切りを遅れた事はないわよ」

こちら、セバスチャンと同じく、フレアが今日の式典で初めて顔を見た情報部隊隊長ロザリア。そして背後にいるのは彼だ。

「いやあ、おもしろい揃い方をしたね」

「シュウ！」

一風変わった新人三人衆が見事に揃い踏んだわけである。

位が上がっていくにつれて、果たしてこれは適職だったのかと考えてしまう。

「こちらとの連絡のやり取りはシュウを中心に宜しく。光属性の蝙蝠を召喚出来るんだったね？」

エレイズが見ると、彼は深く一礼して応じた。

「王城及び、近辺の同行についてはジェイドとフレアで協力して探りを入れてもらいたい。明日にでも行つて貰うわけではないから、今日から一ヶ月程度フレアは隠密部隊で研修を受けてもらう。その間に方策など決めて……ジェイド、君になら任せて大丈夫だよな？」

「おや、随分と高く買われているようだな。
しかしまあ、ご期待には添えるかと」

エレイズはにつこり微笑んだ。

「じゃあ、情報部の2人、残つて。他は即座に対応について」

「御意」

セバスチャンが代表して答え、全員が丁寧な一礼をすると退室した。

「シュウ、王城に入るに当たって……どうする？」

「どうする、とは？」

聞き返したシュウだが、何の事を言われているか見当が付いているようだった。

「君の出生を明らかにしておく？ それとも、謎の家出少年で通す？」

「うーん、後者が希望なのですがね。」

顔見知りも王城には多いかもしれませんが。他人の空似で通せない事もありませんが……妙に勘ぐられても面倒ですか」

シュウとエレイズが揃って首を傾げたところへ、ロザリアが口を挟む。

「偽装身分証明書なら、2日あれば製造できますよ。何なら、フレアちゃんとジェイド君のモノも」

シュウは声を立てて笑う。

「ボク、隊長のそういうところ大好きですっ」

「私も好き。じゃ、その方向で行く？ 名前は別に偽名にすることはないね。幸いどれも珍しい名前じゃない」

「それと」

シュウは、再び首を傾げた。

「どうやって、王城に雇われればいいんです？」

まだ聞いてませんけど」

「セバスチャンが既に手を打ってくれてるんだけどね。
重臣……文官の1人を買収した。その者に君達3名を紹介させると
いう手筈」

「幾らで?」

目をきらきらさせるシュウ。

「うーん、乞食が大貴族になれるくらい」

「そりゃ凄い」

「裏切られる心配はありませんの?」

ロザリアの質問に、エレイズは愉快そうに笑った。

「セバスチャンが、只、金を払う訳がないじゃない」

「?」

「しっかり、命も握ってるから」

ロザリアはちょっとあきれ顔をして、シュウはさぞ楽しそうに笑った。

それから、一週間経った。フレアは、隠密部の資料室に缶詰め状態である。もともと書物を読むのが苦痛でない夕チだから、まだましだった。もしこれが文字嫌いの勉強嫌いであつたら……ストレスで大変な事になっていたかもしれない。

「ジェイドさん……まだ、あるんですかあ」

そんなフレアでも、精神的にへとへとになってきた。

「一ヶ月の時間があるからねえ。あと3日はここの住人でいてもらうよ」

「うつつ」

「それで、セバスチャン隊長による口頭試験があるからね」

「セツ……セバスチャン隊長ですかっ！？ そんな、顔見ただけで緊張してテストどころじゃ無いですよお」

フレアが率直な感想を述べると、ジェイドは大笑いした。

「はははっ、いや、失礼。」

まあ確かにねえ。あの人の外見は、喜ばしい方の意味で一種の凶器だから」

「そうですよ。エレイズ様は、最近ちょっとだけ慣れてきましたけど……」

「美人は3日で飽きるというね」

「いやいや、3日じゃ無理です。3週間は必要ですって」

フレアは自分で頷きながら言った。そして恐らく、男性であるという事もあってセバスチャンに慣れるという事は出発するまでにはないそうもないと思われる。

「隠密部隊って……」

「ん？」

「なかなか……その、凄い事してますね。あたし時々、リア隊の任務でも何だか残酷だなあとか思う時があったんですけど……そんな事言っちゃられないんだなって思っちゃいます」

「だろうね」

ジェイドは頷いた。

「まあ、君みたいな純粋で可愛い女の子はそこまで慣れてしまう必要は無いさ。ただ、驚かずに、戸惑わずに僕の指示に従ってもらえるようになって貰いたいと……それだけのためだからね」

フレアは複雑な気持ちで頷いた。

「まあ、そうなんでしょうけど……」。

「だったらあたし、居る意味はあるんでしょうか？」

「恐らく、僕とシユウを合わせたよりも君の方がずっと戦力になるからね。相手が武力行使に出た場合、君を頼る事になるさ。そしてそれは間違いなく起こる事であるとエレイズ様もウチの隊長も見て

いらっしやる」

曖昧に頷いたフレア。

ジェイドの言う通りだとしても、それはそれで負担と感じてしまう自分に少し嫌気が出て来た。身を守る為に入ったといえる、『軍』。そもそも余り、戦いに向いていない性分だったのだとこの所、実感し続けているのだった。数々の任務で、クーファの力に頼るだけではいけないと自分で鍛えた魔法を使って戦う機会も増えてきた。その時、その時は夢中だから他のことを考えている余裕も無い訳だが、戦いが終わると微妙な不快感が胸にこみ上げてくる。

『そういえば、クーファ……父さんも戦いは好きじゃなかった、って言ってたっけ』

だとしたら、アークは何の為に戦っていたのだろうか？ 話してみなかった……。

「どうかしたかい？」

「あ、いえ……何でも無いです」

ぼうつと考え込んでいたので、ジェイドには何か思い悩んでいるように見えてしまったようであった。ちょっと心配そうな顔をさせてしまった。

「軍人なんだから、戦いには慣れないとな、って」

「ああそうか……」

「はい？」

今度は、ジェイドの方が考え込むような顔となる。

「いや、ね……。フレアはまだ“その段階”なのかと思って」

「はあ」

「僕は随分前から、人を殺しても貶めても、何の罪悪感も感じなくなってしまうていてね。隠密部隊としては褒められた性分かもしれないが、軍を一步でたら、恐るべき性分だよねえ。戦いに慣れても、人殺しには慣れない方がいいよ」

フレアは思わず相手の顔をじつと見たが、特に感情は見いだせなかった。

周りはみんな敵だらけの王城に潜入したと思ったら……この人は？

任務開始……つまり、王城への出発の日となった。

「私やウォーレンが行く事は殆ど無いだろうけど……ラファインはよく王城に呼ばれるからね。何か困った事があったら彼に言つて。意図するところは我々と同じだから」

エレイズはそう言つて3人を送り出した。

移動には、そのラファインが用意してくれた馬車が使われる。当然、フレアは馬車に乗るなど初めてで感心しっぱなしであった。また、ラファイン本人が同行する。

「はあ……何というか」

これが、レミュエルでも5本の指に入る大貴族バーフォンハイム家の長男かと感心した。どうしても貴族に対して偏見を持っていたフレアなのだが、流石エレイズとウォーレンの友人である。見た目通り爽やかな好青年だし、全く上からの態度を取らない。

「君達を危険地帯に送り込む事となつて、本当に申し訳ない」

というのが、そんな彼の第一声である。

「私は、頻繁に……とまではいかないが、王城に出入りをするから何か問題があれば遠慮無く教えて欲しい。出来る限り協力する」

「それは助かります。あなたと交流があるとなれば、王城勤務の貴族達の風当たりも弱まるのでしょいうな」

ジェイドが言つて、フレアは

『その心配があつた!』

と思ひ出す。普通の学校ですら、異物のように扱われる農民だ。王城にて生活するとなると、一体どうなることやら。

「それから、シュウといったかな?」

ラファインは少し首を傾げ、さつきからお喋りな彼にしては珍しく黙つたままのシュウを見た。

「はい」

「君とはどこかで会つた事がある気がするのだが……?」

フレアが驚いてシュウを見やると、彼は苦笑とも何ともつかない表情を浮かべた。

「いやいやあ、他人の空似つて奴ですよ。平民の俺なんかが大貴族のラファイン殿と、今回のような事でもないのにお目通りする機会があるわけがありませんって」

「そうか……失礼した」

まだ何か引つ掛かっているかのように、不思議そうにシュウを見ていたラファインであるが、その話題にはもう触れない事にしたよう

だ。

その後は、注意すべきことなどを言い含められている内に王都中心街に入った。ランカスト通りと呼ばれる王城を中心に四方へ延びている大きな通りの1つをバーフォンハイム家の馬車が進んでいく。中心街の住人には貴族が多いし、ラファインは珍しい程に誰にでも好かれる大貴族であつたから馬車に向かつて手を振る子供やわざわざ立ち止まって礼をする大人達で馬車の周りは埋め尽くされる。

「流石ですな」

ジェイドが微かにからかいを含めて言うと、ラファインは苦笑した。

「私などよりも、エレイズやウォーレンの方がよっぽどこのような歓迎に値する人物のはずなんだが」

フレアは思わず大きく頷いて、しまったと思ったがシュウにちょっと笑われただけで済んだ。

「身分というのは持つていても持つていなくても、良識ある者にとつては悩みの種になるというワケですね」

シュウは外の群衆を見やりながら呟いた。

フレアは馬車を降りて、王城を見上げた瞬間にクーファが以前エレイズのダークヒル城について、広くないと言っていたのは正しいなと思い知った。右から左へ首を動かしても全体像が掴めない敷地。

大袈裟でなく、ダークヒル城がまるごと入ってしまいそうな庭園が城の前に広がり、門から王城までは馬車で通れるように広い道が整備されている。驚くほど広い庭なのに芝は綺麗に刈り揃えられているし花の位置や種類、色まで整えられている。庭師は一体、何名雇われているのだろう。

見上げるように高い門が開くと、左右から衛兵が近付いてくる。銀に光る鎧で武装し、長槍を持っている。

「ラファイン・ディオ・バーフォンハイムだ。コーネリア殿紹介のジェイド、シュウ、フレアを王に謁見させる為、連れてきた」

「はっ、ご苦労様であります」

億劫そうに近付いてきた衛兵であったが、ラファインの顔を見た直後、嘘のように姿勢を正して恭しく一礼した。

馬車がそのまま門を抜けて、王城の手前で止まる。

たくさんの尖塔が見える純白の王城には、大きな窓が惜しみなく開けられている。中はきつと、相当に明るいのだろう。木製の二枚扉には、王家の紋章が刻まれている。それを門前にいたのと同じ格好をした衛兵が2人がかりで開く。

「案内は結構」

ラファインは慣れているのだろう。付いてこようとした衛兵にそう言つと、さつさと歩き始めた。3名もそれに続く。

中はまた、豪華絢爛であった。外壁と同じ色の内壁で、壁には金色に光る豪華な燭台があつてそれはだいたい1メートルごとに取り付

けられている。足下は大理石で、歩く度に固い足音が響く。ひつきりなしに、文官や武官、また小姓や侍女が廊下を通り過ぎ、その度ラファインに入り口の兵同様、恭しい礼をしていく。しばらく歩くと、目の前に巨大な赤い二枚扉が現れた。ここが、謁見の間である。見張りに立っていた、鎧ではなく文官の正装……白い重ねを纏った2人が大儀そうに頷いて扉を開く。

「ラファイン・ディオ・バーフォンハイム、参りました」

膝を着いて頭を下げたラファインに後ろ3名も習う。

「面を上げよ、ラファイン」

「はっ」

「コーネリアから話は聞いておる。ジェイド」

「はい」

「シュウ」

「はい」

「フレア」

「はい」

名前を呼ばれた順に顔を上げる。フレアは、王の顔など見るのは初めてであった。

『大したことなさそうなおじさんだなあ』

という印象を受けた。エレイズに会った時は背筋に電撃が走ったかのような衝撃を受けたし、ウォーレンと顔を合わせた時も心臓が悪くなりそうな緊張を覚えた。ラファインを見たときも、何と立派な人かと溜息をこぼしそうになった。……ところが、その3人の仕える王の印象は余りにも薄いというか、悪い。

申し訳ないと心から思うが、醜男だし、身体もたくましいとは程遠い。自分で歩いたことはあるかと聞いてみたくなるほど、不健康そうな中年太りした体型。

だからか、それとも持って生まれたものの違いか……王の至近に立つ男の方がフレアの気を引いた。

黒いローブを着て、フードを目深に被っている人物。誰かの影をそのまま切り取ってきたかのように、真っ黒でそしてがりがりに痩せている。

「ヨナ、この者達の配属はどうなっていたか」

「はい。」

3名共に、ヨーゼフ様の側近部隊に配属という事になっております」

「そうか……。あれは、この国唯一の王位継承者であるからな。新入りとて、一切の間違ひは許されぬと思え」

フレアは王、ランゴバル・アーサー・レミユエルの言葉よりやは

りヨナというらしい者に気を取られたので低頭が一拍遅れてしまったが、誰も気に留めていないようであった。

気の詰まるだけで何の収穫もない謁見は終了した。ラファインと共に3名が謁見の間を出るとそれにヨナも続いた。

「ヨナ、久しいな」

ラファインが目元を和ませると、相手は深く礼をした。王に対するものよりも、丁寧かもしれない。

「お久しぶりです、ラファイン大將軍。例の件でしたら、場所を移す必要がありますよう……。私の自室が最も確実なのですが」

「それで構わない。君達も一緒に来てくれ」

ワケの判らないまま、フレア達はヨナに続いて王城内を急ぎ足で進む。

「ヨナ参謀長、アレウス將軍がお話しをと……」

「お待ち頂いてくれ」

「参謀長、来週のハロルド侯の面会についてですが、ロイズ様が幾らかご相談があると」

「後ほど伺う」

そんなやり取りがひっきりなしに行われていた。

「相変わらず、君は忙しそうだ」

「はい。本来ならば、宰相のすべき仕事まで私に全て回ってきているものです」

フレアは少し妙な反応をしてしまったかと焦った。

ダグラス宰相の話なら、エレイズから聞いていた。問題の人物の1人だ。

「宰相は不在なので？」

ジェイドが質問すると、ヨナは痩せた肩をすくめた。

「ウラデイス殿のサトゥール城を訪問したきり、一週間近くお戻りにならない。その理由というのが、国土防衛の為の内密な話し合いというのだから聞いて呆れる」

見た目とは違って、ずけずけと物を言うタイプらしい。

待て、聞いて呆れる……？

もしかして、ヨナは事情を知るこちら側の人間なのだろうか。フレ

アは少し首を傾げてヨナを見つめた。

既に彼は前を向いていたので、視線は合わなかったが。

使えなさそうな王だったけど、息子はそうでもないみたい。

「お入りください」

ヨナが示した部屋は、重役の物とは思えない。つまり、かなり狭い部屋であった。必要以上に広いとさえ思える王城でありながら、参謀長の部屋は小さいようだ。

「贅沢を好まないと申し上げたところ、大喜びで小さな空き部屋をあてがわれたのです」

まるでフレアの内心を読み取ったかのようにヨナが説明した。

「少々お待ちを」

ヨナは4人が部屋の奥に入ると、扉に触れて短く呪文を唱えた。これはフレアも知っている術。魔法による外からの干渉を妨害する、一種の結界だ。

これから始まるのは、結界が必要な話というわけだ。

「先に、あなた達に私の立ち位置を説明しておきましょう」

ヨナは3名の新参者を見渡した。

「大体、予想はついているでしょうがウラデイスの件を知り、ラフ

アイン殿やエレイズ殿、ウォーレン殿の側について動いています」

「やっぱり……」

フレアは思わず声を出した。

「参謀長という地位にあるため、多忙ではありますが、あなた達3人のサポートはさせて頂くつもりです。特に、外部との連絡を取る場合は私を頼ってください」

話を聞いているのだろうか、特にシュウを見て言った。

「王城内で、ウラデイスの事を知り、尚かつ反ウラデイスの立場であるのは私と、あとは1人だけです。何か、この件について話す時にはくれぐれも注意してください。官僚だけではなく、使用人達にも気を付けてくださいますよう。それらを情報収集に使っている官僚もいますので、たかだか使用人と油断せぬようにしてください」

ジェイドは当然の様に頷いているが、フレアには驚きであった。

「反ウラデイスは、ヨナ参謀長ともう1人だけという事でしたが……その逆は？」

シュウが尋ねると、ヨナは少し表情を硬くした。

「実を言うと、多いですよ」

「！」

「ご覧になった通り、レミユエルの国王陛下は聡明とは言い難い」

フレアは何とか頷くのを堪えた。ラファインの性格はよく聞かされている。

「それを余り、自覚していらっしゃらないという方でしてね。正直、ウラデイス派と申しましょか……その、ダグラス宰相のお陰でいわれのない窮地を抜け出した者が多く、かなりの信頼を受けています。また、ウラデイスが3名の貴族大將軍を抱き込んでいるという事も大きい。この王城には、その血縁者がかなり多く蔓延って……失礼、登用されていますので」

「それでは、そろそろラファイン殿はお戻りになったほうがよろしいですね」

「ああ、……そうだな」

ラファインは頷いて立ち上がる。

「あなたがたは、これからヨーゼフ様のところへ。使用人が案内しますので」

ヨナはフレア達3人にはそう指示した。

王子ヨーゼフは、フレアやシュウと大して変わらない年齢であるが、王の政務を補佐しているという。

「では、くれぐれも気を付けて」

ラファインは顔色を少し心配に染めてフレア達を順に見てから、去って行った。

その背中を見送る間もなく、1人の使用人がやってきてヨナに恭しく一礼すると話を聞いていたようで

「ご案内致します。こちらへ」

と、フレア達に頭を下げた。

「では、私は仕事がありますので、ここで」

ヨナは先程の倍とも思えるような急ぎ足で廊下を突き進んで行った。相当に時間が押していたと見える。

王子がいるのは、王の謁見室とヨナの部屋があつたのとは別棟である。広く、明るい渡り廊下を抜けていくと雰囲気随分と変わる。先程までいた棟には、どちらかというと文官が多くヨナと同様、仕事に追われて駆け回っている印象が強かったのだがここには武官が多い。その者達も静かに警備に立っていたり、ゆっくりと巡回していたりと慌ただしさが無い。

「こちらです」

立ち止まったのは、謁見の間よりも幾らか控えめな大きさの二枚扉。銀の装飾の黒い扉だ。

そこに、厳重な装備をした3名の衛兵が近付いてきた。この中は、彼らが一挙一動を見張るようである。新入りの武官など、客人よりも寧ろ疑るべきものなのかもしれない。

中に入る。

そんなに広くないな、というのがフレアの第一印象であった。王の謁見室が余りにも広かったので感覚がマヒしているのかもしれないが。

正方形の部屋で、黒い絨毯が床を覆っている。正面に大きな窓があつて、午後の日差しが強く照りつけている。

その窓の手前に座っているのは、フレアの想像とは似ても似つかない……つまり、全くといっていいほど王に似ていない姿があつた。

「初めまして」

につこりと微笑んだのは、フレアと大体同じくらいの年頃の少年であつた。さらさらとした黒い髪は肩に付くかどうかの長さで、綺麗に切り揃えられている。黒い瞳は少女の様に大きく、印象的。ほっそりした顎のラインで、身体もまた細い。しかし、弱々しい印象ではない。兎に角、魅力的な少年であつた。

慌てて3人が低頭すると、軽い笑い声が聞こえた。

「大丈夫ですよ。余り、気になさらず。

あなた達、一端、外に出てください」

「しかし……」

3名の衛兵が戸惑うが、ヨーゼフは微笑んだ。

その笑みは、上品ながら充分に人を従わせる力を持っていた。

「心配は要りません」

「……はっ」

未練ありげに3名が出て行くと、殆ど同時にヨーゼフ王子は椅子から飛び降りた。啞然とする3人に微笑みかけ、

「どうぞ、座って」

と。

「僕は、全て知っています。ヨナから色々と聞いていますので」

余りにも率直に教えられて、フレアはともかくジェイドやシュウで

さえも口の利き方を忘れたようになってしまった。

「ヨナ参謀長のおっしゃった、もう1人とは……ヨーゼフ様御当人だったのですね」

ジェイドがやつとの事でそう言った。

「はい。ですが、頑張っただけ知らない振りを通してあるので、皆様も……まあ、ヨナにしつこく言われていると思いますが気を付けてください。父にも黙っているというのは、ちょっと問題のタネになりかねないので」

「何故、国王陛下にお伝えにならないのです？」

シュウの質問に、ヨーゼフは苦笑した。

「父上は、表面上、僕を大切にしていますが……それは、王家の血を絶やさないといいただけ。生きていれば、僕なんてどうだっていいのです。」

国政で父が必要としているのは僕のサポートではなく、渦中の人、ダグラス宰相です。ですから、ウラディス殿とダグラス宰相が手を組んで国家転覆を企んでいるなどと申し上げたところで……」

肩をすくめた。随分と、気安い言動の王子である。

そういえば、ヨーゼフは服装も相当に気安い。生地などはかなり高級感が漂うが、ぱっと見はヨナの黒衣と殆ど変わらない。

「僕個人としては、今日からでも皆様に近衛兵第一部隊となっただけだいたいくらいなんですが、流石に周りの目が気になります。折

角今まで、勘ぐられないようにしてきたのが台無しになってしまいますから。

そして、1つ怖いのが僕もヨナも大体でしか王城内の宰相派を確認していないところです。さっきの3名は、いつでも僕の至近で警護に務めていてくれる人達なのですがその中に僕や父上を殺そうと画策している者がいないとも限らないわけです」

誰が敵か判らない、というワケだ。それは、言うまでもなくかなり危険な状態である。

「もしかしたら、王城内で宰相色に染まっていないのがここにいる四名とヨナだけかもしれない。つまり、僕は常に暗殺の危機にさらされているんですね」

「……どうすればいいんでしょうか」

フレアは思わず言った。

「だから、嫌かもしれませんがシュウ殿とフレア殿は僕と年が近いですので、お友達になりましょう」

「……はい？」

フレアだけでなく、シュウまでも首を傾げた。

ジエイドだけは納得して軽く笑う。

「成る程、我が儘を通されるわけですね」

「そう。僕は外出もままならず、近くにいるのは大抵20や30は

年上の無骨な戦士。だから、ヒマなんですよ」

ヨーゼフは微笑んだ。

「そんな僕が新しくやってきた、年頃の近い2人を側に置きたがっても不思議はないんです」

「な……成る程」

確かに、と思ったフレアであった。

この広いだけの……殆ど見ていないが、そう断定したくなる……王城に友人もなく1人ポツンといたとしたら、ヒマどころか寂しくて自分だったら気が狂うかもしれないなと思った。

「また、あなた方はコーネリアの紹介ですがラファイン大將軍の推薦もある……という事になっています。まず、疑われる事はないでしょう」

風変わりな王子、暗躍する者達。

そして、言った通りにヨーゼフの我が儘は通されて翌日からフレアとシュウは王子の話し相手という名目で側近に加えられた。

「僕はお二人やジェイドさんが羨ましい」

ヨーゼフは笑う。

「どういことですか？」

シュウはもう、お気軽に話せるようになっていようだ。

「まあ、簡単に言えばこの国の殆どの男がそうであるようにエレイズ大將軍のファンなんですよ」

何とまあ、俗っぽい言葉を使う王子だろうか……。

「あ、フレアさん、王子っぽくないか思ってるでしょ？」

「いやあ……あはは」

見抜かれた。

「小さい頃、よく王城を抜け出して、城下町の子供と遊んでたんですよ」

「「はい!?!」」

また、2人揃って、仰天の声を上げてしまった。

驚かせた事を楽しんでいるヨーゼフ。

「流石に、今はやってませんよ？ でも、僕が子供だからって油断してたんですね。騎士の方に、頼んで……いやあ、あれはタチの悪い命令だったかな？ 兎に角、こっそり裏門から出してもらったんです」

「いいですねえ。引きこもりに碌な支配者はいませんから。王子の治世になるのが楽しみですよ」

「ずけずけ言うシユウである。しかし、ヨーゼフはちっとも気に留めない。どころか」

「そうそう。父は、世間をよく判ってないんですよ」

などと言うからフレアはどうしたらいいか判らなかった。

「こんな時間に申し訳ない」

大体、一週間が経った頃。1人、一般職に就いたジェイドは深夜、ヨナに呼び出された。

「いえいえ。何か起きましたか」

どちらの部屋でもなく、庭園の隅で二人は顔を合わせた。自分達の周囲を結界で覆っている。

「あなたは、エレイズ軍隠密部隊……つまり、セバスチャンの部下なのでしたね？」

「ええ」

「それを見込んで、お願いがあります」

ジェイドは口元だけで微笑んだ。

「秘密の任務は得意ですよ」

「ダグラス宰相の尾行をして頂きたい」

「ほう。何か、引っ掛かってらっしゃる？」

「ええ。私はてつきり、ウラデイスの城との往復を続けているだけだと思ひ込んでいたのですが……もっと、他の目的地があるのかもしれないと思ひまして」

「それは、何故？」

「このところ、私はウラデイス達4人の大將軍の城を監視し続けていたのですが全く、ダグラスが現れないのですよ。別の場所を密談に使っているのか、全く我々の予想していない者とも手を組んでいるのか……」

ジェイドは頷いた。

「敵の全容は把握しておくに越したことはありませんからな」

「そういう事です。宜しく頼みますよ」

「では、数日……3日程、私が不在になる言い訳の用意をしていた
だけですか」

「それは、既に」

ジェイドは微笑んで一礼すると、闇の中に消えていった。

*

「ロザリア隊長……」

情報部の執務室に入ったイアリスは思わず息を飲んだ。

そこにいるのは、本当にまれにしか見ることの叶わない仕事モード
のロザリアであった。全身から、これが戦士であったなら殺気と呼
びたくなる気配が溢れ出して目は爛々と輝き口では何かぶつぶつと
呟きながら片手で書類のページを繰って、片手は物凄い速度でペ
ンを走らせる。

しばらく、じっとその光景に立ちすくんでいたイアリスにロザリ
アは気が付く。作業が一段落したのだった。

「あ、イアリス。なあに？」

瞬間的に、いつもの彼女に戻って柔らかな微笑みを向けた。

「は、はい。」

エレイズ様から、調査命令が幾つか出てます。どれも、国外の不法組織でウラデイスとの接点をジェイド……王城潜入中の隠密部隊の者が見つけ出した組織です」

ロザリアは頷いて、自分がさっきまで戦っていた敵を見やる。資料

「この関係だね。うん…… A部隊の者を誰か探してきてくれる？」

「判りました」

「あ、ガーディ副官！」

イアリスは丁度よく、A部隊長官であって情報部副官のガーディを見付けた。

「おお、どうした？」

振り返ったのは、温和な目元の初老男性。背はそんなに高くはないが、ぴしっと伸びた背筋とキツチリした服装は有能な印象を与える。若い頃は中々に美男だったのだろうかと、イアリスは思っのだった。

ロザリアに説明したのと同じ事を伝え、それから隊長がA部隊を動かす予定である事もまた伝えた。

「承知したよ。隊長は今、何をしているかな」

「私が執務室に入った時は、本気モードでしたが一段落ついたみたいです」

「それなら直接行った方が早いな。じゃあご苦労様」

紳士的に微笑むとガーディは執務室の方へ向かった。

敵の実体が明らかになり始めた。

「失礼します」

「やあ、ヨナ」

恭しく一礼して、ヨーゼフの私室に入ったヨナに彼は明るく手を挙げて挨拶した。フレアとシユウは頭を下げる。

「幾らか、お耳に挟んでおきたいことが。2人にも聞いていただきたい」

そして、お馴染みともなった結界を張ると3人へと近付いた。

ヨナが話したのは先日ジエイドに任せた任務と、その後のエレイズ軍情報部隊が行った調査結果。

「1つは聞いたことがあるな」

ヨーゼフは無表情で言った。

「アルド……彼が、闇属性魔具の流れを管轄しているといっても過言ではない……だよね？」

「はい、仰る通りです」

「闇属性？」

フレアが耳慣れない単語を繰り返すと、ヨナが説明をしてくれた。

「魔法の属性は、光・炎・水・氷・雷・土……といわれていますが、正確には、これに先程言いました、闇属性が加わります。しかし、闇属性の魔法というのは9割方が禁術ですから一般の魔法使いが触れる事はまずありません。というか……使用したとなると、まず法に抵触します。フレアさんの様に、優秀な魔法使いであっても知らない事は珍しくありません」

いや、あたしは優秀でもなんでもありません……と言いかけたが、話を滞らせても仕方がないので口は噤んだまま頷いた。

「魔具というのは、少量のきっかけとなる魔力を流してやれば、その魔具に込められた呪文が……例えば使用者のキャパを上回っていても発動させることができるもの、でしたっけ」

シュウが言うと、ヨーゼフは頷いた。

「模範解答だね。」

これで判ったと思うけど、ウラデイスは相当に厄介な連中と手を組んでいるよ。ここににいる人達の足下にも及ばないダメ魔法使いであっても、魔具を使用すれば実力をかなり底上げすることが出来る。シュウ、内密にウォーレン殿と連絡を取りたいんだけど……ライトバットを使わせてもらってもいい？」

「判りました」

ライトバットとは、シュウの契約魔獣であるBランク光属性獣族蝙蝠型の魔獣。戦いよりも、偵察や探索、また情報伝達に向けた魔獣である。召喚者の言葉を、どんなに離れていたとしても一方的ではあるがそのまま伝える事が出来るのだ。

「じゃあ、今すぐにも頼むよ」

シウは頷くと、短い呪文を唱えた。

小さな物音と共に、小さな煙が上がって金色に光る蝙蝠が現れた。かなりサイズは小さく、フレアの片手にも乗りそうだった。

「コルドワークズの、ウォーレン大將軍のところへ行つて。本人を確認したら、連絡を」

軽い、超音波のような鳴き声を上げると蝙蝠は窓から飛び出した。そのスピードは相当なものだろう。フレアは、光属性はスピードも持ち味であつたのを思い出した。

「ウォーレン大將軍に、何を？」

フレアが尋ねるとヨーゼフは説明する。

「僕が知る中では、彼が闇魔法や魔具に関して最も詳しいんだ。とても頭のいい人だしね。この手の話を相談するにはうってつけだと思つて」

「やっぱり、そうなんですか……」

エレイズが……今となると、随分昔の事に思えてくるが入軍時、ウォーレンの知識ならばクーファの謎が解けるかもとまで言っていた

のを思い出した。

「残りの2組織に関しては、更に調べを進めないかね……。出来ることなら、不法組織だ。ウラデイスと手を組んでどうこうされる前に、摘発してしまえると良いんだけど」

「その方向で手を打ってみましょう」

「うん、任せたよ、ヨナ」

フレア達は、こうしたやり取りを見ていると現国王よりもヨーゼフの方がよっぽど決断力に優れた施政者に見えてくるのだった。

「組織壊滅を行うのであれば、王国軍ではなくエレイズ軍、ウォーレン軍、ラファイン軍のうちどれかに依頼しよう。その方が、次いでに調査も行いやすいよね」

「はい」

ヨーゼフの考えにヨナは深く頷いた。

「それについては、じゃあ、俺がロザリア隊長に伝えます」

シュウが言った。

「でも、ええとライトバットが……」

フレアが指摘すると、シュウはにやりという風に笑った。

「大丈夫。俺とロザリア隊長はホットラインが繋がってるから」

「……?？」

情報系の魔法には詳しくないので、フレアには全く見当が付かなかった。

*

「ということですね、エレイズ」

その夜、ロザリアはエレイズの元へシュウからの伝言を届けに来た。

「君の可愛いウサギは便利だね」

「ふふ、そうですね」

彼女の脇には、ちよこんと金色に光る可愛らしいウサギが二本脚で立ち上がって耳を動かし、2人の話を聞いているようだった。無論、このつぶらな瞳の長い耳を持つ愛すべき姿の生き物も魔獣である。光属性の獣族ウサギ型。Aランク魔獣であるが、例外的に人の言葉を聞き取るだけでなく話す事も出来る。また、聴覚に優れており耳を澄ませば、例えば王城の一角にいたとしてその中で交わされる言葉の全てを聞き取れる。それが耳元で囁いても聞き取りにくい程の小声だったとしても。それから、もう一つの能力が離れたところに召喚された同じウサギ型魔獣との通信。シュウはこの能力を利用してロザリアと連絡を交わしているのだ。ちなみに、シュウが召喚したのはBランクのアイス・ラビット。姿は雪山の白ウサギそのものである。

「ヨナなら、上手く国王を説得するはずだね。準備はしておいてい

い
」

「そうですわね。ラファイン大將軍にもお伝えしておきましょうか？
ウォーレン大將軍には、ライト・バットを行かせたようです」

「うん。頼んだよ」

エレイズは頷きながら言った。

王城内での初任務。……コスプレっすか？

それから、一週間。ヨナが国王へウラデイスと手を組んでいるとされる組織の一斉摘発を認めさせた。当然、ウラデイスの件については黙秘しての事。ヨナは2組織について意識的に過大評価をして例の3軍以外では対処が難しい可能性がある事を回りくどく重ね重ね強調した。これが功を奏し、1組織にはエレイズ軍、もう1つにはラファイン軍に出兵の命令が出された。

「ウォーレン大將軍は、信用無いからねえ」

話を聞いたヨーゼフは笑いながら言った。

「僕はある意味で、一番信用できる人柄だと思うんだけど。父上は嫌いみたいだ」

「それ……どういう事ですか？」

フレアがちょっと心外そうに聞く。ヨーゼフにとってエレイズはウォーレンよりも信用に足らないと評されていると聞こえる。

「ああ、ゴメン、ゴメン」

その意図を感じ取ったかヨーゼフは苦笑した。

「別に、エレイズ大將軍やラファイン大將軍が信用に足りないって言ってるんじゃないんだ。僕が言いたいのは、そうだな……あの人は頭が良くて様々な事を画策して動いているように思えるけど、結

局のところ１つしか考えてないんじゃないかって事」

「……………それって？」

疑問の答えに再び疑問をぶつける形となったが、判らないものは仕方がない。

「実は、何度か顔を合わせた事があるし、喋った事もあるんだけど、あの人は自分の部下や友人……………つまりエレイズ大將軍やラファイン大將軍にとって利になる事しかしようとしななんだ。

その点、エレイズ大將軍とラファイン大將軍は大人だから。エレイズ大將軍は形だけ、だらうけど国の為にも尽力しようとするし。ラファイン大將軍は言うまでもないよね？ この国家に属するもの、全部大切に思っている」

「あ、要するにウォーレン大將軍ならピンポイントでやって欲しいことを迷わずやってくれるって事ですな」

シウウが簡潔にまとめると、ヨーゼフはそうそう、と嬉しそうに頷いた。

「僕は、エレイズ大將軍とだけは話した事が無いんだよなあ。やっぱり、近くで見ても噂通りの美人なの？」

本当に俗っぽい王子だなと思いつつ、フレアは大きく頷いた。

「初めて顔を合わせた時なんて、魂抜けそうになりましたよお」

「ああ、それ、判る」

「え、シュウも!？」

「何でそんなに驚くかな」

「いや、シュウって普通の人に興味持つものに興味無さそうだなあって」

「ええーっ。ロザリア隊長の不思議ちゃんオーラが移ったかなあ。俺、結構普通のつもりなんだけど」

そこで、ドアがノックされた。

「お楽しみのところ失礼します」

「「ジェイドさん!」「」

フレアとシュウは、声を揃えてしまった。当初の計画とは違って、フレアとシュウが王子の話し相手という仕事を主に務める事となってしまった為、ジェイドとは最近、殆ど顔を合わせていなかった。

「どうしたの?」

ヨーゼフは興味を持ったように、じっとジェイドを見る。

「ヨーゼフ殿下に、少々ガールフレンドを貸して頂きたく参りました」

丁寧な文面に、巫山戯を混ぜているところが彼らしい。

「あたしですか？」

「そう」

フレアが立ち上がると、ヨーゼフはちょっと笑う。そして

「貸してあげるけど、僕の大事な彼女に手を出さないでね」

とジェイドの冗談に便乗した。

全くもって、俗っぽい……。

「御意」

わざとらしく真面目に応じるジェイドもジェイドである。

「どうしたんですか？」

「当初の予定通りの仕事をしようか」

「あ……はい」

第零部隊の仕事という訳だ。

「まあ、昼間っから話し合う内容でもないから今晚、薔薇園の辺りにいてくれるかい？ ヨナ参謀長も含めての話し合いをしたい」

「薔薇園ですか」

フレアは、頭に地図を思い出せてほつとした。

「ボクと参謀長の密会場所になってるんだよ」

「……なんか、その言い方嫌です」

ジェイドは声を殺して笑った。

「それと、わざわざ呼び出した理由だけど」

「あ、……そうですね」

これだけなら、あの場で話しても全く差し障りない。

「ちょっと付いてきてくれるかい」

ジェイドに従って黙々と歩いている内に辿り着いたのは、昼間はまず人が訪れない被服室。

「そこに、衣装を既に押し込んでおいたから」

「へ？」

「あと、仕事内容もね。じゃあ頼んだよ」

フレアが首を傾げながら、被服室に入るとそこには革製のやけに立派な鞆が置いてあった。近付いて開けると、まず目に付いたのは暗号文。一ヶ月で必死に覚えたもの。そして、それは取り敢えず置いておくとして……。

「あ、……成る程」

ジェイドでは出来ない情報収集などと、納得した。

鞆には王城仕えのメイド服が入っていた。

着替えてから、よくよくメモを見る。メイドの仕事内容から何かなにまで丁寧に書かれている。これを本当の新入りに見せてやりたい。おしとやかな行動が酷く苦手なフレアなのだが、仕事だからそうも言っていない。兎に角、怪しまれては元も子もないのだから……。

フレアの仕事は、重要だが単純なもので誰がウラディスとダグラスの陰謀を知り、また加担しようとしているか調べる事。それを上手く使用人達のお喋りから推測する訳だ。

潜入には成功したんだけど、いきなり正念場。

被服室を出ると、いきなり掴まった。

「あら、あなた……見ない顔ね？」

30代くらいの女性。フレアと同じ、つまりメイド服を着ている。

「はい、昨日から入りました、アンナといいます」

王国で最も多い名前らしい。

「そうだったの。私はカイラ、メイド長よ」

「ああ！ 宜しく願います」

緊張している新人の物まね、というタイトルが付きそうな対応をした。それに相手は騙される。

「緊張なくていいわ。じゃあ、早速手伝って」

「はい」

いきなりトップ（！？）に接近成功してしまった。この人ならば、多くの情報を知っているのだろうが、逆にこの人に疑われてはまずい。慎重に。

フレアは「覚えが早い」と褒められながらてきばきと掃除やら、

お茶の支度やらをカイラの横で手伝った。覚えが早いというより、無論、言えたものではないが、先に情報として知っていたのだ。驚くことではない。

「ちょっと休憩しましょうか」

「はい」

すっかり、カイラの可愛い妹分的ポジションを獲得した。

2人で休憩室に入ったところで、仕事開始。

「そうだ、カイラさん」

「何かしら」

「メイド長さんって、やっぱり……大將軍様なんかがいらっしやった時に対応を任されたりするんですか？」

「そうね。失礼があつてはならないから」

頷きながらカイラ。

「あ、あの」

ここはセルフイーの真似をしてみる。

「ウォーレン大將軍がいらっしゃったり？」

「ふふ、ミーハーねえ、アンナちゃん」

「えへへ」

照れてみせるフレア。無論、あまりウォーレンに関心はない。

「そうねえ……でも、やはり平民出身のウォーレン大將軍は余りいらっやらないわ。エレイズ大將軍なんて、あの日以来……」

「あの日？」

フレアは、思わず食い付いてしまった。

ウォーレンの100倍は関心がある話。カイラは、純粋なミーハー心ととってくれたようだ。

「まあ、秘密の話でも無いから。」

エレイズ大將軍が珍しく王城にいらっしゃった日があったの。まあ、驚くような事じゃなくて……大規模な軍事会議が行われていたんだったわ。だから、他の大將軍様達もいらっしゃってた。

それで、その日ね……偶然なのか何なのか、それまでも病に臥せていたエレイズ大將軍の婚約者が亡くなったの」

「婚約者なんて……いらっしゃったんですか」

フレアは思わず、ぽかーんと口を開けてしまった。

「元気な時に、何度か見かけたのだけど。それは素敵な殿方だった

ものよ。確か、お名前がユエ。そうそう、それで」

「失礼します！」

そこへ、何人かの同業者が入ってきて話しは中断された。

「カイラさん、ちょっとお願いしても……」

「どうしたの？」

「急遽、ウラディス大將軍がいらっしゃる事になったそうです」

「まあ、大変。アンナちゃん、良い機会だから一緒にいらっしゃい」

「は、はい……」

フレアの緊張は、カイラの予想とは全く別のものだったのだがこれも都合良く解釈されたようだ。

「ふふ、前準備を手伝ってもらっただけだから」

「新入りさんですか？」

「あ、はい。アンナです……宜しく願います」

「かわい〜！ え、いくつですか??」

「今年で17です」

「若い！」

きゃっ、きゃっという効果音がピツタリくる調子で大騒ぎの2人。

「エリザです」

「ハンナです」

長い髪の方がエリザ、ショートカットの方がハンナという雑な覚え方をしたフレアだった。

「さあさあ、急いで！」

とカイラに急かされた一同だった。

「想定外が起こったね」

ヨーゼフが少しだけ心配そうに言う。

「そうですね。ウラデイスの实力はなかなかのものです。フレアと接触した場合、彼女の強い魔力を知られてしまう危険があります」

シュウも頷きながら言った。

「一般兵に紛れ込ませるよりも自然かつ安全かと思ったんだけど。後者については判らなくなったな」

ジェイドが息を吐いた。

「まあ、ど新人に賓客の対応なんてさせないでしょ」

ヨゼフが言つて、2人ともそれならいいと切に思った。

ウラデイスは特にヨゼフの知るところ、莫迦な男でないしダグラスという頭までついている。妙に魔力の強い使用人を、単なる偶然で受け流す程お人好しとは思えない。調べられたら、そして警戒がなされたら厄介な事この上ない。

カイラの指示でエリザ、サーシャがテーブルの支度をしている間、一番下っ端であるフレアは床の掃除をする。元々綺麗だから必要ない気もするのだが、そんなことを言うわけにもいかない。

「アンナちゃん」

「はい？」

「もう大丈夫よ。掃除用具、下げてしまって頂戴」

「判りましたあ」

フレアは雑巾とバケツを引き下げながら、全く別の事を考えていた。ヨーゼフ達と同じ事……つまり、万が一ウラデイスと接触する事となり正体がばれたらどうしようという心配についてである。

『まあ、この分なら……』

客人が来る前に、部屋から出されるだろう。それならいい。

しかし、偶然というものはあまりにも突然と皮肉を好む。

フレアが豪華な客間を出ようとした時だった。

「おや、失礼。急ぎ過ぎましたかな」

「……！」

危うくぶつかりかけたその人こそ……。

「まあ、ウラデイス大將軍！」

エリザが思わず声を上げた。

「どうなさったのです？ 案内の者は……」

カイルも目を驚かせる。

「いや、そこまで一緒でしたが。ダグラス殿を呼びに行ってもらったですよ」

「はあ」

フレアは表情を変えない努力をして、相手を観察した。

年は30代の後半くらいだろうか。予想に反して、高慢な貴族という空気は無くどちらかというと鍛えられた武人そのものといった容姿。背はそこまで高くないが、どこか威圧感を与える。顔立ちは美男というのでこそないが、引き締まった顎のライン、鋭い瞳はなかなか好感を持てる。

「こちらは随分とお若い……ん？」

ウラデイスはフレアを見ると、顔を少ししかめた。

『勘付かれた……？』

「変わったメイドもいるものだ」

当然カイル達3名は首を傾げたものだが、フレアは背中に汗をかいていた。

「一度、戻った方がいいですか？」

「いいえ、どうぞお座りになってください。今、支度が終わつたと

「ころですので」

カイルは気を取り直して愛想よく笑った。

「アンナちゃんは、戻っていいわよ」

「は、はい！ 失礼します」

逃げるように出て行ったフレア。

「彼女は新人？」

「ええ。つい最近入ったばかりですわ」

「……不思議な事もある」

不思議な思いをしているのは、メイド3人も同じであった。

噂大好きのメイドさんは味方に付けると非常に便利。

その夜。

フレアは結局、ウラディスと再会する事はなく済んだ。しかし、
— 見して疑われていたのは明らかである。

今は、エリザと清掃業務に勤しんでいる。

「驚いたわね」

「はい。吃驚しました」

フレアは差し障りのない、正直な感想を述べる。

「あれが、ウォーレン大將軍だったら更に良かったんだけどね」

「人気ですねえ、ウォーレン大將軍って」

「あら、アンナちゃんは興味ないの??」

「そんな事はないですけど……」

ちよつと首を傾げてみせた。

「そういえば、エリザさん」

フレアは、ちょっと強引に探りを入れてみる事にした。裏があると思われないように、なるべく噂好きなだけの女の子を装わなくてはならない。

「ウラデイス大將軍といえば……あの」

「どうしたのよお、声なんて潜めて」

そう言いながら、エリザは興味津々といった様子でフレアに近付いた。やはり、ゴシップ大好きのようなのだ。

「あたしが言ってたって事、秘密にしてくれますか？」

「うんうん」

まあ、噂が広まったらそれはそれで良い。

「ウラデイス大將軍とダグラス宰相が手を組んで何かしようとしてる……って噂を街で聞いた事があるんですけど」

「ええ？ 何かって??」

「よく判らなかつたんですけどお、国家の存亡がどうのって」

「おおごとじゃない!」

目を丸くするエリザ。

「あ、でもね」

エリザの方も声を潜める。

「確かに、最近ウラディス大將軍とダグラス宰相が面会することが多いのよね。それから、ガザン將軍って判る？」

「えっと……はい」

將軍というのは、名前の通り大將軍の1つ下の位。城は持たず、王城に仕えて大体1000名程度の軍を指揮する。

「この前、ダグラス宰相と真剣に話してるところ見ちゃったのよね。それから……」

サーシャは続けざまに5名の將軍、それから有名な文官の名前を挙げた。

「言われてみると、なーんか怪しいわね！」

「ですよねえ」

怪しいどころの騒ぎでないと知っているが、それは勿論口に出さず単にうわさ話に夢中になっている体で何度も頷いたフレア。

……大収穫ではないか。

それから後、仕事が終わって解放されるとすぐに待ち合わせ場所の薔薇園の一角に向かった。こう言つと、ロマンチックな気配がするが、隠密の仕事先の話をするのが目的である。それに相手はジェイドだし……いや、失礼。

「こちらです」

この丁寧な呼びかけは、ヨナの声であつた。その方向に行くと、既に2人が待っている。

「遅くなりました」

「どう？ 収穫はあつた？」

ジェイドがまず、確認する。フレアは頷いてから、エリザが上げ連ねた名前を伝える。

「才能あるよ、フレア」

「ど……どうも」

「それと、ウラデイスとは接触しましたか」

ヨナに、フレアは頷く。

「一瞬でしたけど……多分、只の娘っこじゃないって気付かれませんでした。まずかった、ですよね」

「そうなってしまったからにはしょうがないけどね」

ジェイドは顔をしかめる。

「でも、君の方もウラデイスの魔力を覚えたんじゃないかい？」

「は、はい」

「だったら、次からは自然と避けるように努力してほしい。それと、……不自然なところは無かったかい？」

フレアが首を傾げると、ヨナが続ける。

「一瞬では判りにくかったかもしれませんが……。例えば、様々な気配が混在していたとか」

「……あ、そういわれてみると」

あの時、漠然と感じた不自然の正体が解った。

「確かに、強い魔力というだけじゃなくて……個性が無かったというか。側にいるだけで魔力が感じられるような人ほど、その独特の感じが強くなるのに……何というか、雑踏の中にいるみたいにごちゃごちゃした魔力でした」

ジェイドとヨナは顔を見合わせて頷いた。

「……何か？」

「お陰で確信できたよ」

「彼は、闇魔法を用いて他者の魔力を奪い取り、自らの魔力の最大値を底上げしています」

フレアは目を大きく見開いた。

「そんな事が！」

「その闇魔法に関してはウォーレン大將軍の情報ですから、まず間違いはありません。

問題は、時間を掛ければ掛けるほどウラデイスの力が強まってしまふ事です」

ヨナに頷きつつ、ジェイドは苦い表情を浮かべた。

「かといって、こちらからは動けない。
だから、我々の仕事だよ。フレア」

「……??」

ジェイドは真面目な顔で言う。

「王城地下が、大書庫となっている事は知ってるね？」

「は、はい。国内で発刊された書物は全て保管されていると……。それから禁書も」

言いながら、フレアはジェイドの意図が判った。

「対抗策を、そこから探すんですね」

「そう。城内見取り図はヨナ殿が既に用意してくれた」

コートのポケットからかなり詳細な地図を出して、フレアに見せた。

「それで、君のメイド業に裏業務をもう一つ加えさせてもらいたくてね」

「は……はい」

「この地図を見てもらえれば判る事なんだけど」

ジェイドは指を軽く打ちあわせて、小さな光を発現させた。詠唱破棄で光属性の魔法が使えるこの人は一体、何者なんだろうとフレアは思わず考えてしまった。

「地下への階段が、王の寝室から通じるものしか無いんだよ」

「あ……」

「だから、君には王の寝室への抜け道を探して欲しい。王城や貴族邸といったところには、まず間違いなく主の部屋に通じる抜け道がある……いや、逆だな。主が有事の際に外へ、人知れず逃れる為の抜け道があるものだ」

「それを探すんですね」

「そう。ボクも隙を見付けてやってみるが……王国軍はエレイズ軍と違って一日の束縛時間が長いし、やはりボクは警戒を受けている。ヨナは知っての通り、日中の仕事を抜け出す事が出来ない……国家

の保全について話し合っている宰相が外に行つてばかりだから」

最後の一言は、たっぷりの皮肉が込められていた。

調査完了。薔薇園で仕事の話ってどうなんだろう。

翌日、フレアの仕事は廊下掃除から始まった。

「めんどくさいけどね」

と言う、フレアの教育係になったエリザだが、フレアにとっては待っていましたというばかりの仕事である。

しかし、他意があるように見せてはならず自然にきよろきよろしなければならぬ事がなかなか難しい。隠密部隊の資料のお陰で、隠し通路などの探し方は大体判っているが。

『ほんと、何でもやるんだよなあ、隠密部隊って』

思い出しながら、半ば感動する。

最上階、王の寝室や執務室、資料室などがあり、また高位の文官……9割方が貴族出身……の寝室、執務室がある階。部屋数が多いが、造りは割と単純で掃除も余り苦ではない。

「あ、お早う御座います！」

エリザの少し嬉々とした声にフレアが顔を上げると、ヨナの顔が見えた。フレアもエリザに倣う。

「お早う御座います。余り、無理をなさらないように」

微笑んで歩き去っていくヨナ。最後の言葉は、フレアに言ったのだろうと思われる。だが、そんな事エリザには知る由もない。

「いいわよねえ、ヨナ参謀長」

語尾にハートマークが付いていそうな。

「使用人を気遣ってくださる、官僚なんて他にいらっしやらないわ」

「そう、ですね」

そうか、あの人は女性受けが良いのかとフレアはぼんやり考えた。

だが、そういえば初対面時は深くフードを被り、最近長く居合わせた時には辺りは真っ暗……という事で初めて彼の顔をきちんと見た気がする。確かに、なかなかの美青年であった。意外にも、という失礼だろうが。

「へえ、フレアはそんな事してるんだ」

ヨーゼフはヨナから聞かされ、楽しそうに笑った。

「でも、あの子には軍服よりメイド服の方が似合っただろうなあ」

「あれ、ヨーゼフ様？」

シュウがちょっとからかうように見ると、相手は軽く笑った。

「別に、必要以上の興味はないよ」

「ホントですか？」

……王子と側近の会話として、どうなのだろうか。ヨナはそう考えていた。

「それでシュウ殿」

ヨナは本題に入るように促した。

「ええ、エレイズ様とラファイン大將軍の件ですね。

どちらも討伐成功、幹部をこっそり生け捕りにして連れ帰ったそうです。王様にはスケープゴートをお見せして。

また、彼らの帳簿やらなんやらという記録も押収して……これは燃えてしまった事にしたそうですけど……現在、じっくり調べてると」

シュウはロザリアのライト・ラビットから送られてきた情報を簡単に伝えた。

「証拠が上がれば、調査団をウラディスのところへ送る事も出来るのですが」

「そうすれば……連中の動きだしを待つまでも無くなるかもしれないね。国家防衛にご熱心な大將軍が国家の敵に早変わりする」

ヨナとヨーゼフが続けざまに言うが、シュウは首を傾げた。

「そんな簡単に行く気がしないんですよえ。……カンなんですけど。」

ダグラスはかなり抜け目ない性格であると思えますよ。彼が闇魔法組織とウラデイスの繋がりに絡んでいたとしたら、手を打たせているはずですよ」

「確かに考えられますね」

ヨナも同意した。

「現実問題、ウラデイスよりもダグラスの方がずっと厄介な相手だね。彼の弱みを握ればなあ」

ヨーゼフの呟きは、誰もが思うところであつた。しかし、その厄介な相手は地位と名誉という分厚い防壁にきっちりと守られている。並大抵の攻撃は寧ろ、跳ね返される危険さえあるのだ。

「どうしてもやはり、十分に備えて待機……が一番のようですねえ」

シュウは天井を仰いだ。

*

その3日後。フレア、ジェイド、ヨナは再び薔薇園に集合していた。今回、2人を呼び出したのは他でもないフレア。

「見付かりました」

余計な事は差し挟まず、単刀直入に切り出した。

「一週間で片付けば上等と思っていたけど。早くて良かった。流石だね」

ジェイドが褒める。

「じゃあ、折角慣れてきたんだろうけど可愛いアンナは身内の不幸で里帰りだ」

「でもって、二度と戻らない訳ですねえ」

何となく、良くしてくれた先輩達に悪い気がしたが任務なのだと割り切る。

「どこだった？」

「2階の、衣装室の奥でした。確かに、あそこなら敵軍や反乱軍が攻め寄せてきても真っ先に駆けつけたりはしないでしょうね。名目上、衣装室ですが日常は殆ど使われないようでしたし。入れたのは偶然みたいなものでした。」

そこから、今度はこの薔薇園の最奥部に繋がっているんです。ここは裏庭に当たりますから……まず逃げおおせられるでしょうね」

「王族って狡いよねえ」

ジェイドが冗談か本気か解らない調子で言った。

「じゃあ、薔薇園から衣装室、そして国王陛下の寝室……それで地下図書館が最善かな」

「これが、陛下の先一週間分のスケジュールです」

ヨナが見せた紙には、分刻みで詳細に王の政務スケジュールが書き出されていた。

「決行はいつにしましょうか」

ジェイドは少し首を傾げながら、スケジュール表を眺める。

そして、にやりと笑った。

「3日後にパーティが開かれるね」

「はあ。知らないものはしょうがないですけど、こんな状況でパーティですかあ」

フレアは思わず言った。

「この時間帯ならいいかな。ヨーゼフ王子も出席なさる？」

ヨナは頷いた。

「なら、その警護としてシユウにもパーティ会場に入ってもらい王の動きを報告してもらえればより安全だ。貴族や文官だらけのパーティのようだから、目を盗んで魔法を使うのは造作ない事だろ」

ジェイドは自分で頷きながら続けた。

「ボクとフレアで行くよ」

「はい」

「例の召喚は？」

「フレイム・ラビットですね？ 簡易召喚出来るようにしておきました」

フレアはコートの裏側を見せた。そこには、入軍当初にリアが新入り達に見せたのと同じように……とまではいえないが、相当な数の魔法陣が縫いつけられている。その内、最も新しいのがBランクフレイム・ラビット。ウサギ型魔獣の特性を利用して情報をやり取りする為に、フレアは数日前にこの魔法陣を引っ張り出した。フレアが、余りにも可愛いと大はしゃぎしていたのでクーファが少々不機嫌になっていたような……。

「ヨナ参謀長は出席を？」

ジェイドがそちらへ向くと、相手は苦笑した。

「私のような陰鬱な人間が華やかな場に出て行く道理もありますまい」

「なら、あなたには資料の持ち出しを手伝っていただきたい」

「ええ、出来ることであれば」

ジェイドは手筈を説明し始めた。

ウォーレン大將軍からの緊急連絡。

「ウォーレン大將軍……どうなさったんですか？」

ローベルグが、追加資料を渡す為にウォーレンの執務室に入ったところで首を傾げた。いつも、何を見ても飄々としている彼の顔が青い。

「まさか食あた……」

「お前と一緒にすんなっ」

ウォーレンはクシャッと髪を掴む。

「まったくよお、全世界の美女を虜にする“何かに思い悩む美青年の図”が台無しだろうがっ」

「……そんな余計な事考えてるなら、大丈夫ですね」

ローベルグはそう、ちょっと冷たく言うとデスクに資料を置いた。

「それで、何が？」

ウォーレンは、口には出さず先日ラファインの軍が没収して秘密裏に回収した闇組織の記録を突き出した。

「これは、この前のですね……」

少しの間、目を通したローベルグはすぐさまウォーレンの表情の意味を理解した。

「これ、どうするんです!?!」

彼にしては珍しく、大きな声を上げる。

「同じ事をされたら、一巻の終わりとさえ言えますよ!」

「解ってるつ。だから考えてるんだろつが……。あれ程の実力者を無力化した上に、死に追いやった術という事になる。困った事になったぞ……。しかも対抗策が解らん」

「この話、エレイズ大將軍には……」

「絶対、教えるなよ。いや、頼む……。黙っておいてやってくれ」

ローベルグはかなり、驚いてしまった。彼を知らぬ者よりはずっと、ウォーレンという人物は情に厚く、身内や友を大切にする者だと解っている、のだが。それでも、彼の合理主義的物の見方がここまで覆される事は珍しい。

「いいな、ベル?」

「……解りましたよ。ですが、それとなく王城潜入組には伝えるべきですよ。」

もしかしたら、王城地下の秘密の書庫に対抗策が見つけ出せるかもしれないね」

「じゃあ、その連絡はお前がしてくれるか。」

あと、……ウチの内部にもこの事を一切漏らすな。万が一エレイズの耳に入ったら……」

「そうします」

ローベルグは、のほほんとした平生の表情を少し厳しくして自身の仕事部屋に入った。

ウォーレン曰く、戦中より戦前、戦後に役立つ副官であるローベルグの主立った仕事は書類の管理やぼんやりとしたイメージである彼とは結びつきにくい、軍師の仕事である。ローベルグの部屋は一面、兵法の書物や過去の記録書類、それから現在仕分け中の書類で溢れかえって、書庫のような有様なのだ。

ローベルグは便せんを引っ張り出すと、意外な程に綺麗な字で何やら書き連ねると封筒にしまって呪文を唱えた。封印呪文であり、対応する解除呪文を掛けない限り封筒は開かないし、誤った開き方をすれば燃えてなくなる。

この解除呪文はヨナが知っている。

それから今度は、鳥形魔獣を召喚した。役割にぴったりの、小さな鳩のような魔獣。ランク光属性の魔獣で、方向記憶能力に優れている上に光属性らしく移動速度がとんでもなく速い。ローベルグが愛用する情報伝達手段が、以上のものだ。

＊

ローベルグの鳥は、間違える事なくヨナの私室の窓に辿り着いた。幸運にも、部屋の主はそこにいたので鳥にすぐ気が付いた。

『ローベルグ殿か……』

窓を少し開き、鳥を中に入れてやると脚に紐でくくりつけられていた手紙を外す。鳥はその後も飛び立たないところを見ると、返事をもらってくるように言いつけられているのだらう。

ヨナは手早く、封印解除の呪文を唱えると手紙に目を通した。

読み終えたヨナは、ウォーレンに負けずと顔色を悪くする。顔色が悪くなるだけではなく、彼の薄い唇は解りやすい程にわなわなと震えた。そして、

「エレイズ大將軍には決して知らせないでください……」

最後の一文を口にして、無理矢理とっていいような笑みを浮かべる。

「出来る事なら、私にも知らせないで欲しかったな」

呟きながら、了解の返事を手短かに書いて鳥の脚にもう一度紐でくくりつけた。待っていましたとばかりに鳥は窓から高く飛び上がったいく。青い空に白い鳩が浮かぶ明るく、健やかな印象の光景は丁度ヨナの心と正反対であった。

もう一度、思わず文章を読み返してしまう。

『あれは病気では無かったというのか』

だとしたら、彼を闇魔法で死に追いやった者がいて、そして彼を最終的に殺したのは自分達の無知だということになる。

ドアに鍵を掛けて、カーテンを閉めるとヨナは椅子に崩れ落ちた。

誰もが、ヨナの事をいつでも冷静で理的、機械的に物事を処理出来る魔法使いだと思っている。しかし、彼だけは彼が他でもない人間だということを知っている。人間の彼にとって、今回、ウォーレンが光を当てた問題は些か辛すぎた。冷静でなどいられるはずもなく、今も顔を上げる事が出来ない。ところが、この姿を誰にも見せる訳にはいかない。唯一、この感情を共有できる者として浮かび上がるのはエレイズであるが……彼女はこの話を知らない。知らないくていいと、ヨナも思う。彼女を女と莫迦にしているのでは決してない。あくまでも、合理的に考えた結果、今彼女の動きを止めたりその方向性を変えてしまうような出来事が起こらない方がいいと、そう思うのだ。

『神というモノが存在するなら……それは情けやあわれみという言葉葉を知らないのだろう』

ヨナは深呼吸して気を取り直す事を成功させると、立ち上がった。ヨーゼフ達に知らせなければならない。恐らく、フレアとシュウは彼のところにいるだろうから、そのどちらかにジェイドへ知らせてもらえばいい。

語られた、限りなく真実に近いと思われる推測。

「失礼します」

ヨナの予想は、ぴったり正解であった。いつものように、ヨーゼフとフレアとシュウがごく普通の友人同士のように長机を囲んで紅茶を飲みながら歓談に耽っていた。

「ヨナ、どうしたの？」

そう尋ねるヨーゼフの声が、不安というか心配に染まったのを察して、ヨナは表情を取り繕えていなかったらしい自分に苦笑した。

「好ましくない知らせです」

その言葉に、フレアとシュウも背筋を正してヨナの次の句を待つ。

「先程、ウォーレン大將軍の副官、ローベルグ殿から連絡がありました。ラファイン大將軍がお持ち帰りになられた資料の中に、気になる部分があったという事です」

ヨナはつらつらと続ける。一見すれば、ほんの数分前までは精神的に酷いダメージを受けたように俯いていた男と同じ者だとは思えない。しかし、付き合いの長いヨーゼフにはその目がいつもより落ち着きが無い事が判っていた。

「フレア、シュウは当然ながら面識は無いのですが4年前まで大將軍はもう1人いらっしやいました」

「ユエ大將軍ですよ」

シュウが言い、ヨナが頷くとフレアは思わず声を上げた。

「えっ、ユエ!？」

「……?」

全員の視線が一気に集中してしまったので、やむを得ずフレアは先日、メイド長カイヤからその名を聞いたのだという事を説明した。

「ここまで来たら、隠す事ありませんか」

ヨナはちよつと溜息をついた。

フレアが言わなければ、ユエとエレイズの繋がりについては黙っているつもりだったのに。それから、もう一つ黙っているつもりだった事があるが、こちらで話す事にした。

「それだけではなく、ユエは……私の兄なのです」

「……!？」

フレアとシュウは紅茶を嘔き出しそうになったのを我慢し、咳き込んだ。

それはつまり、もう少しでエレイズとヨナは義姉弟になるところだったという訳だ。世界は狭いというか、何というか。

「でも、亡くなっただんですよね……」

フレアが言うと、ヨナは沈痛な面持ちで頷いた。

「今回、発覚したのはその死因です。

我々はずっと彼は精神的な病を患い、自殺をしたものと考えていました。考えていた……というより、事実、そうとしか判断できない状況だったのですよ。

彼は死ぬ2年前から、様子がおかしくなり始めました。私とは正反對に、明るく社交的で……誰からも好かれるような性格の持ち主で、祝宴や舞踏会の折には場の中心となれるような人でした。しかし、ある日を境に突然、人に会うのを拒むようになりました。私やエレイズ大將軍が何とか説き伏せて様子を見に行っても、……どう言えば伝わるのでしょうか。沈みきって……不信に充ち、次の瞬間にも誰かが自分を殺すのではないかと戦々競々とした有様で。兎に角、我々の知る“ユエ”はそこにはいなかった」

「実際に、そういう病はありますよね？」

シウウが言い、ヨナはうつそりと頷く。

「まず、それを疑いました。しかし、具体的な治療法もありませんので。兎に角、医師のアドバイスに従い、私とエレイズ大將軍は手を尽くしました。しかし、良くならぬどころか悪化する一方で……。仕舞いには、具合の悪いときは私やエレイズ大將軍でさえ近付く事を拒み、飲食も拒み……」

話しながら、ヨナの顔はどんどん暗く沈んでいき、感じやすいフレアも真っ青になって自分の腕を抱いていた。ヨーゼフは何か思い出すように遠い目付きで黙っており、シウウは唯一人、冷静に話しの

行き着く先を推理しているようだった。

「その頃から、エレイズ大將軍は10分と離れず付きっきりで看病するようになりました。既に大將軍としての地位を持っていた為、私や彼女の副官達は何とか止めさせようとしたのですが、まるで何かに取り憑かれたように決して何者の言葉にも耳を貸そうとしなかった。ウォーレン大將軍やラファイン大將軍が訪れても、同じ事。我々は、彼女まで壊れてしまうのではないかと不安で絞め殺されそうでした。」

ですから……そんな時、王城で軍事会議が行われる事となって、我々はこれ幸いと半ば無理矢理エレイズ大將軍を引っ張り出しました。これが、いけなかったのでしょうか」

ヨナの声はからからに乾いていた。

「その日、1人になった兄は窓を割り、その破片で自らの首を裂いて死にました」

沈黙が部屋を支配する。

だが、そうしていても仕方がないと考えた。それは、シュウであつた。

「それで？　もしかして、原因は闇魔法か何かだったのでしょうか」
フレアは吃驚したようにシュウを見た。彼女はすっかり世界に入り込んで、今にも泣き出しそうになっていたのだ。

感情を一切感じさせないヨナは、静かに頷いた。

「そういった闇魔法の研究資料が、出て来た訳です。恐らく……いえ、間違いなく彼はその魔法に殺された。実行者はどう考えても、ウラデイスまたはダグラスでしょう」

「同じ事を仕掛けてくる可能性が高いって話だね？」

ヨーゼフが言う。

「はい。」

そこで、フレア」

「あ……はい」

「明日に、ウォーレン大將軍からその魔法の資料が送られてきます。ジエイド殿とそれを確認して王城地下の書庫で関係資料を探して頂きたい」

ぎゅつと唇を引き結んで、フレアは頷いた。

対抗策があつてほしい……いや、なくてはならない。きっと、誰か大切な人がそんな殺されかたをしたなら、自分はその後……恐らくまともに生きていける気がしない。誰にも、そんな思いをさせたくない。

「もう一つ、いいですか」

シュウが口を開く。

「その大会議の招集を提案したのは、誰ですか」

疑問というか、確信を持った問いかけであつた。

ヨナはその質問の意図に気が付いて、はっと息を飲んだ。

「大会議の招集権があるのは、王、軍師、それから……宰相」

「あなたではない？」

「当然です。王でもないでしょう……ダグラスかつ」

思わず、吐き捨てるような物言いをしてヨナは一同を驚かせた。

長年の疑問が解けるかもしれない。だけど……。

「時間を掛けて、反抗勢力となりうる者達の戦力を裂いてきたんだ」

ヨーゼフは呟く。

「ウラデイス達がもうじき、大きな動きを始めるといって……その前にこちら側の3人の大將軍、その有力な部下が危険だね」

フレアは思わず身を乗り出した。

「どうすれば……！」

「そういう可能性がある、という事は誰もが判ってるだろうけど」

シュウも難しい顔で首を傾げる。

「そのユエ大將軍は、実力的な力関係で表すとどの辺りに？」

「彼に腕を並べる力を持った魔法使いはいませんでした。……強いと言うならば、彼も亡くなっていますがアーク殿くらいで」

ヨナの答えにフレアは厳しい表情でそちらを見た。

「これも推測ですけど、父さんの死にもウラデイス側の者が絡んでいるだろうと考えてます」

固い声色で告げた。

「それは？」

「ウォーレン大將軍の考えです」

「成る程……。確かに、考えられますね。
ヨーゼフ様、」

彼が皆まで言う前に、ヨーゼフは言う。

「その調査をしよう。僕に動かせる兵は無いのが不自由だけど……。エレイズ大將軍かウォーレン大將軍に掛け合ってみてくれる？ 諜報部隊を組織してくれないかと。調べて欲しいのは、アーク殿の任務記録。それからロンバルディア城の魔力分析をしてほしい……。あのレベルの魔力ならば10年以上、残滓が残っていてもおかしくない。特に」

少し躊躇うようにフレアを見たが、

「そこが彼の死んだ場所ならば」

と言った。

「何故、ロンバルディア城でアーク殿が亡くなったと？」

事務的な感情と、興味を半分ずつ持ってシュウが質問を投げた。

「うん……。もし僕が誰かを暗殺するならば、呼び出したりなんて間抜けな事はしないだろうなと思ったんだ。その証拠が出たら、真

っ先に疑われるからね。

一番良いのは、“たまたま居合わせた場所”で目的の人物が死亡する事だ。それで、10年前に行われた戦争とも名の付くロンバルディア城の大規模任務を思い出した」

「……その頃、王子様はお幾つですっけ」

シュウが微妙な顔で突っ込むと、彼は微かに笑った。

「シュウだって知ってたんでしょ？ 過去の資料はヒマにまかせて、何度も何度も見てたからね」

「……あっ」

フレアは立ち上がった。

「そういう話しをするなら、クーファ連れて来ます！」

「そうか、彼はアーク殿の契約魔獣でもあったのか！」

ヨーゼフは目を大きくして頷いた。

「ロンバルディア城だと……？」

クーファは首を傾げた。

「何か覚えてない！？」

全員の注目を集めた真っ赤な、小さいドラゴンは腕を組んで考え込んでいたが口を開いた。

「そいつは、俺が召還後数分で帰された戦いだな」

「何ですって！？　だって、とっても大規模な戦いだったんでしょ！？

クーファ、大活躍じゃない！」

「いや、そうとも限らない」

シュウが口を挟んだ。

「ロンバルディア城は、ダークヒル城よりも小さな城だった。国境近くに位置する、一種の防壁的な役割を持った城だったんだけど。その時ロンバルディア城で行われたのは、一種の内乱……国内の問題だったんだ。そこでもしも、クーファが本気を出して暴れたら、ね？」

「隣国にも……文字通り火の粉が飛ぶ？」

フレアの納得した声にシュウは頷いた。

「だから、最初の威嚇程度でクーファは下げられたんだよね？」

クーファは感心したようにシュウを見た。

「アークの説明そのまんまだ！」

「これで、アーク殿の身は更に危険になった訳だ」

ヨーゼフが言った。

「もしも、クーファが召喚されていた状態ならば、誰一人として彼に手出しは出来なかったものの……」

「クーファを召喚した状態でない上に、戦いで消耗していた彼を戦いに紛れて……もしくは戦後、落ち着きと油断が生まれた時間を狙って暗殺が執り行われたということですか」

と、シュウ。ヨナはそれに続けた。

「後者の可能性の方が大きいでしょう。戦中は、誰もが……つまりはアーク殿も気を張りつめさせていますし寝返りや敵の謀りにも気を配っていますから。あの戦いは、アーク殿のいらつしやった国王側が圧倒的な勝利を収めました。また、ウラデイス大將軍も同じ陣営側に」

「1つ確認するけど、それ以降君は召喚された？」

ヨーゼフの問いに対し、クーファは首を横に振る。

「それが最後だ」

「よし、後は確認だけだ。あれ以降、ロンバルディア城は放って置かれている。証拠の品や痕跡が見付かれば儲けものだ。調査をよろしく」

「もし、連中が動く前にそれが証明できればウラデイスを罰する……」

…とまではいかなくとも身柄を拘束する事くらいはできますね」

フレアにヨナはゆっくりと頷いた。

「それに、アーク殿は国王に目を掛けられていたとは言えませんが民衆にはとても人気が高い魔法使いでした。ウラデイスが彼の暗殺の実行犯といかなくとも、それに関わっていた事が国民に伝えられればアーク殿を今も慕う多くの人々は決してウラデイスの思想を支持しないでしょう。国への反逆者にとって、国民の信頼を得られないというのは大義名分を失う事です。もしかしたら、無血のうちに事態を収拾できるかもしれません」

ヨーゼフとシュウが、それを望むように頷く中フレアはそれに一拍遅れた。それに気付いたのは、クーファだけであつたが。

子供にだって、意思はある。(前書き)

シリアスというか、くさい話です(苦笑)。どうも済みません。

子供にだって、意思はある。

「フレア、何考えてる？」

自室に戻ったところ、クーファはじっとフレアの顔を見た。

「えっ、何が？ いや、大変な事になったなあって」

「違うだろうが。無血の解決が、気に入らないか？」

フレアはギクリとしたようにクーファを見た。

それから、苦笑する。

「やな奴だよね、あたし」

膝を抱えて、それに顎を乗せる。その姿勢のまま自嘲的な笑みを浮かべて心中を吐露した。

「父さんを殺した奴らを、あたしは殺してやりたいって思ってるみたい。

今、気付いたんだけどね……」

「フレアよお、」

「昔はそんな事、ちっとも考えなかった。出来るとも思わなかったから。

だけど今は……出来そうだなって考えちゃって。そうすると、止ま

らなくなった。

判ってるんだけど。ウラデイス達との戦いが起こるって事は、国内乱が起こるって事で、それにはあらゆる軍の人達が駆り出されて戦うって。ヨーゼフ王子や、シユウ、ヨナ参謀長があんな風に無血の解決を望む気持ちはよく判るんだよ。あたしだって……。

だけど、正直な気持ちであの時、領けなかった」

泣いてはいない。しかし、彼女の瞳はまるでガラス玉になったかのようにいつもの輝きを失って単調に部屋の風景だけを映す。唇は話す度に震え、黙っている時は真一文字に引き結ばれる。

「なあ、フレアよお」

クーファはぱたぱたと飛んで、フレアの真正面に浮かぶ。

「俺、最近考えるんだけどな。お前は色んなもの背負いすぎ……っていうか、周りがお前に色んなもの背負わせすぎだぜ。俺はよお、時々……本気で今俺といるのがアークのような気がしちまう。それくらい、お前は強くなっただし頼もしいよ」

「……クーファ？」

「けどよ、それを反省もしてんだ。だって、お前はまだまだガキなんだからなあ。

戦った回数だって高が知れてるし、俺がいるから命を掛けるような場面に遭遇した事も未だに無い。それなのに、1人で何でも出来るし、決定できるだなんて嘘だろうよ」

「でも、仕方無いんだよ。だって、どれもあたしの問題で……」

クーファはぎろりとフレアを見て、いきなりバックして勢いをつけると……。

「イタいつ!!」

フレアはのけぞって額を押さえた。

「何がしたいのよお。体当たりなんかしてさあ」

抗議すると、クーファは大儀そうに頷いた。

「俺とお前が初めて会った時も、こうなっただよなあ。ま、あれはアクシデントだった訳だが」

「何が言いたいのよ」

「お前は、その時から1歳だつて年取っちゃいないガキのまんまだったなあと思ひ出したわけだ！ お前の身には確かに、俺を永久召喚するなんてファンタジックな展開に引き続き色んな事が巻き起こった訳だが、どれもこれも……巻き込まれただけだ。お前がやりたくてやった事は数えるほどもねえ。」

だから、やっと選ぶ段階に……いや、場面にきたんだから堂々と選べ！ ガキの選択でかまわねえよ。誰が呆れようと、反対しようとかの俺様、クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンが最後までお前

の味方でいてやらあ！

それに、俺は思っぜ。幾らアークが細工してようと、お前に何の力もなけりや俺を召喚なんて出来なかつたし、出来たとしても途中で色んな事を投げ出してたつてよ。

お前なら、どんなファンタジックでも起こせるぜ」

フレアは驚いた顔をしていたが、笑って俯いた。

「あんた……ファンタジックの意味判ってる？」

顔を上げたフレアは、クーファと目が合うと声に出して笑い始めた。

「なにをお??」

「あー、おつかしい！これ、前にもやったよねえ」

「プッ……確かに。」

つまり、お前の突っ込みのセンスは向上してねえってこつたな！」

「何よお、あんたのボケだって向上してないじゃない！別の言葉にしなさいよね」

「おうっ！？お前なあ、俺だってファンタジックの意味くらい……まあ、ええと」

「判らないんじゃない」

「あゝ」

フレアは一頻りわらうと、頷いた。

「でもありがとね、じゃあ、選ぶよ」

「おう！」

「戦う、戦わないはまだ決められないけど……。だけど、あたしウラデイスと話さないといけないと思う。聞きたい。本当に父さんを殺したのか、それはどうしてなのか……。あと、この国をどうしたいのか」

クーファはちよつと笑った。

「国は次いでかよ」

「わ、悪かったわね！　しょーがないでしょ、あたしは子供なんだから」

ふんつと鼻を鳴らす。

「おうおう、別に悪かねえぜ。子供に正直さは大切だな！」

「何か莫迦にされてる！」

クーファは遠慮無く大笑いし、フレアもつられた。

偏屈な王子様と常識者の軍師殿。一方、計画スタート。

「ヨーゼフ」

「はい、父上」

常日頃、フレアやシュウに気兼ねなく悪口を言っているとはおくびにも出さず、ヨーゼフは父王の前で膝を着く。

「今日の午後開催するパーティーの目的の1つは、お前の婚約者を見付ける事でもある。あまり、いつものような無礼な行動はとるな」

「……気を付けましょう」

交わされた言葉はそれだけで、互いに何の未練もない様子でヨーゼフは踵を返しヨナを伴って退室した。

この父子に、家族の情は存在しない。今は亡き王妃とは文字通りの政略結婚、それ以外のなにものでもなかった為、その子に愛情は向けられにくかった。王妃が王と上手くいかないからと息子を代わりのように愛し、息子と過ごす時間の半分も夫と過ごさなかったという事も例え愛した妻がそうしていたのでなくとも、王の矜持を傷つけ、夫婦の溝を広げるには充分だった。

母にだけは愛されたヨーゼフであつたが、まだ7歳の時分にそれも終わる。産後から何かと体調を崩しがちであつた彼女は当時、王都に渦巻いていた流行病に命を奪われた。だから、ヨーゼフは親子の絆というものがよく判らない。母が自分に抱いていた愛情は、い

きすぎた庇護愛であつたと思う。また、自分を愛さなかつた王への復讐心から強引に息子への愛情をひけらかしていたとさえ、昔を振り返つた時にヨーゼフは考える。

幸いにも、――これは父親の望むところではなく更に父子の溝が深まる要因になつたのだが――友人には恵まれ、寂しくつまらない子供時代を過ごしたのではない。だから、憐れまれる筋合いはないと本人は断言する。

だが、彼が真つ直ぐ育つたかというところ……。彼の意識しないところで、彼はしっかりと屈折していた。庇護を何より嫌うようになり、自分に媚びへつらうような者も徹底的に見下すようになった。それをしてないのが世間一般で無礼、と呼ばれるとしても自己を飾り、隠す者がヨーゼフは嫌いである。

そんな彼が、ヨナと共に退室した時に口にした言葉はヨーゼフのそんな気性を誰よりも理解する彼にとっては予想済みの言葉だった。

「パーティに集まる連中なんて、能無し貴族の能無し娘ばかりに決まつてる。喋つても面白くないだろうし、顔だつて化粧を剥がしたらどうなつてることか！」

「……ヨーゼフ様」

予想済み……と思つたが、少し予想以上に機嫌が悪い。

「自分の失敗を繰り返す気なのかなあ」

「……いえ、恐らくその失敗を起こさない為にヨーゼフ様の目でお相手を選ぶようにとパーティを開かれるのでは？」

「貴族娘なんて、見るまでもない。宝石とドレスが貰えれば、何でもいいんだから」

「……そう仰らずにどうか」

「ヨナは僕がそんなつまらない相手と結婚すれば良いと思うの？」

「そうではなく。」

言葉を交わせば、面白いと思う方もいらつしやるかもしれません。頭から毛嫌いする事はせず、義務的にでも構いませんから積極的な風を装ってくださいませ」

すると、ヨーゼフは笑った。

「判ってるじゃないか」

「……？」

「装うしかないって事をさ。それより、僕はパーティの裏で進む事が楽しみで、パーティなんかに構ってる気持ちの余裕が無さそうだよ」

ヨナは呆れたと同時に、安心した。

この調子で、自分もパーティを抜け出してフレア、ジェイドと王城地下書庫に侵入すると言い出しそうでハラハラしていたのだ。実は、

ヨーゼフはヨナに（無理矢理頼み込んで）教わって、魔法がかなり使える。兵達のように戦えるレベルではないが、ある程度ならば自分の身は自分で守れる。だからヨナも、いざというときの武器になるならしょうがないと思い教えたのだが……最近後悔気味である。

「僕も何かしら手伝える気がするんだけどな」

「おやめ下さい。ヨーゼフ様に万が一の事が起こりましたら、彼らの努力が水泡に帰します」

という主旨の会話を、こここのところひっきりなしに繰り返している。

「フレア、用意はいいかい？」

「はい」

フレアの肩にはクーパー、そして足下には赤茶色の毛並みであるフレーム・ラビットがいる。何かあれば、シュウのアイス・ラビットからこのウサギに情報が送られてくる。先程、早速、王がパーティー会場に到着したとの知らせが来たので一同は薔薇園の隠し通路から二階衣装室まで行き、そこから王の寝室への隠しドア付近まで行って待機していたのだが、そのドアへ近付いた。

「鍵は？」

「閉まっています」

フレアが少し顔をしかめると、ジェイドはふと笑う。

「この前、強制解錠の呪文を教えたね？」

「やります……」

何となく、悪党っぽくて使わなくて良いなら使いたくない魔法だったのだが……。仕方ないので、ジェイドに従って鍵の部分をピンと指さす。

「アンロック」

声と同時に、ガチャリ……と音がする。フレアが何でも無さそうにドアを引くと、何の抵抗も無しにドアは開く。当然のように、2人は魔力探知で何らかの結界が張られていないか確認済みである。

中は、随分と豪華な部屋だった。王のプライベート空間など当然見たこともないから、少し驚きである。王族の部屋として、初めて見たのがヨーゼフの部屋だったのがそもその原因か。彼の部屋は、高級感漂うものの、基本的にシンプルな部屋なのだ。しかし……。

「うーん、どうでもいいけど悪趣味だ」

ジェイドが半笑いで、地下への入り口を探りながら呟いているが、その通りだとフレアも思った。

金を基調とした家具の数々、天蓋付きベッドも無駄に豪華。ふかふかとしたカーペットはきつと、毛皮だろう。

「おい、これじゃねえか！」

フレア、ジェイドに協力して部屋の中を探っていたクーファが少し控えめな声量で2人を呼んだ。

「うん、そうみたいだ」

「お手柄じゃない！　クーファ」

「へへっ、どうよ、褒める褒める！」

しかし、フレアとジェイドはクーファを褒める間も惜しんでカーペットをどかし始める。

「クーファちょっと、あっち行ってて」

「お……おっ」

完全犯罪！？ 良心が……とか言ってる場合じゃないね。

「出て来たね」

「しかし、このまま行って大丈夫か？ 誰か見に来たり……」

「大丈夫よ」

クーファの懸念に対し、フレアは断言した。

「何かあれば、この子通してシュウが教えてくれるし、部屋には復元魔法を掛けるから」

「お前……たくましくなったなあ」

*

「じゃ、ヨーゼフ様。俺はあっちでばーっとしてまーす」

シュウは、貴族の戯れなどに付き合っていてられるか、とも言つようにさつさと壁際でじっとしている警備兵に混ざって行った。

ヨーゼフは少し名残惜しそうだったが、彼が本気で嫌そうだったので強引に引き留めるのは止めた。

『あゝああ、シュウは行っちゃうしヨナもないし……。早く終わらないかなあ』

そんなヨーゼフの溜息には構わず、既に何人かの公爵だか伯爵だか何だかの令嬢がとびつきりの色目を向けてきている。適当に笑って受け流して、敢えて政治家達に難しい話をふっかけていく。こうすれば、大抵の令嬢様方は寄ってこないのだ。

今回も、つまらないだけの会合だなと思いながら適当に知恵者振りを発揮していると……意外な事に面白そうな展開となった。

「あら？ シュウじゃありませんこと？」

ヨーゼフはその高い声に思わず振り返った。シュウに声を掛けたのはそう……確か、エルミール伯爵の長女、カナリエ・ミラ・エルミール。

「はい、確かに僕はシュウという名ですが。カナリエ様とはお初にお目に掛かります」

「まあ！ 冗談はよしてちょうだい！」

どんどん人が注目していく。エルミール家はかなりの財力を持つ貴族社会では有名な家。その令嬢カナリエは、人に命令する事に慣

れた高慢さが可愛くないとヨーゼフは思うのだがそれ以外は評判が
とてもいい。……要するに、かなり美人だ。長い黒髪は見事なま
でに巻かれていて、かなりのボリウム感。きつそうだが、目はぱ
ちりと大きく、唇はふっくらとして愛らしい。

「名前も顔も同じ、別人がいてたまるものですか！ まさかわたく
しをお忘れになったのではないでしょう！？ 余り面白い冗談では
なくってよ、シュウ！」

叩きつけるように、言葉を浴びせかけるカナリエにシュウは苦笑を
浮かべていた、完全に、困ったように周囲をキョロキョロ見回して
いるが……助けが入るはずもなく。それどころか、周囲はざわめく。

「シュウ……？ まさか、行方不明のトールラス公爵のご令息？」

「まさか、でも年齢もおかしくない」

「というか私は見たことがある……間違いない、本人だ！」

「シュウ・ローレンス・トールラスというと……カナリエ殿の婚約者
ではなかったか？」

「それが嫌で逃亡したという噂を聞いたぞ」

「しかしそれなら、何故こんなところで兵に混じっている??」

これらの会話は、ごく小さな声で交わされたものだったからカナリ

工には全く聞こえなかった。しかし、仮にも情報収集が仕事である
シュウにはしっかり一語一語聞こえていた。

シュウは内心で舌打ちする。

これでは、何もかも台無しである。

『だから、この役目は嫌だったんだ……』

*

王の寝室から一同が、地下へと続く階段に足を踏み出したところで
フレアは早速、復元呪文を唱えた。これは、限られた空間内の物
品……生き物以外をもとあった場所に戻す魔法。だいたい、覚えて
ての魔法使いで5分前、慣れた者が使くと1時間程度前の状態まで
戻すことが出来る。フレアはしっかりと時計で確認し、自分達が部
屋に入った時間から逆算して25分前に戻した。30分以内で済ん
で良かったと、こっそり安心していたり。

「このまま、まっすぐ地下に続いているんですよ……？」

フレアが言うと、先頭を歩くジェイドが頷いた。

「何も無いといいけどね」

「それって……？」

「まあ、兎に角、警戒用の魔力網は常に張っておいて。ボクもそうするけど」

「はい」

魔力網というのは、フレアも隠密の仕事を学んで始めて知った魔力の使い方。攻撃用魔法のように、具現化させる事なく魔力を薄く広く自分の周囲に広げて未知の魔力が存在しないか確認する手段だ。今は、ジェイドとクーファ、それからフレア・ラビットの魔力しか感じられないので危険は無いと考えられる。

その頃、ヨナは魔力で強制的に気配と足音を消してヨーゼフの部屋に近付いた。衛兵が2人構えているが低音で囁くように唱えた催眠魔法で眠らせる。そして、ヨーゼフから渡された合鍵を使って易々と中へ。再び、内側から鍵を掛けると魔力の流出を防止する結果に物音を遮断する結果を重ねて作業に取りかかる。

ヨナにジェイドが頼んだ役割というのは、空間移動用の魔法陣をヨーゼフの部屋に用意する事だった。空間移動の魔法は、相当に難易度が高く、しかも動物は召喚獣を含め移動させる事が出来ない。静物を移動させる場合も、自由に転送場所を選択する事は出来ず、対応する魔法陣から魔法陣へと転送するしかない。今回はだから、地下でフレア達が転送魔法陣を描き必要な魔法書を、ヨーゼフの部屋にヨナが描いた魔法陣へ送り込むという形をとる。

何故、パーティが始まった後にひっそりとヨナは不法侵入のような真似をして魔法陣を描かなければならなかったかという、その魔法陣は相当な大きさになり目立つからだ。パーティの前となると日頃は放って置かれるヨーゼフの元にも使用人達が訪れて着替えや日程の確認をするため人の出入りが多くなる。また、出席する貴族が事前挨拶に訪問する事もあるため隠し通すより、今から描いた方が楽なのである。

『十分に警戒はしたが……。もしも、誰かが見ていたら免官は確実だな』

ヨナは作業を続けながら、そっと苦笑するのだった。

公爵家長男の憂鬱。

「わたくし、ずっと捜してましたのよ！ シュウー！」

感極まったように抱きつくカナリエ。シュウはあからさまにぐったりとしていた。

「どうしてこんな事に？ 何か、事情があつたのなら何故わたくしに話してくださらなかったの！ わたしたち、婚約者同士でしょう、一心同体じゃないの！」

叫び続けるカナリエから、シュウは何とか逃れる。

「カナリエ、俺は自ら望んで家を出たんだ。貴族生活なんて、真っ平ごめんだってね！」

一旦、声を上げると何が何だか解らなくなってきた。

「いいかい？ 君達はそうやって、女はドレスの裾を持って男はその手を引くのを仕事のようにして生きていて楽しいのかもしれない。宝石やら金貨やら、を溢れんばかりに手に入れて、使用人達に世話を焼かれる毎日を理想とするのかもしれない。でも俺は違う！俺が欲しいのは自由だ。金品も使用人も家柄も、婚約者も決まった将来も安定もいらない！俺は、自分で自分の生き方を決めて生きていくと決めたんだ。」

ここでこうして、君と再会してしまったのは想定外の不運だったけど。だけど、もう関わらないで欲しい。君ならどうせ引く手数多だろうしね、何も俺なんかに固執する必要はないじゃないか。公爵家

は、この国にトールラスしか無いわけじゃない。君に相応しい結婚相手ならまだまだ他にいる。

さあ、判ったかい？ もうあっちへ行つて、俺の事などすっかり忘れて相応しい相手を探しにいきなさい。ほら！」

シュウは、感情を爆発させてから失敗に気が付いた。しかしもう遅い。周囲の、好奇の視線はより一層強まって、という訳かカナリエは涙ぐんでいる。

「酷いわ、シュウ！ わたくしは、わたくしはこんなにあなたの事を……」

「……は？」

「あなたはわたくしが好きなのは、あなたの身分だけだと思っているのねっ！」

どう違うんだと、叫び返しかけてシュウは固まった。

『……俺とした事が』

どうやら、カナリエの性格というか気持ちに完全に理解出来ていなかったらしい。常識で考えていた。公爵家に嫁ぐ事で、将来の安定と強い後ろ盾を手に入れるいわば政略結婚を強いられて嫌々ながらその義務に従っているのはお互い様だと思っていた。……まあ、シュウはその義務から逃亡したわけだが。ところが、どうも違うらしい。

「なら、言います。わたくしは本来、カーローン公爵家との縁戚関係を結ぶ為に、アルバート様のところへ嫁ぐはずだったのですわ。」

ですが、わたくし、あなたを初めて見た時……なんて綺麗な人なのかしらと思つて、父様に無理矢理お願いしたのですわ、あなたとの婚約を！」

「なっ……」

「わたくしは、ずっと、シュウを愛しているのですわっ」

シュウは、もう、崩れ落ちそうだった。

当然、感動の為ではない。

「何て……」

大きな溜息をつく。

「何て……」

キツと、……感情のコントロールを再び失って相手を見た。

「何て迷惑な話だッ!!」

周囲が一気にざわつく。

全員が、……恐らく、シュウの表情をつぶさに観察していた友人ヨ―ゼフ以外は……ここで若き2人のフォール・イン・ラブシーンを見られると期待していたのだ。ところが、待っていたのはカタルシス（破局）。

「な……そんな」

シユウは心の底から、「やっちまった」と後悔した。作戦上、常はこの会場にて王やダグラスを見張っていなければならないのに、自ら居心地を最悪にしまった。薄ら笑いを浮かべて流していれば良かったのだと今更気付く。だが、もう遅い。

「どうしてそんな酷い事が言えるのっ、シユウ!」

カナリエを憐れみ、シユウを批判する声が溢れ出したところで助けが入る。

「それならば」

高らかに声を響かせた、シユウの救世主? ヨーゼフ。

「貴女のお相手に、僕が立候補しても構わないようですね。いかがです、カナリエ嬢? 一曲、踊ってくださいませんか」

客達の関心は、ものの一秒で切り替わった。もはや、シユウは蚊帳の外の人間となり視線は一気に見目麗しいヨーゼフ王子に注がれた。

「えっ、そんな、わたくし……」

いきなりの事で、混乱に陥ったカナリエを半ば強引に連れて行くヨーゼフはシユウに軽くウインクを投げるのを忘れない。シユウは心からのありがとうを声に出さず、口を動かして伝えると会場の反対側に逃げたのだった。

*

ヨナは魔法陣の準備を終えると、次の仕事に向かう。先程、眠らせた兵はまだ目覚めていないので楽々と部屋を出て鍵をきっちり閉める。それから兵を起こした。

「あなた達」

「は……」

「ヨ、ヨナ殿……こ、これはそのう」

我知らず（当然だが）の内に眠っていた事に気付いた2人は大慌てで、慈悲を請うようにヨナを見る。ヨナは静かに微笑んだ。

「お疲れのようですね」

喋りながら、素早く片手で印を結び始める。

「まあ退屈でしょうし、眠ってしまう気持ちも判ります」

「ま、まことに申し訳ありません!!」

2人は自分達の失態を許される事に夢中で、長いローブの袖下で動くヨナの左手などには気付かない。

「何事も無かったのですから、咎めはしませんよ。結界もきちんと張られたままですしね」

「け、結界……?」

魔法使いでない衛兵であった為、馴染みのない言葉だったらしい。

「国王陛下、ヨーゼフ殿下のお部屋には我々魔法使いが侵入者感知の為の結界を張っています。まあ、侵入を物理的に防ぐ効果は持ちませんので、あなた達が必要な訳ですが。それでも結界に異常が起きたかどうかはこの場にいかとも判るのですよ」

「はあ……」

「では、これで」

ヨナが立ち去りかけたところで、一人が呼び止める。

「そういえば、ヨナ殿は何故こちらに……」

ヨナは振り返らず、小さな笑みを浮かべ、左手をぎゅっと握った。それと同時に、一瞬だけ衛兵2人の意識が遠のいたようになる。再び、正気に戻った時、その顔には疑念の1つも無かった。ヨナは確認する事もなく、とつくに角を曲がって姿を隠している。

「あれ？」

「おかしいな、何で前に出たんだ、俺達は？」

2人の衛兵は、互いに近く並んでいつもより一歩前に出ていた事に首を傾げつつ通常的位置に戻った。

『ふう、彼らが魔法使いでなくて助かった。術に掛かりやすいことだ』

悪人のような言葉を心の内で呟きながら、ヨナは足早に薔薇園へ向

か
っ
た。
。

図書館で資料集め……なんて生やさしいものじゃない！

「この中から探すんですか……」

フレアはぼーんと目の前に広がる光景を見つめた。地下書庫……というか、これは立派な図書館である。しかも、とびきり大きな。

天井まで届く本棚が、先が見えない程遠くまでびっしり並んでいる。その棚の中は当然ながら隙間なく本で埋め尽くされている。まだ装丁に傷1つ付いていないものから、色褪せたものまで。

「まあ、国内で出版された全ての書物が保管されているんだから当然だね」

ジェイドが何食わぬ顔で言う。

「でも、見るのは半分以下でいい。闇魔法が禁術とされておらず、普通に闇魔法の載った魔法書が出版されていたのは随分と昔の事だから。現代語のものは無視していいよ」

「古書の中から探せばいいんですね」

「そう。じゃあ、手分けして資料集めだ」

フレア、ジェイド、そしてクーファは3手に分かれた。

入り口近くはどうやら、比較的新しい本で埋められているらしくフレアはさっさと通り過ぎていく。

『古語、古語……』

上下左右をじっと見ながらなので、かなり時間が掛かるがだいたい5分ほどで最初の通路を半分ほど進んだ。そこから、少しずつ古びた本が目につくようになってくる。

だが、どれも一般的な魔法書ばかりで中にはフレアも見ることがあるような、ありふれたものもある。分類などはないのかと今更、改めて眺めてみるも、どうやら単純に手に入った順番に並べられているらしい。規則性は見当たらない。魔法書があったと思えば隣に兵法書があり、政治学の書があり物語があり……。

『司書を雇うようにヨーゼフ様に言おうかな！ 全く』

絶対に、綺麗に分類別に並べ直すべきだと思った。

そして、30分は経っただろうか。全員が入り口に集まった。フレアとジェイドは本を何冊か抱えており、クーファはそれらしいものがあつた場所に2人を案内した。本を何冊も運ぶのは、彼の腕力では無理だから。

「割と集まったね」

ジェイドが感想を漏らす。

「ええと、7冊ですか。え、これで集まったほう？」

「うん。闇属性魔法というのは、正式な書物に残されたり、書物にされていても大衆に出版されていない場合も多いからね。ここにあるのは、あくまでも一般販売された本だけだから」

「成る程……」

「だが、情報量つつと結構なもんだろ？ 分厚いのも多いぜ」

クーファが、自分の持って来れなかった10センチは厚みのある本を示す。

「じゃあ、転移を行おうか。ヨナ殿のことだから、準備はもう完全だろう」

ジェイドはそう言って、あらかじめ用意していた魔法陣を広げた。そこに本を全て乗せる。それから呪文を唱え、それが終わると本はすっと消えて行った。

「うん、転送完了。あとは無事に出るだけだ」

ジェイドに、フレアは頷いた。

「一応、シュウに連絡しましょうか」

「そうだね、状況確認もかねて」

「はい」

フレアはフレイム・ラビットに今の状況と、返事が欲しい事を聞かせた。フレイム・ラビットが一瞬、強い光を放った。情報を送ったのだ。

*

「今、集めた資料を転送完了したところです。そっちの状況はどうですか？ 戻っても大丈夫？」

フレアの声が、アイス・ラビットから聞こえた。

シュウはラビットが通信があつた事を示すと、慌てたように見えぬよう努力してこっそりベランダに出たのだった。

「大丈夫。まだまだ、莫迦騒ぎは続きそうだよ。何かあつたら、また知らせる。ヨナ殿からは、全て滞りなくって伝言がきてる」

シュウは、アイス・ラビットにそう吹き込んだ。

それから、一息ついて外を見やる。

『今日はとんだ災難だった……』

まさか、あの娘に会うとは。家出のきっかけの1つなのに。

ちらりと中へ目をやると、カナリエはヨーゼフと一曲踊り終えて、別の貴族男性に誘われている。シュウは酷い男という設定になった

が、喜んだ者達も多いようだ。家柄も悪くないし、容姿もかなり良い。王子は単に、可哀想な姫君に恥をかかせぬよう紳士的にエスコートしたのだなと誰もが理解していたから、自分にチャンスがあるかもと考える男連中が次々に現れているようだ。

そして、気品高く振る舞う同じ年とは思えない元婚約者を見つつ自分はやっぱり、ちょっと物を知らないくらいの……驚いた可愛い表情が似合う、多少安っぽい印象の女の子がいいなと考えるのだった。

*

シュウがのんびり、考え事をしている間、ヨナは静かに自室に戻るところだった。彼は、相当に疲れていた。元より、魔法の知識はとてつもなく多いが魔力のキャパが瘦せぎすの見た目に違わず、同じくらいの知識を持つ大抵の魔法使いより少ない。転移魔法陣をセツトし、警備員達を幻術で嵌め、他にもすれ違う度に同じように自分の姿を記憶から抜き取って薔薇園ではフレア達が出て来たところで警備員と鉢合わせないように結界を……相当強力なものを張った。魔法使いでない者は勿論、ヨナよりも実力が低い……つまり、大抵の魔法使いも今夜は正気を保ったまま薔薇園に入る事は出来ない。入ったとしても、気分が悪くなって一歩や二歩で踵を返し、中で見たものの記憶など残らない。そういう結界魔法。ヨナは、あらゆる魔法の中で結界魔法を一番得意としている。

自室に戻ると、ふと鏡を見て苦笑する。疲れている事もあるが、何と暗い印象の顔立ちだろうと。

コンプレックスというほどではないが、まさに光のような兄に相対して影、闇のような自分が嫌だと特に子供の頃はよく思っていた。しかも、魔法使いだから闇という言葉が普通の人間よりもずっと嫌悪する。

光は最高属性。光の魔法使いという2つ名は、全ての魔法使いが憧れるところだ。しかし、闇の魔法使いは残忍な、悪の魔法使いと同義だ。

影のようと言われる度に、闇の魔法に手を染めている疑いを掛けられているような気がしてきたものだ。だが、今、闇の魔法を打ち砕くために奔走していると思うと酷く満足だった。闇のようなヨナにとつて、闇と戦い、それを打ち砕く事は積年の望みだ。それが叶えば、自分も変われるような気がする。

*

翌日。ヨーゼフの元に、フレア、シュウ、ジェイド、そしてヨナが集まった。

「先に目を通してもらっただけ」

ヨーゼフが、丁寧に長机に積まれている本を示した。

「幾つかは、古代語で書かれているし……この国の古代語とはまた違う言語が使われているものさえある」

一同は目を驚かせた。

「この国で出版された本なの？」

フレアがその驚きを声にすると、ヨナは少し考えてから

「どの本でしょう？　もしかすると、他国の古代語ではなく、暗号文かもしれません」

と。彼は、職業上、あらゆる国の書物を読みあさっているため大抵の言語には通じている。それを知っているヨーゼフは頷いて、300ページ前後の一冊を手にとって渡した。

しばらくページを繰っていたヨナは、「やはり」と呟く。

「このような文字列は見たことはありません。ジェイド殿、どうでしょう」

受け取ったジェイドはしばらく眺めていたがやがて

「うちの隊長ならば、どこにでも出来るでしょう。彼に届ける手段はありますか」

と言った。

「それはお任せください」

ヨナはすぐ答えた。

「じゃあ、ヨナはすぐに取りかかって」

「はい」

この王子……自助精神が強すぎるくらいがある。

「それと、もう一つ」

ヨーゼフは今度は3冊の本を手にした。

「これらは、隣国ガルベラの古語で記されてる。誰か、詳しい人に心当たりはない？」

すると、ジエイドがくすりと笑った。

3人が不思議そうに見ると

「いや、失礼」

驚く事を言った。

「ガルベラはボクの生まれ故郷。古語も学びましたから。そちらの翻訳はボクがしましょう」

「えっ、外国の生まれだったんですか!？」

フレアは、それはもう驚いていた。

「凄いですね。一切の訛りも、違和感も無い」

「シユウも気付いてなかったんだ」

「うん。ロザリア隊長も知らないんじゃない？」

「そうだね。セバスチャン隊長とエレイズ様くらいだろう、この事を知っていたのは」

ヨーゼフはにっこり笑った。

「嬉しい誤算っていうヤツだ。頼んだよ、ジェイド」

「仰せのままに」

下手をすると、慇懃無礼に見える態度で一礼したジェイドだった。

ジェイドはすぐに翻訳作業に取りかかるからと、部屋を出て行った。

「残りは、2人に頼むね。僕は残念ながら、読んだくらいじゃ使えるようにならないから。」

イロハは学んだはずんだけど、才能が無いのかな？」

少々、つまらなさそうに言うヨーゼフにシュウは苦笑を向けた。

「それでいいですよ。王族が戦わなければならないような状況が来たら、その国は終わりです」

「来る気がするけどね」

ヨーゼフは、少し、憂いを帯びた表情で言った。

「ヨナが言うには、最悪、父上を囚にして僕を逃がすというけど。だけど、父上がころつと騙されやすい愚鈍な人というのは特にダグラスなんかには知れているから。真つ先に連中が始末しようとするのは、僕だと思ふんだ。僕とヨナがいなくなれば、多分、例え父上が存命でもこの国は彼らの手に落ちる」

端から聞けば、自信過剰にも思える台詞だが、2人をよく知るフレアとシュウは正にその通りなのだろうと思ふのだった。

「だからさ」

ヨーゼフはにつこりした。

「お願いがあるんだけど」

「……はい？」

フレアとシュウは、同時に嫌な予感を覚えた。

「こつそり、僕に魔法を教えてください？ 最低限、身を守る程度でいいんだ。逃げるにしても、丸腰よりは何かあったほうがいいでしょ」

「ですが、そんな簡単に王子に魔法を教えていいんですか？ ばれたら相当に面倒な事になりますよ」

シュウが言うのに、フレアが何度も頷く。だが、ヨーゼフは平然と

している。

「ヨナに頼んで、結界を張ってもらうよ。彼の結界魔法はなかなか凄いよ。多分、殆どの魔法使いの感覚を誤魔化せるんじゃない？ ばれなきゃ、大丈夫」

シユウとフレアは顔を見合わせた。

「解りました」

と答えるしかない。

そして、翌日からフレアとシユウによる魔法レッスンが始まった。それは、朝一番、仕事を始める前にヨナがヨーゼフの部屋に魔力探知防止の結界を張るところから始まる。そして、何食わぬ顔でいつも通り王子の歓談相手であるフレアとシユウが入室。……至急、ダークヒル城から取り寄せた魔法書を持って。

ある程度の基礎をヨナから学んでいるヨーゼフだから、初歩から始めるのではなく中級魔法書を使う。これを完全にマスターしてしまえば、大抵の魔法攻撃から身を守るバリアを張る魔法、身を隠す結界など、暗殺者……もっと荒々しい反乱の徒から身を^{すべ}守る術を得る事が出来る。勿論、フレア達が全力を賭して彼を守る訳だが何があるか解らないという意見でヨナも納得し、賛成と協力を約束してくれたのだ。

「中々、難しいね」

ヨーゼフは少し疲れたようだった。

今日は、一番覚えるべきバリア魔法から始めている。シュウが丁寧なアドバイスをし、フレアが実戦を手伝うかたち。昔なら出来なかったが、フレアもきちんと魔法攻撃の出力を調節できるようになっているので中級の未完成のバリアでも食い止められる強度の魔法攻撃が出来るというわけだ。

「でも、お世辞じゃなく良い方ですよ。出来ない人は、初級のヒヨロヒヨロ魔法でも止められませんから」

シュウが言う。

「繰り返し、練習すればすぐ実戦で使えるようになります。フレアの魔力はなかなか、底無しですから幾らでもやろうと思えば出来ますよ」

何度も、微妙な難しい調節を行いながら魔法を使っているフレアをシュウは見た。

「そうかなあ？」

当人は首を傾げる。クーファの力を見て、間接的に褒め称えられることはあっても、自身が褒められる機会はなかなか無かったから少々、驚きもあつた。

「炎が得意なんだね」

と、ヨーゼフ。

「他の属性も出来るの？」

「あ、はい。でも、炎が一番しっくりくるんですよ。一番最初に使った属性だからって事もあるんでしょうけど」

「へえ。シュウは？」

「僕は、光属性が一番得意ですかね」

流石にヨーゼフも驚いた。

「それ、軽く言う事じゃないでしょ。光属性の魔法が使えない、上位魔法使いだっているって聞いた事があるよ？」

「そうだったんですか！」

フレアも大層驚いた。

「シュウ、軍に入りたての時から出来たよね！？」

「まあ、得意分野は人それぞれってところだよ。事実、俺、一般魔法はSランク程度まで使えるけど召喚はBが精一杯なんだ」

それにしても……というのが、フレアとヨーゼフ共通の感想。

「今でも凄い軍だけど、将来のエレイズ軍はとんでもない事になりそうだな」

しみじみと言ったヨーゼフである。

それから一週間、何事もなく過ぎた。少なくとも、フレア、シュウ、ヨーゼフには変わった事は起きていないし、耳に入っていない。特筆する事というと、王子様の魔法センスが相当に高く、もう当初の予定は半分以上こなしってしまった事か。

「でも、攻撃用魔法が上手くないよねえ、僕は」

フレアとシュウが口々に褒めると、ヨーゼフは言った。ちなみに、シュウはとにかくフレアに王子に対する遠慮だとか気に入られようという下心だとかなどはありはしないから褒め言葉の全ては本心である。

「まあ、防御用を覚えていただくのが僕等の目的なんですけどね」
シュウが言っても、不満そうである。

「……そうだ」

何か、とても良いことを思いついたと言いたげな明るい表情でヨーゼフは2人を見た。

「魔法が出来ないなら、剣で補うというのはどうだろう?」

「……は?」

「割と上手いんだよ。最近はやってないけど、昔から剣はかじって」

「はあ」

フレアとシュウは困ったように顔を見合わせる。

この王子、自助精神が強すぎるくらいがある。

「まあ確かに、剣で魔法に対抗する戦士もいますけどねえ」

シュウが言う。

「そうなの？」

フレアにしては、初耳であった。

「この国は魔法中心だからね。大將軍の擁する各軍も、国王に仕える王国軍も。」

「ただ、他国には剣中心の軍だってあるし、そういう国が魔法中心の軍に敵わないかというところという訳でもない。アルファレーゼ公国とかは、魔法を諜報くらいにしか使用せずに戦場は剣や槍を持った騎兵隊が取り仕切っているけど軍事力はかなり強いといえるよ」

「……相変わらず、シュウって博識だよな」

「ま、情報部だしね」

軽く笑ってみせるところが少し憎らしいが、心底感心しているフレ

アは気にならない。

「ウチの軍だと、セフィーロ副官かな。」

彼は、この国では本当に珍しい魔法より剣術に長けた高位の軍人だよ」

それをヨーゼフが聞き逃すはずもない。

「セフィーロ副官に教授してもらえないかな？」

「……は？」

2人は、先程とそっくり同じ反応をしてしまった。

「いやいや、しかしですね……」

「そうそう、それはちょっと……」

「ダメかな？」

「何で、いつもは老練の軍師みたいなのに仔犬のような顔をするんですか！」

フレアは思わず突っ込んだ。

表情が変幻自在過ぎる。王子のくせに世渡り上手だ。

「ダメもとで話してみてよ」

「……承知しました。俺が簡単に連絡取れるのを解ってて言うんで

「すから、お人が悪い」

「あははっ」

楽しそうなヨゼフと、呆れている側近2人であった。

王子様が仏頂面の剣士に弟子入り……！？

「どう？ セフィーロ」

くすくす笑いながら、エレイズは仏頂面の副官を見た。

「私は、魔法関連ではお役に立てませんから。必要とエレイズ様にご判断されたなら」

「多分、良い子だと思うんだ、ヨーゼフ王子って。あのヨナが心から従ってるんだからね。」

……なんて言ったら、ヨナに失礼か」

「いえ、確かに彼はああ見えて難物でしょうから」

「君が云うかなあ」

「……」

エレイズはまた、おかしそくに笑って、頷いた。

「じゃあ、行つてらっしゃい。3人に宜しくね。」

シユウとジェイドはいいと思うけど、フレアには無理するなっ言
つておいて。命令だつてね」

「かしこまりました」

*

セフィーロが王城にやって来た。

「お初にお目に掛かります。ヨーゼフ王子殿下」

「我が儘で呼びつけてごめんなさい」

はにかんだようになるヨーゼフ。いやらしさのある丁寧な挨拶には慣れているが、真正正銘の丁寧さにはあまり慣れていない。フレアやシュウはもう、お友達感覚であるしヨナも気安さが入っている。ジェイドもそう。

「あんまり、形式張らないください。ご迷惑掛けたのはこっちなんですから」

ヨーゼフの発言に、珍しい事にセフィーロが目丸くした。

それから、微笑んだのには横で眺めていたフレアとシュウなど「あつ」と思わず声を出して驚いた。この国では珍しい青い瞳を持つ彼は、確かに整った顔立ちだが厳しそうで静かな印象しか抱いたことが無かったものだが……。こうしてみると、とても魅力的な美丈夫にさえ見えた。だが、微笑みはすぐに引込んでまだ彫像のような無表情に戻ってしまう。

『普段から笑えばいいのに』

そんな事を考えていたフレア。顔に出ていたのか、隣のシュウが微笑かに苦笑していた。

魔法は、室内で問題なかったのだが剣術となるともっと広い空間が必要。という事で、一同は中庭に出た。興味半分、護衛半分でフレアとシュウも同行。

中庭は裏庭や薔薇園とは打って変わって、簡素な印象を受ける。広く、上品に芝や木々が整えられてはいるが色とりどりの花が咲き誇るでもなく、豪華な彫像や噴水があるでもない。聞けば、ここで実際に兵士が剣の訓練を行う事があるというから納得であった。

セフィーロが使うのは、クレイモアと呼ばれる大剣。これといった飾り気のない、単純な形状の剣身を持つ。背は高いが、どうしても筋肉質に見えない体型のセフィーロが軽々と片手でその大剣を簡単に扱っているのは不思議で、1つの絵のようでもあった。

ヨーゼフは、ショート・ソードを持っている。ショート・ソードは名の通り、短めの剣であり、先端にいくにつれて剣幅が狭くなっている。乱戦などを考慮し、丈夫に作られているのも特徴のひとつ。

「！……ヨーゼフ様！？」

剣の訓練について聞いていたヨナが様子を見に来たところ、彼は驚いた声を上げた。そこにいたのは、息１つ乱さず、汗すらかいていない涼しげで静かなセフィーロと反対に息を荒げて……王族としてあるまじき姿勢だが致し方なく、大の字になって仰向けに倒れているヨーゼフであつた。

「一体、どんな無茶をやらかしたのですか」

「いや、それがですね」

シウウが少し、面白がりながら説明する。

「何一つ、特別な事はしてないんですよ」

「……？」

ヨナが首を傾げてばかりというのは、なかなか珍しい。

「素人の俺達の見たとところだと、唯単に、剣を打ちあわせてるだけなのに。たちまち、ヨーゼフ様は疲弊してセフィーロ副官はあの通り平然としてる訳です」

「はあ」

「やっぱり、体力無いですか、僕？」

身体に付いた土汚れも余り気にせず、上体を起こしただけのヨーゼフはセフィーロを見上げた。

「良い方ですよ。失礼ながら、もっと簡単に倒れてしまわれるかと思っていました」

やはり微笑んだりはずせず、淡々と述べるセフィーロ。

「今までに、誰かに教わった事はおありですか？」

「王城仕えの騎士に、ちょっとだけ」

「……あまり、教えるのに向いた方ではなかったようです。まず、くせを直しましょう」

「はい」

ヨナは、何だか、驚きっぱなしのようであった。

「どうしました？」

フレアがその表情に気付いて質問すると、そちらではなく再び立ち上がって、今度は細かなアドバイスをセフィーロから受けているヨーゼフに注目しながら

「いえ、ヨーゼフ様があそこまで……何というか活き活きしてらっしゃるのは珍しいので」

と、答えた。

「ああ、確かにキラキラしてますねえ」

シュウが同意する。

確かに、魔法を覚えている時もわくわくした様子ではあったが、今はそれ以上に楽しそうである。すっかり、セフィーロの弟子気分のようだ。

「もしかしたら、ヨーゼフ様は……初めて、尊敬する年長者を知ったのかもしれませんが」

そう言ったヨナは、どこか自分の事のように嬉しそうだった。

「この辺りで止めておきましょう。身体を痛めては本末転倒ですので」

「うーん、わかりました」

ヨーゼフは少し、名残惜しそうに剣を鞘に収めた。そして、はにかんだ表情で

「ありがとうございます、師匠」と。

今日は、珍しい、驚いた顔のセフィーロを2回も見ることとなった。

セフィーロはヨーゼフの室があるのと同じ棟に数日、泊まる事になった。ヨーゼフが得意の？ “我が儘” を使用して城の人々を説得したのだ。

そんな彼に、フレアは呼び止められた。

「フレア、エレイズ様から伝言だ」

「え？ はい」

少し緊張して背筋を正したフレアは、拍子抜けする事となる。

「『無理するな、命令だ』とのこと」

「ええっ……そんな、無理してると思われてるんですか？」

「さあ。……ただ、お前の昇級に関して、誰よりも悩んでいたのはエレイズ様だ。今でも、心配なさっているのだろっ」

フレアは、何となく、エレイズがそんな事で悩んでいるというのが意外だった。いつでも、超然として、人と異なる姿しか見てこなかったからだろうか。自分如きをそんなにも、エレイズが気に掛けてくれているというのが意外で、そして嬉しかった。

「それと、リアからも」

「リア副官……！」

「健康には気を付け、どんなに忙しくとも毎食きちんと取ること。」

徹夜は出来るだけしないこと」

「……え」

「寝る前はきちんと戸締まりを行うこと。人間関係で悩んだら、迷わず誰かに相談すること。悪い男に引つ掛からないように注意すること。万が一怪我をした場合は、軽いからと放っておかないこと。風邪の疑いがある場合は」

「あの、すみません」

「まだあるのだが。もういいか？」

「はい……ええとつまり、遠出をする子供に母親が言いそうなこと全部、って事ですネ？」

「そうなるな」

セフィーロの顔には特に表情が浮かんでいないが……リアに対する呆れが、どういう訳か容易に感じられた。

「……恐らく、お前がアーク殿の娘だと知ったからだろうな」

「え……？」

「あいつが、炎属性魔法を好むのはアーク殿を深く尊敬しているからだ。そのアーク殿が亡くなっているという事もあり、娘のお前の事が心配でならないのだろう。……感情移入して、父親の心境になっているのかもしれない」

余りにも冷静にセフィーロが分析しているものだから、フレアは何かおかしくて、笑ってしまう。

「……大丈夫か？」

笑いすぎて、苦しがつているフレアをまた無表情ながら呆れたように見るセフィーロ。

「いや、はい、大丈夫です……何か、おかしくってでも嬉しいです」

「そうか」

何となく、そう言ったセフィーロの声が優しかった。

戦いへの準備と急な呼び出し。

「何だ、今日は王子のとき、行かないのか？」

朝から、自室で本を読んでいるフレアにクーファは言った。

「うん。セフィーロ副官が、剣の指導をしてて……あたしにはする事ないし。それに、これを早いトコ読んでおかないと」

フレアがパンと叩いた本とは、先日、王城地下書庫から拝借してきた闇の魔法書である。これを読んで、無効化する逆転呪文を作らなければならぬ。ウラデイス達が、どれだけの魔法を知っているか解らないので、出来る限り対抗策を用意する事となったから手分けして魔法書解読が急ピッチで行われているのだ。

「まあ、ウォーレン大將軍が既に一冊分、片付けたらしいけど。あの人、ほんと凄い」

フレアは遠くを仰ぎ見るような目付きで言い、溜息をついてから自分の作業に戻った。

「ヨナ参謀長」

ジェイドが、少し寝不足なのか、顔色を悪くしてヨナを訪ねた。彼

は今、珍しく陽が昇っている時間なのに自室にいる。

「終わりましたか」

「ええ、翻訳完了です」

「ウォーレン大將軍に見ていただきましょう。それが一番早い」

「おや、この前のはもう片付けてしまったので？」

「そうです。敵いませんよ……。」

彼と会うまでは、私も知恵者の端くれと、そう思っていたのですが」

ヨナは、知ったことではないがフレアと殆ど同じ表情で溜息をついた。ジェイドは小さく笑う。

「それでは、立つ瀬がないと嘆く者が大勢いるでしょう。エレイズ様は、別件で天手古舞いの忙しさなのでしたっけ？」

「ラファイン大將軍と、ここところはずっと具体的な対応策について話し合われているですよ。当然ながら、備えるべき相手は闇魔法だけではありませんから」

「でしょうな」

ジェイドは頷く。そこへ、もう一人がやってくる。

「お、情報係が来ましたな」

「どうも」

シュウはにっこりと笑う。

「セバスチャン隊長が、暗号文解読を終了されました。そのまま、逆転呪文を作る作業に入ってくださいさるそうです。」

あの人に出れない事があるとしたら、聞いてみたいですね。」

「君の方の作業は？」

「もうちょいです。使うのと作るのは、また別ですからね」

「ヨーゼフ様は今日も？」

シュウが質問すると

「ええ。大喜びで、剣の練習に没頭していますよ。すっかり、師弟です」

ヨナは微かに笑った。

「そうだ、ちょっとした懸念というか思いつきを聞いてもらっていいですか？」

「どうしました」

「いやね、闇魔法の書を見ていると相手の魔力を封じ込めるとい

恐ろしい術があつたんです。強制魔法解除。

だから、ある意味でヨージェフ様が咄嗟に剣を使えるくらいになつておくのは良いことかなと。それから、ヨナ参謀長……魔法を使わぬ戦士を集める事なんて出来ますか？ この際、傭兵でも何でもいいですから」

ヨナはじつと話を聞いていたが、すぐに頷いた。

「何らかの手は打っておきましょう。セフィーロ殿に都合の良い知人など、いないかな」

「そうですね。彼のお墨付きがあれば、腕も人格というか立場も心配要らないでしょうね」

シュウの言い方に、ヨナは眉を上げた。

「連中が、そういった者を集めていると？」

「可能性の話ですけどね。さっき言った術は、一対象呪文でなく範囲対象呪文なんですよ」

つまり、一人の対象に効果をもたらすのではなく、その呪文の効果があるフィールドを創作り出す魔法だということ。

「どちらも力を無くして、素人の殴り合いを始めたって仕方がない。魔法使いの力を奪った上で、それを斃せる力を持つ者。要するに、強い剣士やらを用意してと思うんです」

「驚きました。君は本当に、慧眼ですね。敵が気の毒だ」

「いやいや、全部、セバスチャン隊長の御言葉ですよ」

「……は？」

「俺がロザリア隊長に話した事を、隊長がセバスチャン隊長に話したんですね。それで、返事が来た訳です。そんなに褒められなかったら、俺の能力って事にしても良かったんですけど」

あつはつは、と笑う少年魔法使い。どうやら、相当に隠し事と騙し、嘘が得意と見える。

「おい、フレア」

「なによお」

何時間もぶっ続けで本を読んでおり、頭がそろそろ痛くなってきた頃、クーファが訝しげな声を上げた。

「アレ、何だ？」

「ふえ？」

振り返ると、窓の外に……。

「蝶……？」

黒い蝶が、ヒラヒラと窓の外を飛んでいる。それだけなら、大したことでもないがその蝶は何度も体で窓を叩くようにしているし……。

「あの羽の模様……」

大きな蝶の羽の模様は、自然界ではありえないものだった。

狼の姿が白い線で描かれている。

「狼といえば！」

フレアは慌てて窓を開く。

蝶はすぐに入ってきて、フレアの方へ飛んできた。フレアが手を差し伸べると、その掌の上にとまり、銀色に光ると封筒に変化した。

「エレイズ様からだ……」

素早く目を通すと、そこには数日間は何の心配も無いだろうから王城を抜け出してラファインの城に来てくれという旨が書かれていた。そこで、エレイズとリア、ラルファスとその副官2人、それからウォーレンの副官リザが集まって闇魔法関連以外の対策会議を行っているのだという。

『クーフアも一緒に』

という指定付き。

「なるべく急いで、か。どうやって抜けだそう……?」

クーファに話してみても、2人（？）で首を傾げる事になっただけである。

しかし、エレイズ達はフレアの困る事などお見通しだった。夕方だというのに、城門前が騒がしい。

「あの馬車って……バーフォンハイム家の」

「ラファインが来たのか？」

「もしかして、迎えに来てくれたとか??」

またもや首を傾げていると、しばらくしてドアが叩かれた。

「はい！」

「エレイズからの連絡は届いているかな」

「はい」

大きく頷いた。

いやあ、本当に、優しく美しい好青年だ。目に優しい。

なんて考えてる場合じゃなくって！

「あの、もしかしてというか、もしかしくても……」

「王城から出るのだけでも、色々と手間がかかるだろうと思ってね。それに、私の馬車が私の城に入るのであれば誰一人として奇妙には思わないだろう?。」

「あ、成る程……」

確かに、どこの誰とも知らぬ小娘がラファイン大將軍の城をフラフラ訪れようものなら、『あいつは誰だ?』となつたに違いない。

「では、行こうか」

紳士のラファインは丁寧に手を差し伸べてくれた。

こんなに美しく、高貴な人にエスコートされると流石のフレアも照れる。

豪華な城に豪華なメンツ。……あたし、場違い？

ラファインの居城は、ウォルターナ城という。王城程ではないが、ダークヒル城に比べれば相当に大きい。白い外壁で、尖塔が幾つも見える美しい城は深い堀と高い城壁に囲まれている。2人がかりで開かれた城門を、馬車が通り抜けていく。城へ向かう前庭は、季節の花々が整然と並び道を作っている。城主と同じく、品の良い、美しい城だ。

エントランス・ホールは吹き抜けになっており、天井は丸窓になっていて光が差し込んでいる。そこでは、何名かが待っていた。

「フレア、久しぶり」

「エレイズ様！ お久しぶりですっ」

床に頭が着きそうな勢いで一礼。

「ま、元気そうだな」

リアがその光景に笑いつつ言った。

「本当にお若いんですね」

丁寧に微笑みかけてきたのは、長い金髪を頭頂部でまとめている品の良い……男？ 女？

「フェーンと申します。ラファイン軍の副官を務めています」

名前と、やや低めの声、体型で何とかフレアは男性であると判断した。

きらっきらの笑顔と、宝石のような翡翠色の瞳が眩しい。どうしてこう、眩い美貌を持つ方ばかりが集まるのか。類は友を呼ぶというやつか、とフレアは考えながら

「フレアです。エレイズ軍第零部隊所属です」

と、慣れない自己紹介。

一同は、1階の会議室に入る。そこに行くまでに、たくさんの兵士とすれ違ったが誰もが感じの良い挨拶をくれる。流石ラファインの軍だなと思った。

「待たせたね」

ラファインが会議室のドアを開けて声を掛けると、何やら話し合っていた2人の男女は立ち上がって一礼した。

「女の子の方がリザ。ウォーレンの副官の一人。隣が、レイル。ラファインの副官」

エレイズが簡単に紹介してくれた。

「この子がフレア。可愛いでしょ？」

「えっ」

まるで、姪っ子でも紹介するような言い方である……。

「ほんとですねえ。年齢が、何かのミスかと思ってましたけど。本当に16歳なの？」

「は、はい」

どこか、怖そうだと見えたりザだが、思ったより気安い雰囲気で安心した。

もう一人のレイルは、フレアの方を見て軽く礼をしたのみ。それを見て、リザが軽く笑う。

「こいつ、すごい人見知りなの！ 気にしないでいいよ」

「そう……でしたか」

男性にしては珍しい、前下がりでボブで顔に影が掛かっている所為もあるだろうが暗い印象。瞳は漆黒、肌は青白い。こちらを殆ど見てもくれないが、なかなか綺麗な顔立ちをしている。

「さっきまでの話し合いで、総意となったんだけど。王よりも王

子の命を優先させ、いざとなったら王は見捨てるというか斬り捨てるというか、囷にするといい事に關してまず、異論はない？」

エレイズがフレアに尋ねた。

思い切った事を言うものだなと感心しながら、頷く。

「多分、あの王が10人いるよりヨーゼフ様が1人いたほうが国のためでしょう」

リザがおかしそうに吹き出し、リアもにやりとする。

「シュウの毒舌がうつってるよ」

エレイズはくすくす笑って指摘する。

「そ、そうですか？」

「そうと決まると、どうやって王子様を守り抜くかだけど」

エレイズが話を進める。

「フレアやシュウ、ジェイドにヨナがいるといっても4人だからね。何かの拍子に、ヨーゼフ王子が一人となってその瞬間を狙われないとも限らない。

ヨナに調べてもらったけど、王子の部屋には1つの扉以外入り口は無いけど、同様に出口もそこしかない。執務室なら、部下が出入りしていても不思議はないけど侍女や執事以外が、寢室に入る訳にはいかないし」

「君や、他の3人の寝室から王子様のところまではどのくらいかる?」

ラファインの質問に、フレアは少し考えてから

「全員、別棟ですから。一番近い、ジェイドさんのところからでも3分は必要ですね」

と答える。

「結界は?」

リザの質問に、エレイズが眉を寄せる。

「ヨナの結界魔法の腕は確かだけど、それが有名だというのが問題。反・結界魔法を持ってこられたら仕様がな」

「あ!」

フェーンがにこにこして口を開いた。

「でしたら、フレアちゃんのクーラファンドラ・フレイム・ドラゴンを常に王子様の寝室に潜ませておくというのは?」

「なる……ほど」

全員が同時に考えを巡らせた。

「可能だな」

と、ラファイン。

そこで、クーファがフレアのポケットからひょいと出て来て、注目を一気に浴びる。

「俺も構わないぜ！」

初めて見る人々は、真っ赤な、掌サイズの羽つき蜥蜴が腕を組んで胸を張っている光景をぽかーんと見ていたがやがて、思い出したように頷いた。

「ただし、そうするなら魔力遮断の結界だけは常に張っておかないとね。その子の魔力、かなり目立つわよ」

リザが言う。

「それはヨナに任せていいと思う」

ちよつとした昔話を聞いたフレアは容易く納得したが、エレイズは相当ヨナの腕間を信用しているらしい。また、他の者にも異存はなさそうだった。

ヨーゼフ王子護衛会議。

「それから」

エレイズは次に、デスクに大きな地図を広げた。

「これ、城内図……！」

フレアはすぐに解ったが、他の者……特に副官達は、どうしてこんなものがここにあるのかと、驚いているようだった。

「ジェイドに頼んで、作っておいてもらったんだけどね。」

フレア、頼んでおいた通りやってくれた？」

「はい」

フレアが頼まれていた、そして、毎晩欠かさず行っていた事というのは城内をくまなく歩き回り、脱出ルートと侵入ルートを想定すること。ルート想定に関しては、シュウとヨーゼフが喜んで手伝ってくれた。本当に楽しそうに意見を交わし合っていたっけ……と思う出す。頭の良い男の子はこういうものが好きなのか。

渡されたペンで印を付けながら、想定されるルートについて説明した。

「この、君達が使用した陛下の寝室への抜け道について、相手側に知っている者がいる可能性は？」

というラファインの質問。

「ジェイドさんと話し合っただんですけど、私達が使っまで、誰かがそこに入った形跡は全くなかった。恐らく、知られていないかと」

「となると、正面突破してくるのかしら」

リザが言う。

「まあ、宰相が王と内密の話をするのは簡単ですからね」

と、フェーンも同意する。

「ま、王如きの暗殺に連中は大物を送り込んでこないだろうからこちらとしても放っておこう。いずれ、高血圧で死ぬだろうし……ごめん、ラファイン」

エレイズは、悪戯を咎められた子供のようにちよつと身をすくめた。

「それで、王子様のところへの侵入ルートは？ 寝室、執務室両方とも」

怖い顔をしたラファインが仕切り直した。

「それなんです、本当に……ヨーゼフ様を守ろうとしてるのかどうか疑わしいくらいの不用心な間取りです」

フレアは顔をしかめた。

「私とジェイドさんで確認済みなのですが、ヨーゼフ様の寝室、執務室共に窓からの侵入が可能です。階数からしても、その辺りが死角になっているところからしても……。」

魔法を使えば、強制解錠なんて簡単ですし。音を立てずに、窓を壊す事だって出来ちゃいますから相当に危険ですよ」

王と王子の係性を詳しく知らない副官勢は呆れたように口を開け、大將軍2人は「やっぱりね」という風に顔を見合わせた。

「それから、ヨナ参謀長の話によりますと、ヨーゼフ様の警護に付いているメンツの半分以上が魔法に疎い兵士だそうで。魔法で気配を消して近付かれたり、挙げ句の果てには眠らされたりして使い物にならない可能性の方が高いかと」

「だったら」

エレイズは、余り心配していないような顔色で口を開いた。

「寝室とはいわず、常にクーファが王子様と行動するようにしていればいいでしょ」

「でも、クーファの魔力について警戒される事は……」

フレアが言いかけると、今度は微笑んだエレイズ。

「ちょっと、法外の事をやろうと思うんだけど。全員、黙っておい

てくれる？」

「まさかエレイズ！」

ラファインが勘付いたようで、眉間に皺を寄せた。

「身につけるだけで、魔力を察せられなくなる闇の魔具があるんだ。偶然手に入ったんだけど」

リアが隣で肩をすくめている。……どうやら、偶然ではないようだ。

「成程、問題が全て解決しますね」

リザがちよつと楽しむように言う。流石、ウォーレンの副官というか。

「そうなんだ。ね？ ラファイン」

駄々っ子の様に、可愛らしく隣のラファインを見上げるエレイズ。ちなみに、関係ないところでフレアがメロメロになっている。

「私には、ウォーレンと違って色目は効かないぞ。

……だが、まあ必要な事か。それに、ここで私が異を唱えても、使える物は何でも使うのだろう？」

「じゃあ、決まりという事で」

と、立ち上がる。

「どこへ？」

「ロザリアに連絡して、1時間以内に送ってもらおう。善は急げって
いうから。今日中に、持って帰って」

後半はフレアとクーファに向けられた。

*

ダークヒル城では、クロウが過労死寸前であった。

数日前から対ウラディス派連合軍を想定した軍事演習が始まって
おり、また、元より人数の少ない軍であるから傭兵の募集・選抜も
行われている最中。……に、エレイズはラファインの城で行われる
作戦会議に行っているし、リアはそれに同行している。セフィーロ
は王子へ剣の指導をするために王城。セバスチャンとロザリアはそ
もそも、軍事演習には参加しない……という事で、必然的に魔法戦
闘部隊一番隊の隊長であるクロウに全権が委任されてしまったのだ。

ただでさえ、リアがさぼる仕事の後始末に追われる日々を送る彼
である。最後に布団を被って眠ったのがいつかは、もう覚えていな
い。

「クロウ」

そんな彼の唯一の救い、セフィーロ隊第一部隊の隊長、ラズがやつ
て来た。仕事を片付ける上では、救いであるが仕事を持つてくるの
も彼である。今も、後者のようだ。

「ウォーレン大將軍から連絡があつて」

「エレイズ様はご不在と伝えておいてください」

「つて言つただけど」

困つたように笑っているラズ。クロウよりも少し年上の彼は、セフイー口隊の者らしく魔法より剣術を得意とする。それが頷ける、筋肉で引き締まつた体つきで背は相当に高い。だが、顔立ちは優しく、黒い瞳は温和。茶色の髪は短く刈り込まれている。

「いないのは知ってるから、クロウで良いって」

「……」

思わず、小さな溜息をこぼしてクロウは頷いた。

「何と？」

「これから、ラファイン軍にも持ちかけるが3軍で合同軍事演習を行おうと」

クロウは眉根を寄せた。

「しかし、その様な動きを察せられては困るでしょう。3軍合同ともなると、ひっそり行つという訳にもいきません。ウォーレン大將軍にしては気が回つていらつしやらない……」

「それも、考えがあるらしくて。結界魔法を上手く利用するとかな

んとか。

俺、魔法苦手だからよく解らなくてさあ」

クロウはもう一度溜息をつく。今度はウォーレンに対してではなく、手段を考える前にダメだしをした自分の軽率さ 疲れで頭が回っていない所為もあるが に対してだった。

「連絡手段は？」

「それが、ご本人が来てて」

ラズがまた困ったように笑って言うと、クロウはガタツと音を立てて立ち上がった。よろめきながら頭を押さえる。

「それを何故、先に言ってくれないのです！」

「悪い、悪い。応接室にいらっしゃるから」

「あなたも来てください」

「俺も？ …… 解った」

ウォーレンは実際、待ちぼうけなど気にするタイプではなかったが、その為人を知らないクロウにとって今の状況はとんでもない大失態であった。ちなみに、ラズはそのウォーレン大將軍に

「ま、あんまり急がなくていいけどな。クロウも色々大変なんだろうと仰せつかっていたのだった。」

10年越しの野望と、協力者達。(前書き)

初、謀反組サイドです。

10年越しの野望と、協力者達。

「ラファインは当然、王家の味方につくでしょう。ウォーレンは王家……というより、ラファインを孤立させぬ為、彼に協力する。また、エレイズも同じはず」

ウラデイスは、大將軍の一人、ロータス・トレヴァーンの居城にて話し合いの場を持っていた。

「……待ってくれ、ウラデイス殿」

ロータスは顔をしかめた。もう、中年というべき年齢である。皺の多くなってきた顔は、気の強さとは無縁のようだが、彼は伯爵位を持っており爵位を持たぬ貴族のウラデイスより立場が上であると自負している。だから、精一杯向こうを張る威厳を発揮しようとしているのだが、それが滑稽に裏目に出ているというのがこのロータス大將軍である。今も、たくさんの不安を隠し通せていない。必死で声が震えぬよう、努力しているようだ。

「何か？」

それに相対して、ウラデイスは憎いほど落ち着いていた。此の世に我が敵無しとも言いたげな、威風堂々とした様相である。

「き……貴公は、我々の勝利は確実と」

「そつは申しておりますぬ」

若干苛立ったように、ウラデイスはこの爵位という虎の威を借る狐を見据えた。

「此の世には、確実な勝利など、有り得ませぬぞ。可能なのは、勝率を上げる事だけ……しかし、どのような手を打とうとも、それが100%となる事はない」

「……」

言いくるめられた子供のように、黙ってしまったロータス。そこへ、ロータスの向かいの男が口を挟んだ。

「ウラデイス殿の仰る事は最も……だが、それにしてもその3軍を敵に回すというのは些か無謀ではないか」

ロータスが気の弱そうな小男なら、こちらのヴォルグ・バーレーン侯爵は神経質を極めたような小男。がりがりに痩せていて、まだ若いものの疑り深い老人のような目をしている。眼鏡の奥の瞳は、この場においてウラデイスの双眸と並ぶ鋭さを持った唯一のものだ。

「だから、こんなにも時間を掛けて準備を行ってきたのですよ、皆さん」

ゆつたりと言うのは、ダグラス。家柄としては子爵と、そんなに高くないが宰相という事で、誰もが緊張感を持って彼には接する。10年前の彼をよく知っていたウラデイスは変わらないと思うのだが、最近になって彼を見た者はダグラス宰相はこの数年で随分と変わったと感じるだろう。30代半ばの、頼りない小男だった彼がウラデイスに国家転覆の野望を持ちかけて10年にもなるがその間に彼は指導者たる威厳を身につけていた。しかしこの威厳というのは、無

駄に虚勢を張ったり大声を出して相手を服従させるようなものではなく静かに、ひっそりと人心を掌握するような……そんな威厳。

「約10年前に、大魔法使いアークを消し、4年前にユエ大將軍を消した事をそうだと言うのなら……時間を掛けすぎの気もしますかね」

遠慮無く言ったのは、見たところ最年少の男。剛毅な武人然としたウラデイスはともかくとして、冴えない男達の中、唯一目立つ容姿を持っているといつていい。ハワード・ラルトウル伯爵。黒髪、黒目というこの国で最もよく見られるタイプで体つきはやせ気味だがみっともなくなない程度に鍛えられている事も窺える。

ハワードの発言に思わず大きく頷くロータス、観察するようにダグラスを見るヴォルグ。

「いいえ、とんでもない」

一切動じず、ゆつたりとした微笑みを消さないダグラスに何となくウラデイスを除いた3人は寒気を感じた。

「3名の中で最も厄介なのが、ドラゴンを契約魔獣としている上、軍のレベルも相当に高いウォーレンですが。彼の動きを封じる手筈は整えました。」

エレイズに関しても、過去の傷を上手くいじってやれば無力化できるでしょう。残るラファインですが、これくらい打ち倒せないようではこの先も国家として成り立たない。

大丈夫です、御三方はただ私とウラデイス殿を信用して軍を動かしてくれさえすれば良いのですよ」

何か言いたげな様子を、3人とも見せたが、結局は黙って同意を示した。

「やはり、奴らは当てにならない」

帰りの馬車に2人、同乗したウラデイスとダグラス。きつい声色でウラデイスは言った。

「気が弱すぎる。特に、ロータス」

「まあまあ」

ダグラスはそれをなだめる。

「後に引けない状況となれば、自ずと役に立ってくれるでしょう。ウォーレンの件はこの前お話しした通り。エレイズは私に任せていただいて……ラファインは正攻法で」

「そう上手くいくか？」

「仮にも大將軍と名の付く者を3人も差し向けるのですから、心配は」

「そちらではない。お前の方だ」

じつくりと相手の、笑みを消さぬ顔を見るウラデイス。

「はい？」

「お前如きに、あの女が消せるのか？」

「ふふ、私が手を下すとは申し上げていませんよ。

何の為の10年だと思っていらっしゃるのです。……近い内にお目にかけましょう。私の剣をね」

「……剣？」

魔法主流のこの土地の者にとって、自らの武力に長けた配下を「剣」と呼ぶことは珍しいのでウラデイスは少々眉をひそめた。

まさか……。

「魔法では敵わないから？」

「ええ、相手の最も力を発揮する方法で、真っ向から勝負を挑むなど愚の骨頂」

やっと、ウラデイスの顔から訝しむ様子が消えた。そして、口元には笑みさえ浮かべる。

「前言撤回だ。楽しみにしている」

*

レトール街。レミュエル王国と隣接するガルベラ王国の都。王城を中心として、賑やかで明るい城下町が広がり、各所に大將軍の居城を構えるレミュエルの都をよく知る者は一見するとこれが都であ

る事に気付かぬ。

隠密の国、ガルベラ……。その王城は、強靱な結界により視認不可の上、城下には殆ど人が住まない。低い石造りの冷たい家に住むのは、魔法使い、そして魔法薬製造士。

ここは、静かなガルベラ王城城下町の内奥。魔法薬製造士居住区。家族住まいの者は一人としてなく、誰もが魔法薬の研究と製造に毎日を注いで生きている。世界一の魔法薬製造士である、レイファというまだ若い女もここに住んでいて彼女の、ここ5、6年に渡る常客は他国の魔法使いであった。

「レミュエル人のくせによく魔法薬を思いついたものね。闇とそれに準ずる魔法を忌み嫌うつまらない王国の人間にしては面白いのかも」

狭い居間の半分を占める、大釜と薬草が並ぶ台からしばし離れてソファに座った。すらりとした脚を組んで、引きこもりの魔法薬製造士として生きていくのが勿体ないほどの美しい顔に何となく酷薄な笑みを浮かべる。今は邪魔になるから結わかれている金色の髪は、軽くウェーブしていて背中流せば美しい滝のようにも見えらるう。

「革命って言ったかしら。そんな正義感が見える男じゃなかったけど。それに、レミュエルの王制は一応安定しているし」

誰もいないことを良いことに、独白を続ける。

「まあ、面白ければいいか。私の顧客になってくれた訳だし、応援はしないとね。相手方は可哀想に」

口では可哀想と言いつつ、目は微笑んでいる。ガルベラの魔法薬製造士に、善悪の判断基準などない。自分の薬が使われるか否か、その効果が高いか否かしが興味がない。

火を掛けられていた大釜が、紫色の何とも言えぬおぞましい湯気を立て始めたのを見て満足そうにレイファは立ち上がった。

ウォーレン、ダークヒル城を訪問す。

「お待たせして申し訳ありません、ウォーレン大將軍」

恭しく一礼して、クロウが現れると相手は苦笑した。そして、感想を述べる。

「今にも死にそうだな、おい」

「少なくとも、エレイズ様とリア隊長がお帰りになるまでは死ぬ訳にいきませんので」

後ろでラズは嘖き出しそうになっていた。悪いが、この年下同僚の真面目さは……ツボだ。

「用件だが、聞いたか？」

身振りで「ま、座れよ」と指示しながらウォーレンが問いかけるのにクロウは首肯した。

「合同演習の事でしたか」

「そう。恐らく、王の首級は簡単に落ちる。俺達も、そこは本気で守ったりしないからな」

「……は」

この話についてはクロウも聞いている。

「で、次に王子だが。兎に角、彼には生きていてもらわないとうしようもない。だから、王城から一時的に避難させる事となると思う。」

そうすると、王城の主はいなくなり王国軍が残されるわけだが。俺達の読みだと、半分以上が謀反側に付いてる。あつという間に占拠されるだろ。

となると、解るな？」

「我々のすべきは、王子様の身の安全を図りながら、王城を奪還、首謀者達を屠ること。という事ですか」

「賢い！」

話の順調な進みに喜んでウォーレンは笑顔で褒めた。

「ここで心配になってくるのが、俺達が全て、まだ若い軍だって事さ」

「ええ。城攻めをした経験を持つ者など、そうはいないでしょう」

「だから、一夜漬けでもなんでも、形を知っておかなきゃならん。実際、俺も一度くらいしかやった事がないし、その時は総大将じゃなかった。エレイズやラファインも似たようなもんだろ。だから、今回の提案という訳だ」

クロウは頷き、少し考えを巡らせていたが提案した。

「我が軍には、もともと他国で傭兵として働いていた者も多いです。そついった経験のある者を将校の皆様方に加えて、仮作戦本部とし

てもいいのでは」

「成る程。俺の軍でもあたってみよう。……ラファイン軍に関しちや、レミユエル人で応募枠がいつでも一杯になっちまうというからな。ああ、ただど年をくった奴もいたな。聞いてみよう」

最後の方は独白であつたが、言い終わるとさっさと立ち上がった。

「エレイズ軍の了解を貰つたと考えていいな？」

「……そうですね。エレイズ様も同じようにお考えになるかと」

「話が早くて助かる。お前、モテるだろ？」

「……は？」

すると、黙って話を聞いていたラズがとうとう声に出して笑う。

「真面目過ぎてダメみたいですよ」

「はあゝ損してるな！」

「……」

何となく、ウォーレンという人柄に触れた気がしたクロウだった。

そこへ、小姓がノックをして入ってきた。

「どうした？」

ラズが促すと、彼は一礼して話す。

「先程、ラファイン大將軍のウォルターナ城から、ライト・ピジョンによる連絡が御座いました。エレイズ大將軍とリア副官は共に、現在、帰路についていらっしゃるとのこと」

「おーお、良かったな、クロウ」

「ええ……ウォーレン大將軍、どうなされていますか。こちらでエレイズ様の到着をお待ちになり、直接お話しをなさいますか？」

ウォーレンは少し考えたようだが、頷いた。

「そうだな、じゃあ待たせてもらうか。ちょっと、セバスチャンと話したい事もあるしな」

「承知しました。シン、ウォーレン大將軍をセバスチャン隊長のところへご案内しろ」

「かしこまりました。それでは、こちらへ」

「失礼」

ウォーレンは、小姓のシンを戻らせるとセバスチャンの執務室の戸を叩いた。

「おや……これは珍しい。ウォーレン大將軍ではありませんか」

女性のように細い首を傾げながら立ち上がり、取り敢えずとソファを勧めた。

「いらつしやるのなら、前もって教えてくだされば」

「悪いな、実際、すぐ帰るつもりだったんだが。エレイズを待つ事にしたからな」

「成る程。御用件は、こちらでしょうね」

セバスチャンは、大量の資料を手渡した。

「ガルベラの魔法薬に目を付けられるとは、お流石です」

「まあな」

元来、自尊心が強い方であるウォーレンは褒められるのが好きだ。今も、得意そうに、にやりと笑ってみせる。

「付け焼き刃だろうが、なんだろうが……俺の見た限りだと闇魔法はどれもこれも難易度が高すぎる。読んだだけで扱えるのは、それこそウラデイス一人くらいだろう。そうなると、特に役に立たん」

「ですが、魔法薬の効果を借りれば。闇魔法を使つと同等の影響を与える事も可能ですし、それはタイミングさえ見付ければ誰にでも

出来ます。

調べたところ、飲食物に含ませて直接体内に入り込ませる以外にも、粉末を僅かな量、空気に乗せて吸わせるだけでも効力を発揮する類もあるようで。また、変わったもので皮膚に塗りつけると効力を発揮するものも」

「気を付けるべきは、空気“感染”か。いや、最後のやつも例えば剣に塗り込まれたりすれば危険度が変わってくるな」

セバスチャンは頷いた。

「剣の使い手が、魔法に長けている事はこの国では珍しいですから。もしも、向こうが優秀な剣士やそれに準ずるものを集め、魔法使いにぶつけてきたら……」

「そう。将校クラスなら心配ないが、詠唱破棄が出来ない魔法使いは多い。腕が立つ剣客を相手取った場合、詠唱している間に斬り殺されるか……もしくは闇魔法で傀儡化されたり無力化されたり。兎に角厄介な羽目になる」

「心配なのが、フレアですね」

「ああ、あの子な……。クーラファンドラ・フレイム・ドラゴン使いを洗脳って……考えたくもない」

「セフィーロが王城にいるのは、ある意味で必要な事なのかもしれない」

口元へ手をやって考えつつセバスチャンは言う。

「お守りというと余りに申し訳ないが。この後、エレイズとお会いになるのでしたね？ この件を話してみてももらえませんか」

「ああ、そうするよ」

ウォーレンはそう答えてから、少し首を傾げた。

「だが、いいのか？ セフィーロの隊は」

「ラズがどうしてもするでしょう。彼はああ見えて、よく働きます」

「お前のお墨付きなら、問題ないな」

ウォーレンは軽く笑った。

「それでは、私はもう少し魔法薬について調べを進めてみますので。解毒薬……などというと、真っ当な魔法薬製造士に怒られそうですが、探しておきます」

「そうしてくれ」

ウォーレンとセバスチャンは頷き合って、会談を終了させた。丁度、小姓がエレイズの到着を告げたのだった。

不法侵入者。……いや、あたしもしょっちゅうやってるんだけどさ。

「じゃあ、クロウ休んで。リア、後をよろしくね」

「ヘーいへい」

エレイズがリア、クロウ、ラズに指示を出し終えたところへウォーレンがやってきた。前を歩いて、シンが案内してきたのだがまだ10代のシンの背が低く、ウォーレンが人並みより高いものだからその肩より上はつきりと見えるほどだった。

「そこでもいいよね？」

「ああ」

2人で応接室に入っていく。エレイズはドアを閉めかけて、止まると

「お茶だとかは、気にしないでいいから」

とシンに声を掛けてから、きつちりと閉めた。

ウォーレンは、クロウそれからセバスチャンとの話を細かに教えた。

「どうだ？」

「いいと思う。セフィーロがいるなら、確かに王城の剣士が100人いるより安全だからね。」

「あーあ、私の部下ばかりいなくなる」

少し不満そうに言ったエレイズに対し、ウォーレンは思わず苦笑した。

「それだけ優秀なのが揃ってるって事だ」

「まあね。それより、次いでだからさっきまでの会議で決定した事、聞いてもらっていい？」

エレイズは、一切の漏れなく会議の決定事項を詳細まで教えた。

「成る程。クーラファンドラ・フレイム・ドラゴンを王子直属の護衛にか。そんな豪華な護衛、聞いた事もないな！で、闇の魔具か？ お前……そういう子だっけ」

「そういう子にもならざるを得ない。善良な市民は悪党に勝てないからね。落ちた相手を倒したければ、同じ所まで落ちていかないと」

「名言だな」

「どーも」

名言だと笑いつつ、ウォーレンの背筋は妙に冷たくなった。エレイズは特別な意味を込めて、先程の台詞を吐いたわけではないだろうが……。もしも、彼女が隠している、婚約者の死因を知ったら……同じ事をしようとするのだろうか。悲しみも怒りも、何もかも綺

麗にしまい込んで鍵をかけているエレイズである。もし、その鍵が開き、取り出されたのが“怒り”だけだったら？ 敵のだけでなく、味方の闇魔法にも対処しなければならなくなるかもしれない。

「どうかした？」

「いや、何でもないさ……。そうそう、お前にも完成した反闇魔法を見ておいてもらいたいんだが？」

「うん、解った」

ウォーレンは難しい事など、何一つ彼の胸をかすめなかったとばかりに得意そうに自分達の成果を渡した。これを渡すのも、来訪目的の1つだった。

「じゃ、俺はここらへんで。合同演習の話に関しちゃ、ベルがラフアインのところに説明に行ったからな。了解もらったら、すぐ予定を知らせる」

*

それから3日後。

「そっか、解った」

ヨーゼフは少々、不服そうだったが素直に頷いた。セフィーロから、軍事演習のために数日間ダークヒルに戻る事を知らされたのだ。

その様子を見て、フレアとシュウは思わず顔を見合わせる。懐きまくりではないか。

「ま！ ヨーゼフの側にはこの俺様が付いてるからな！ 心配は無用ってもんだぜ」

王子直属護衛として配属されたクーファは、ヨーゼフの隣で上体を反らせる。無表情・無感情（要するにいつもの顔）でセフィーロは応じた。

「ああ、心強い」

「セフィーロ副官！ 気を遣ってあげなくていいですよ。こいつ、すぐ調子に乗るんですから！」

フレアは“やれやれ”と首を振りながら言った。

「何だとフレア！ この前もたーっぷり、俺様の武勇伝を聞かせてやったるうにつ」

「あの話って、結局一番すごいのは父さんじゃないの」

「何をお……、言い返せない」

自ら認めて小さくなる、小さな蜥蜴……否、ドラゴン。

それからは、大した事も起こらずフレア達、王城潜伏組はヨーゼフの周囲に目を光らせたり、引き続きダグラスやウラデイスの噂を集めたり、反闇魔法の訓練を（こっそりと）して時間を過ごした。

「うーん、落ち着く……けど、落ち着かないなア」

自分や、事情を知る魔法使い達が作った闇魔法の逆転魔法の呪文を眺めながらフレアは思わず独りごちた。クーファがいないと、静かなのだが、どうも小さい蜥蜴が何かある度に何か言ってくる面倒くさい状態が日常であったため、静か過ぎると落ち着かないタチになっってしまったようだ。

『外でも歩いてこよっかな』

王子警護の交替時間まで、まだ大分あるからと部屋の外へ出た。最初の内は、一步踏み出すのにも躊躇していた大理石の床だが今はもう、慣れたものだ。人の適応能力を知る。

何となく、ふらふら歩いていると足が覚えていてヨーゼフの執務室の方へ来てしまった。戻るのも何だから、少し早く行くかと思っていると……。

『あれは……』

もうすっかり顔を覚えた、ヨーゼフの部屋の周囲を巡回している兵ではない。それどころか、

『あの体格……それに、魔力が結構強いな。……魔法使いか』

剣を下げて、警備兵の鎧をつけているものの、どうしてもそうとは思えない。声を掛けて詰問しようかと思ったが、取りやめて気配を消して様子を窺う事にした。障害物のたいへん少ない廊下のまっただ中であるが、魔力で気配を消して足音も消すため自身の周囲を簡

単な結界で覆う。“結構強い”という判断をしたが、それは王城仕えの者（本当にそうであったとして）にしては、であってエレイズ軍を歩いていたら間違はなくセフィーロの部隊だと思っレベル。まず、気付かれないはずだ。

何者かは、どう見てもこそそこそと……しかし気配も音も無い事に安心していいのか振り返ったり、立ち止まったりはせずに、ヨーゼフの執務室の前まで来た。そこで、何か、道具を取り出す。

『……魔具？』

男の手に持ったものから、突然、黒い煙が立ち上り始めた。

『まずいかも！』

首筋が粟立つ嫌な予感と同時に、フレアは迷わず男に近寄った。

「あなた！」

「ひっ」

少女相手に情けない、と思わせる程、その男は身をすくめてフレアの姿を見ると一目散に逃げ出した。

「こらっ、待てっ……！」

見かけ通り、逃げ足は速いようだが慣れない鎧を着た小男と身軽な少女。段々とフレアは追いついていく。

「止まりなさいっ」

フレアは叫ぶと、呪文を唱えた。男の身体が一瞬だけ硬直する。それでもう十分な距離まで近付いていたからフレアは小男の眼前に躍り出る。

「あたしと追いかけてこしようつたって無駄よ。何をしたの？ あの黒い煙は何」

「お……お前は」

「聞ってるのはあたしよ」

自分でも、「護衛っぽくなっただな」と感心しながら問いつめる。

そんな呑気な事を考えている隙に……と知るはずもないが、男は踵を返した。

「このっ」

再び、追いかけてようとしたフレアは微笑んで止まった。

「ナイス！ シュウッ」

「それほどでも」

似非好青年が微笑んだまま、禁術ぎりぎりの氷結魔法で相手の動きを今度こそがちりと固めてしまう。ちなみにこの術は氷結魔法とはいっても、凍る訳ではない。氷漬けにされたように、指一本動かせなくなるだけだ。

「さあ、口だけ動かせるようにしたから。さつさと目的を吐くんだね。おっと、舌を噛もうとしてもだめだよ。そ………う………う………動きに出たら、再発動するようにプログラミングしてるからね」

プログラミングとは、要するに既存呪文の改変だ。余程センスのある者でなければ、一瞬で思い通りに術の改変など出来ないのだがシユウはその、余程センスのある者だった。プログラミングの難しさを知っていた男が実際に、ただのはったりだろうと思って舌を噛んでしまおうとしたところガツチリと顎が固まったので、とうとう諦めたらしい。

「俺は………」

その時だった。

解ってはいたけど、超少数派みたい。

「おや、どうしたのですか」

「……宰相」

フレアは思わず、口元を引き結んだ。対して、シュウは平然と……どころかへらへらとしている。

「いやあ、怪しい輩を捕まえまして。見ての通り、もう大丈夫です。あ、煩かったですか？ 申し訳ありません。俺達で始末しますんで」

しかし、ダグラスは簡単には頷かなかった。

「ヨーゼフ様の護衛は腕も弁も立つようですね」

「いいえ、それほどでも」

「ですが、使用している魔法がいただけませんな。氷結魔法を5分以上使うのは禁忌です。闇魔法の捕縛の呪いと同じ効果となってますからね」

しかし、シュウは悪びれもしない。あくまで明るい口調で返す。

「あ、5分経ってましたか？ 俺、時計持ってなくて。それにしても、だったら氷結魔法を禁術に指定すればいいと思いませんか？ そうなるとまあ、逃亡者の確保が難しくなるんですがね」

立て板に水、状態である。

「まあ、そんな事より。その男は私の方で預かりましょう。さ、こちらへ」

ダグラスが途端に、丁寧な物腰から有無を言わさぬ態度に変わる。その瞬間、フレアの頭に声が響いた。シュウのテレパスである。

『仕方ないから、引き渡そう。その男を縛って、ばれないように左ポケットから黒い筒を抜き取って』

フレアは早速取りかかる。

「何をしているのです？」

「いえいえ、だって、俺の魔法を解いたらその男、逃げ出しますよ。宰相は男と追いかけてこする趣味がありますか？ ですがね、俺の知人の中でも俊足で評判のこの子が追いつけなかった相手です。中々、大変な作業になると思いますよ。それとも、この男が宰相からは逃げない理由があったりして？ いやだな、睨まないでくださいよ。なんちゃっての話ですってば」

そうしている間に、フレアは警備員の誰もが腰にくくりつけている捕縛用のロープを男から取り上げて縛り上げ、ダグラスがシュウを睨んでいる瞬間に筒を抜き取って自分のポケットにしまいこんだ。

「これでよし！」

まだ、マシンガン・トークを繰り広げているシュウを遮るように言ってフレアは男を軽く前に押し出す。

「じゃあ、宰相、後はよろしくお願いしますね。そいつが何者なのか、解つたらこつそり教えてくださいよ」

「その必要がありますか？」

ダグラスは冷ややかに微笑んで、男を引き取った。男は目で必死に何かを訴えているがダグラスは構わず引き摺るようにして連れて行った。

「どうだった？」

2人が執務室に入ると、ヨーゼフは開口一番に言った。

「宰相のご登場ですよ」

「宰相だつて……？」

「捕まえたのに、持って行かれました。あれは絶対、手を組んでますね。」

まあでも、それが手に入っただけでも大捕物の内に入るかな」

シュウがフレアを振り返った。頷いて、フレアは黒い筒を取り出す。15センチ程度の円筒で、直径は2、3センチ程度とあまり太くない。

「これが、煙の発生源みたいです……あ、そういえば部屋の中に入

ってそうだったけど」

フレアが言うと、シュウが微笑んだ。

「それは大丈夫。俺が浄化呪文使ったから」

そこは、流石である。

「それにしても、クーファがいて良かった。俺も遠慮無く飛び出せたよ」

「……おい、ちょっと待てシュウ」

クーファが腕を組んだ。

「それが狙いだったら？」

「？」

「あの黒い煙は……まあ、何かしら効果があるにせよ中にいた見張りの奴が外へ飛び出し、願わくば犯人を追っていくようにするのが目的。その隙に、無防備になったヨーゼフを……てな」

シュウとフレアは顔を見合わせた。

「確かに、クーファがいることは誰も知らないもんね」

「俺とヨーゼフ様の他に、クーファの声が聞こえたから実行を諦めたのかもしれない」

「動き出したって事、か。」

……まあ、兎に角今はその筒だね」

ヨーゼフはフレアの手にある黒い筒を指さした。

「闇の魔具で間違いはないでしょうね」

と、シュウ。

「ヨナとジェイドさんと呼ばうか」

ヨーゼフが言ったので

「じゃあ、あたし、呼んできます」

と、フレアが駆けだした。

「成る程。ここを見てください」

「ああ……これは」

「おいおい、ちょっと、2人だけで喋ってないでこっちにも説明しろ！」

クーファが一同の心情を代弁すると、2人は我に返った。

「ここを見てください」

ジェイドがヨーゼフに黒い筒の一部を指さして、近づける。

「アルド」……！」

以前、話に出て来たダグラス一派と手を組んでいるらしい闇の魔具の第一人者の名である。

筒の側面に掘られている文字は恐らく、知らなければ見付けるのが困難だろう。

「闇の魔具で間違いは無いって事だな。効果は、解るか？」

クーフアの問いかけにヨナが頷く。

「恐らく、気体を大量に吸い込む事で効果を発揮するものですね。この手のものは、催眠効果や意識の錯乱をもたらすものが多いです」

「眠らせたところを殺そうとしたか、護衛に僕を殺させようとしたかって事だね」

ヨーゼフに頷いたヨナ。

「それにしても、ザルな計画ですよねえ。怪しい煙を見たら、駆け寄って確認するとも思ったんでしょうか？ 浄化呪文使うに決まってるじゃないですか」

シュウが言つと、ヨナが苦笑した。

「全ての人が、そう冷静とは限りませんよ」

「ヨナ参謀長が言っても信憑性ないですね」

フレアは、駆け寄って確認する自信があったが、黙っておいた。
… 今度から、気を付けようと決心した。

「兎に角、この事は全体に知らせましょう。この魔具はお預かりしても？ 入手ルートを調べれば、闇の魔具について詳しく解るかもしれませんので。どんなものがあるか、把握しておくに越したことはありませんから」

ヨナに一同、頷いた。

「多分……」

シュウが口を開く。

「セフィーロ副官がいなくなった途端、これですから。あの人が出て行くのを待っていたんでしょうね。この先、同じような事が立て続けに起こると思いますよ。部屋の外の警備も……あれ」

彼が言葉を止めた理由は判った。

「何で、誰もいなかったの？」

思わず、声を大きくしたフレア。

「そういえば、あたしが自分の部屋からここに来るまでの間も、誰

ともすれ違わなかった!」

「俺達、結構暴れたよね? それにしては、誰一人として……宰相以外、集まって来なかった」

「私がここを離れた後、結界が張られたのでしょうか」

ヨナが言うと、クーファが反駁する。

「だったら、俺が気付いたぜ」

となると。

「まさか……いや、思った通りと言つべきかな」

ジェイド。

「とはいっても、ここまでとは。我ながら、情けない王家だな」

ヨーゼフ。

「少なくとも警備担当は、全員共犯^{グル}……」

フレアが締めくくって、全員頷いた。

荒れてらっしゃる……。 (前書き)

いつもより長い割に内容薄です (苦笑)

荒れてらっしゃる……。

その後、ダグラスが引き取った不審人物について探りを入れていたジェイドがうんざりした表情でやって来た。

「どうだった？」

そう聞くヨーゼフも大体の予想がついているようだ。

「もみ消されていたようですね。国王陛下への報告が行っていないのは勿論、噂にさえなっていないませんよ……。犯人もどうされたやら。ミスを責められて始末されたのか、安全なところへ逃がされたのか」

「俺達が騒ぎ立てたところで余り効果はないだろうし」

シウウが考え込みながら言った。

「いつその事、ヨーゼフ様が直接国王陛下に……」

フレアの言葉に、本人は

「どうかな」

と。

「実害は出ていない訳だし、犯人は既にダグラスの手に渡っている……。あいつが僕が父上を説得しているのを嗅ぎ付けてやってこないとも限らないしね。そうなれば、可愛くない息子より忠実な宰相

だ。ダグラスに任せてお前は引っ込んでいろ。大人しくせずに嗅ぎ回ろうとするから、危険も増える……なあんて言われるのに賭けてもいいさ。信頼関係って大事なんだね」

肩をすくめるヨーゼフ。今更どうしようもないが、確かに王とヨーゼフが信頼しあった親子であつたら……話の進みは全く違つていただろう。

「これからは、何かあつたら秘密裏に処理しないといけませんね。宰相や、仲良しの衛兵達が出てくるより前に、迅速に」

シユウが言つた。フレアが首を傾げる。

「でも、そんな事……」

「俺に任せとけ！ 瞬間的に炭にしてやるぜ」

胸を張つてクーファ。

「それじゃ、犯人を取り上げられるのと同じじゃない！ 跡形は残してよねっ」

「うっむ、そうか。焼き加減が難しいぜ」

「そうそう、肉は生焼けくらいが美味しいしね」

「あ、王子様、解ります。ミディアムよりレアですよね」

「おや、私はウェルダンが好きですよ」

「そういう話じゃないっ」

フレア渾身のツツコミが入った。何で真面目な話をしていたのに、ギャグテイストになっているのだ。

「失礼します」

そこへ、ギャグテイストとは無縁のヨナが入ってきてフレアは彼が救いの神に見えた。

「随分と盛り上がっていたようですが？」

「ああ、肉の焼き加減についてな！」

クーフアの解答に、首を45度曲げるヨナ。フレアは目で、無視してくださいと訴えてからさっきの問題について正しく伝えた。

「成る程。こちらの話と近からず、遠からずですね」

「そつえばヨナ、ぐったりしてない？」

ヨーゼフが目聡く観察して述べると、彼はうなだれるように頷いた。

「どうも、連中は証拠の品を全て回収していない事に気付いたらしく」

ヨナはロープの裏から例の筒を取り出した。

「これを取り返そうとする、連中の手先と一騒動どころか……夜通し殺気と魔力に当てられて碌に眠れませんでした。立ち向かってき

た者は、捕らえましたが……」

「また、ダグラス？」

言葉を切ったヨナにヨーゼフが問うと、彼は首を横に。

「刺客は条件性の呪いを掛けられていたようでした。首謀者の名を私が問いかけた途端、即死です」

「その死体は？」

「王城内で取り扱う事は出来ませんから、セバスチャン殿の配下の方々に預かっていただきました」

エレイズの城から一晩で？ という疑問に首を傾げた一同にヨナは説明する。

「セバスチャン殿は、あらゆる地域に部下を潜伏させていらつしやるのです。単なる商店の売り子であったり、行商人であったり……。そして、今回お世話になったのは葬儀屋です」

そういう、ホラー系の響きが苦手なフレアは軽く身震いした。……というか、無駄にセバスチャンには柩や墓地が似合う気がするのは何故だろう。

「まあ、死人を預けるにはもってこいか。彼らが調べてくれるという事だね？」

ヨーゼフにヨナは頷いたが、その顔はどちらかというと暗い。

「私の方でも軽く、持ち物などを検めたのですが、証拠となるものは見付かりませんでした。それに、呪いを掛けたのが我々の知る魔法使いとは限りませんので望み薄かと」

「やっぱり、尻尾を洗い出すなんて無理なのか。向こうに敵対に氣付いている事を氣付かれてしまったからにはね」

全面対決の可能性はもともとあったが、更に強くなってきた。

「奴らが、予想より早めに動いてくるかもしれない。反闇魔法の方はどうなってる？」

ヨーゼフの問いに、久し振りに好ましい答えが返ってきた。

「葬儀屋取締役と僕は取り敢えず、作った分は網羅してますので」

「葬儀屋取締役って、……セバスチャン隊長の事？」

悪口とは言えないが、どこか無礼な気がするのは何故だろう。

「あの人には、笑顔より冷笑、白より黒、朝より夜、生より死が似合うと思わない？」

「そんな具体的に言わなくても……」

今や、自他（？）共に認める墓場の支配者第一の部下であるジェイドを横目でちらりと見やる。……すると、彼は腹を抱えて笑ってい

た。目尻に涙を浮かべて。……薄情者。

「生のまま人肉を喰ってそうだね」

「肉の話はもういいからっ!!」

口の端から（誰かの）血を流して冷笑を浮かべる、真っ黒の背景を背負ったセバスチャンを想像してしまった。……夢に見て呪われそうだ。

*

「くちゅん」

「あ、聞いちゃった。可愛いくしゃみ」

笑ったロザリアを軽く睨んでからセバスチャンは書類を突き出した。

「今日中に、この人物について調べてください。いいですか、今日中にですよ、今日中に!」

「3回も言わなくていいわよ。でもね、戦時情報網整備の件がまだ終わってないの」

ロザリアが悪びれず、それどころか困った事を相談するように言うからセバスチャンは細い肩をがくりと落とした。

「あなたはいつもいつも……まあ、いいです。もう、いいです。それはガーディにでもやらせればいいでしょう。その方がきつと早い」

「はい」

ロザリアは、お前には隊長格のプライドはないのかとセバスチャンがその背に叫びなくなるくらい素直に二つ返事して出て行った。

それと入れ違いに入ってきたのが、イアリスである。

「失礼します……お加減悪そうですね」

「君の見目麗しい隊長の所為でね」

「いや、あはは……。隊長にも悪気はないというか」

「ええそうですね、悪気があったら、ここまで出来ませんよ。彼女は何ですか、墓場まで仕事を持ち帰ってのろろと片付け続けるつもりですか」

「うわ、セバスチャン隊長、死ぬまで働くお積もりで？」

「彼女の所為で仕事をしながら死にそうですよ。部下に葬儀屋をやらせておいたのは正解かな」

「……」

『荒れてらっしゃる……。うわーっ、この状況で面倒くさい仕事、伝えたくないなあっ』

「それで？ イアリス」

「はい……これを、見てください」

書類を受け取ったセバスチャンの背後にどす黒い、というか世界滅亡を一瞬後に控えた魔王の如くおぞましいオーラが見えたのはイリスの目の錯覚か。

「これは本来、情報部の仕事では？」

「む……無理ならいいんですつ。ただ、ええとですね」

「期限ぎりぎりに仕事を先伸ばしているところへ、こここのところ立て続けに新たな仕事舞い込んできた。そしてそれを副官のガーディを始めとしたたくさん部下に取りかからせているが、なにぶん量が量。それさえ期限内に終わらせるのがやっとなのに、新たにこの七面倒くさい仕事を増やすと機能停止すると」

「……仰るとおりで御座います」

荒れている……。滅多な事では感情にまかせて行動しない、彫像の様な美丈夫が荒れている……。

「はは……」

「え」

「あはは、はははっ！」

「セ……セバ……」

「あははははははっ」

「ひいひいっ」

セバスチャンの無味乾燥で高らかな……誰がどう聞いても気が触れてしまった笑い声とイアリスの恐怖による絶叫がしばし続いた。

「置いておきなさい」

「え……」

「その書類。内容は？」

「は、はい。王子様暗殺に関わり、その上ヨナ参謀長襲撃に関与していた者達はどうやら1つのまとまりではなく、多数の雇われた組織だという事が解りましたのでその組織について洗い出す事。それから、この魔具に残る魔力残滓を調べ、これを扱った男がどうなったか調べる事」

「成る程。誰の指示ですか？」

「王子様ですね」

「全く、人を何だと思っているんだ。まあ確かに、御自分の命が掛かっているのだから必死になって無理もない。しかも、自分の命だけでは済まず、この王国の寿命まで掛かっているのだからな。それにしても、彼は人を使う事に慣れすぎているのではないか。いや、王子だから当然か。あんな善良な子犬のような顔をして……。私はもう騙されないぞ。次からはこちらが喰ってやるくらいのつもりで相対する必要があるな。対応をヴァン（副官）に任せておいたのは失敗だった。彼は仕事が速くて忠実な良い部下なのだが丁寧すぎる

という欠点がある。王子に足下を見られたか？ 全く、碌でもないガキだ。大人の恐ろしさというものを誰か教えてやったほうがいい。だいたい、ヨナ殿も甘やかしすぎなのだ。父親に愛されぬ憐れな王子だと？ 私など、両親の顔さえ覚えていないさ。同情の理由としては甘すぎる、ああ、甘すぎる。確かに、あの愚鈍を極めた肥えた豚のような国王よりはずっと頭が回るし、好人物には違いない。だが、それにしてもこれはないだろう。いや、文句を言うところを間違えていたか。一番悪いのはロザリアだ。あのお嬢様め。情報収集関係の魔法に関する能力が天下一品だというのは百歩譲って認めるとして、あの怠惰な勤務態度は何だ。隊長の一人として、軍という巨大な組織を動かしているという自覚と責任感が果たしてあるのだろうか？ いや、無いだろうな。やんわりとしていて部下に好かれやすいところが彼女の美点だとしても、仕事にならなければ意味がない。

ねえ、イアリス？」

- - 何について、同意もとめてるんですかっ！？ てか、ブチギレ！？

という盛大なツッコミは心の奥にしまって、イアリスはこの数ヶ月で会得した必殺愛想笑いでスルーしたのだった。

大將軍襲撃事件。

それから二週間。様々な者が様々な秘密裏の対応に追われていたが、それもようやく落ち着いてきて三軍合同軍事演習もウォーレンが広げたマジック・フィールドと、やつれ果てたヨナも協力して張った結界の中で行われ、終了した。セバスチャンはイアリスのトラウマになりかけたブチギレから立ち直ると、いつもの彼らしい冷静さと素早さでもって仕事を片付け、流石のロザリアもこの二週間はいつ誰が見ても仕事モードであった。ガーディはお菓子を買いに行かされる事がなかった。

さて、三軍合同軍事演習が行われたのは誰の城でもなく王都から遠い国境付近の平原であった。場所柄、白兵戦が中心となったが作戦本部では万が一王城内までもが戦場となった時の想定が行われて兵達には細かな説明がなされた。そこでは、こっそり会議に参加してくれたラファインの父親、アルベルトの知識が大いに役立った。別れ際に、アルベルトは手を空かせていたエレイズに溜息混じりに語った。

「それにしても、若き者達が革命の意気に燃えるならまだしも国王陛下に忠誠を誓って長いはずの将校達が謀反を計画しているとは。情けない限りだ」

もう、60に近い元大將軍の大貴族は一般より早めに戦線を退いたのを後悔しているらしい。

「もしも、私が目を光らせておいたなら」

「いえ……閣下が例え在役中でいらつしやったとしても、やはり奴らは動いたでしょう。なにせ、どう考えても奴らの計画が始まったのは1年や2年前ではありませぬ。恐らく10年近い歳月を掛けて、外堀を埋め、中を固め……刻一刻と王国の首を狙ってきたのでしよう」

聡明な瞳で受け答えた、エレイズを見てアルベルトはラファインとやはり似たところの多い、優しく、若き頃の美しさを彷彿とさせる黒い瞳で感心したように相手を見た。そして、微笑む。

「堂々としたものだな、エレイズ大將軍。初めて將軍職についたあなたを見た時は、本当に大丈夫なのかとも思ったが。昔の私は慧眼とは言えなかったようだ。今もかな」

「そんな事は。自分で思い返しても、昔の私は唯の魔力の強い小娘でした」

同じく微笑んだエレイズをしげしげと……当然、いやらしい気配など全くなく……眺めるとふと口にする。

「ラファインの婚約者が、25にもなつてまだ決まっていけないのだな。どうだ、エレイズ大將軍？」

「お戯れを」

きつぱりとしたお断りを込めた微笑みに、残念そうにアルベルトは息を吐いた。

「そうか。」

実際、困っておるのだよ。あやつも、なかなか潔癖な男でな。いや、

私に似てしまったのだろうか」

アルベルト本人も、親の決めた婚約者を全力で突っぱねて下級貴族のカステイリヤ婦人と結婚したのだったと聞いた事をエレイズは思いうす。

「私は平民どころか、自分でも生まれを知らぬ身です。外聞も悪いでしょう。それに、ラファインには素直でしとやかな人が似合うと思いますか？」

「はっはっは！ それはあなたが、曲者だという事かな」

「そう自負しております」

「いやはや、あなたは面白いよ。カステイリヤと会ってみないかね。気が合うと思うぞ」

エレイズは、この人こそ曲者だと思った。

「諦めていらつしやらないのですね」

「何の事かな、はっはっは」

指摘の意図を理解してその通りだと思いつつ、何でもない風で楽しそうに笑う大貴族であった。

「……リザ、気付いたか？」

帰路についているウォーレン軍のトップ3名。その馬車の中でウォーレンは目を細めた。

「見られてる……というか、尾行されてますね」

「ええっ」

ローベルグが目を顔と同じくらい丸くして声を上げたので、ウォーレンは静かにしりと身振りで示す。

「何のつもりだな。俺は別に楽しいところに寄り道するつもりもないんだが。俺の城の場所なんて、今更調べるまでもないだろうし……てか、気配丸出しじゃねえか」

彼らは今、森林地帯を抜けている。馬車道が通っているものの、一歩外れば木々と茂みで視界が効かなくなるところで、夜盗を恐れて陽が暮れてからここを通る者は殆どいないくらいだ。

「左右に5人ずつ。盗賊じゃなさそうですね。多分、今なら気付いてる事を気付かれてませんよ」

リザが窓の外を見ないようにして言う。文官のようなものであるローベルグは気付かなかったが、生粋の武官である2人はすぐに気付いた。あまり優秀な戦士ではないと見える。

「魔力の気配も余りしませんね」

「だが、油断するなよ……。さて、何が狙いだ？」

反対の方面でも、同じような事が起きていた。だが、こちらではどちら側にとつても身を隠すものなどなく相手も隠れて尾行するつもりではなかったらしい。エレイズ達の馬車が街道を出て、静かな田舎道に入った途端、一気に馬上の者達に囲まれた。

「これはこれは」

リアがべつと舌を出す。

「ど……どうなさいますか」

一般人である、御者の男は当然怯えて、戸惑っている。

「取り敢えず、止めて。10人ならすぐに片付く」

他の兵達は、半分は後始末の為現地に残り、半分は目立たぬようばらばらのルートを通して帰城している。前にも後ろにも、誰もいない。

「リア、セファイロ、降りるよ」

2人は頷いて、停止した馬車からさつと飛び降りた。

まず、エレイズに斬りかかってきた相手を逆にセファイロが電光石火のスピードで切りふせている間に彼女は召喚を完了させた。

軽い爆発音にさえ近い音と共に、白い煙が上がる。そして現れた姿を見て、刺客達 誰もが黒い鎧兜を身につけ、兜の面頬は全ておろしている。鎧兜には、何の紋章など、所属を示すものはないは、その姿を見ただけで後退りする。

巨大な白い狼である。Sランク氷属性の狼型魔獣で、その毛並みは雪のように美しく、だが瞳は血のように赤い。僅かに開いた牙のびっしり並ぶ口の中も、同様に赤く噛まれるまでもなく流血を思わせる。大きさは、体高がエレイズの腰より上まであつて体長となると2メートルはあるつかと思われる。

「ご主人、久し振りじゃねえか」

低く、唸るような声で狼は云いつつ、頭をエレイズに押し当てた。

「平和ボケしてたからね。暴れていい。一人だけ残して」

「残すのはリア坊にでも任せろ、こっちは全部俺が殺る」

「てことで、よろしくリア」

「へいへい、おっそろしいぜ」

そういう彼の脇には、馬車を引く馬より一回りは大きい炎のたてがみで、赤に近い毛並みを持った馬。Aランク炎属性。リアはその背を叩くと、

「任せるわ。一人残せと」

と、簡単な指示を出して自分は馬車に寄っかけて見物を決め込む。

セフィロはというと、念のために剣を持った手の力は緩めずにいつでも大將軍を守る位置にいるが、アイス・ウルフとフレイム・ホースが出たからには自分の仕事はないと考えているようだった。

大將軍襲撃事件あらため、大將軍誘拐事件。

しかし、3人の予想は裏切られた。Sランク魔獣の覇気に押されて震え上がった時間が終わると、圧倒的不利とみえる状況には変わりないのにあつという間に落ち着きが戻った。流石に訝しく思い、剣をいつでも振れるようにしたセフィーロは正しかったのである。

「……何だ、この匂い」

アイス・ウルフが一瞬、動きを遅らせた隙に黒い兵士達の中の一人が黒い掌に収まるくらいの球を投げ上げた。

「まずい」

エレイズは その効果を読み切った訳ではないが 即座にそれを壊そうと、球の周囲に氷の槍を出現させたがそれが突き刺さる直前……。

それは、崩壊した。そして、次の瞬間。

エレイズの魔法により生じた氷が全て霧散する。更に

「ガルルルッ」

「ヒヒイイン」

アイス・ウルフとフレイム・ホースが唸りと嘶きを上げて消え去った！

「まさか、魔法解除……」

エレイズの呟きを聞きつけた黒い兵が笑う。

「その通りだ！ 貴様ら魔法使いには、これで打つ手は無いだろう！」

「エレイズ軍トップ達といえど、大した事はない」

「所詮、ひ弱な女の軍　ッ？」

最後、余計なエレイズへの中傷を述べた者の首は即座に宙を舞った。風の如く襲いかかったセフィールの剣に、1つの抵抗する間もなく倒れた。その途端、堰を切ったように全員が一度に掛かってきたがセフィールは意に介した風もない。まず、彼に到達した2本の剣を弾き上げると2つの胴を鎧ごとまとめて切り裂き、呻くそれらを邪魔と払いのけ、後ろからの剣を素早く横に逃れてかわすと、躊躇無く首を落とす。

4人が、いや始めの1人を加えて5人があつという間に葬り去られた事で、彼らが先に述べたような、彼らにとって都合の良い状況がやってきたのではないことを悟つたらしい。距離を大きく開いて、大して頑強に見える体つきでもない超戦士の隙を探す。

「エレイズ様、リアと共に中へ。ここはお任せを」

「うん。邪魔しないようにする」

エレイズとリアがさっさと引き上げるも、下手に動けば自分らの寿

命を縮めるだけと見送るしかない。

『あと5人……』

強引にねじ伏せられない人数ではないが、乱戦となれば全滅させてしまう可能性が出てくる。となると、得られる情報が一気に少なくなってしまう。

「我々が命じられているのは、ウォーレン大將軍を連行する事だけだ。それさえ出来れば、あとの者はどうしろとも言われていない」

ウォーレン達の方は、絶体絶命の窮地に置かれていた。エレイズ達と同じく、周りに味方はいないし魔法解除を行われた。そして、こちらの方が襲撃者達も手慣れていて御者と馬、それからローベルグが人質にとられていた。

「おい、ベル。全て片がついたら、地獄のダイエットをさせてやるからな」

「ひいつ、何を言ってるんですかウォーレン大將軍っ」

「大將軍なんて連れて行ってどうするって訳？ これを操ろうとなんてしたら、逆に操られて色々と死んだ方がマシな目に遭うわよ」

「リザっ……まあ、色々ツッコミはあるが、そういう事だ。諦めてさっさと帰れ！」

「あんたは俺達を笑わせたいのか？ そちらが諦めるほうだと思っ
が」

呑気な会話にも聞こえるが、ローベルグ達の首に当てられた刃物は
ほとんど力が込められていくし、ウォーレンとリザも残る者の剣を
突きつけられて動けない。

「さあ、もう一度聞こうか。」

俺達にあんたが付いてくるか、ここで全滅か」

「その2択はちょっとなあ」

「ならば3択にしてやろう」

「お、流石。顔は見えないがきつと男前！」

「あんただけ付いてくるか、全員でそうするか、全滅か」

「前言撤回。宇宙一の不細工め」

「子供の喧嘩じゃないんですから、ウォーレン大將軍っ」

「だ、……旦那。あたしと馬まで殺されるってのは、無しの方向で
……」

年老いた御者が切ない声を出し、馬も同調したように静かに嘶く。

「僕だって嫌ですよっ！ 捕まるならお一人でっ」

「同感、火の粉は部下の分も被ってくださいね」

「はあああ、何って可愛くない！　これがエレイズ軍なら違っんだろっなあ。ラファインのともそうか」

「半分以上、あんたの責任のように俺にも見えるが」

「あら、よく解ってるじゃないの。初対面なのに」

何故か解り合った（？）リザと敵に、大いなる溜息をつくウォーレン。仕方なく、進み出た。

「解った。連れて行け。だが、自由に脱走するからな」

「出来るなら、やってみるといい。お前達」

「はい」

どうやら、喋っていた男がトップらしい。その命令に応じて数名がウォーレンの手足を拘束して、鍵付きの首輪を付ける。

「何だって、お前、そういう趣味か!？」

「面倒な男だ。なに、唯の魔力封印具だ。手や足につけると、どこかにぶつけて壊される可能性があるからな」

「おお、賢い」

「それから」

どうやら、トップの男はウォーレンのとある発言に対して、相当に

頭に来ていたらしい。

「俺は不細工じゃない」

兜を外した途端、美しい金糸のような長髪がこぼれ落ちた。その瞳は紫色で、綺麗なアーモンド形をしている。大きすぎぬが十分に力のあるその瞳が男らしい美しさを強調している以外は、女性のもののようなパーツが揃っている。すっと高い鼻に、淡い色の唇、細い顎のライン……。確かに、不細工ではないどころか一目見たら忘れられない程の美丈夫であった。

「その顔……！」

リザは思わず、目を丸くした。

「“美貌の剣豪”、ライアルト……」

「余り好きな呼ばれかたではないがな。さあ、大將軍、準備はいいな。」

副官の2人か？ 俺について調べても無駄だとだけ言っておこう」

ウォーレンは縛り上げられたまま、荷物のように馬に乘せられた。

髪をこれみよがしに振ってから兜を被り直したライアルトは、優雅に白馬に跨ると付け足した。

「予想はついているだろうが……“雇い人”から伝言があった」

『ウラデイスか、ダグラスね』

リザは目をきつく光らせた。

「言ってみなさいよ」

「時は満ちた」

その一言だけで、馬を駆けさせて去っていく。

「リザ、どうするの……？」

「ベル、ライト・ピジョンはもう使える？」

「え、……ああそうか。エレイズ軍は大丈夫かな」

「そう、早急に調べて、こちらの事を伝えましょう」

ベルはいつでも持ち歩いている万年筆と紙を取り出して、手早く書きしたためると返信用の紙を添えてライト・ピジョンの足にくくった。

「時は満ちた……つまり、あいつらが大きく動き出すって訳ね」

「うちの大將軍は、多分殺しても死なないだろうから。本人に任せるとして。軍の指揮はリザに任せて大丈夫でしょ？」

「出来るわ。何なら、他軍の手も借りる」

それから、思い出したようにローベルグは御者を見た。

「怖い思いさせて済みません。出してもらえますか」

「へ、へい。この年になって、命のありがたみを知りましたよ」

展開に付いていきかねている御者は、慌てて仕事に戻った。

エレイズ軍の側の刺客は、1人を除き完全に息絶えていた。その1人は、手足を拘束され、舌を噛まぬよう簡易猿ぐつわとして布を噛まされて馬車に押し込まれたところだった。

「死体はどうする？」

リアの問いかけにエレイズは、少し唸る。

「この場では始末できないけど、放っておく訳にもいかないしな……セバスチャンに任せると流石に、笑顔で殺されそうだ」

リアもセフィーロも「殺されはしないだろう」とは言わなかった。

「恐らく、1人も戻らぬ事を不審に思っただけならこやつらの味方が様子を見に来るでしょう。このままにしておいてもいいかと」

代わりにセフィーロはそう提言したので、エレイズは頷く。

「ここを通る予定の居残り組がいるから、それを来させて見張らせよう。出来れば、追跡を」

「いや、だったら俺が残るさ。中途半端な奴じゃ、尾行も出来ないだろ。下っ端が帰ってこないところに、下っ端が更に来たってどうしようもないから、それなりの実力者が来るはずだ」

リアがそんな事を言ったので、失礼ながら エレイズは驚いた。

「リアが進んで仕事をしてくれるとは思ってなかった。じゃあ、頼むよ」

「一言余計だっつーの」

そこへ、ローベルグのライト・ピジョンがやってきたので一同、顔色を不審に染める。

真っ直ぐ、エレイズのところへ飛んできたライト・ピジョンの足から手紙を取る。緊急時だったのか、封印魔法はなされていない。素早く目を通したエレイズは、顔をしかめた。

「……何だって？」

「同じように、ウォーレン達も襲撃に遭った。手法も同じ……。だから、魔法を封じられたあの3人には為す術なく、ウォーレンは連れ去られた」

「はあっ!？」

「……！」

エレイズは、2人にも手紙が読めるようにしてやった。まだ、混乱したまま手紙を読んでそれが事実と改めて確認する。

「ライアルト……」

セフィーロが反応した名前に、エレイズとリアは首を傾げる。

「知ってるのか？」

リアが促すと、セフィーロは頷いた。

「かなり腕の立つ、有名な剣士だ。……俺も勝てるかどうか解らない」

問題山積み、時間もなし。

「兎に角、ラファインと連絡をとろう。まさかとは思っけど、同じような状況に陥っているかもしれない」

ライト・ピジョンに返事を持たせてからエレイズは言った。

「ロザリア嬢がいりゃよかったが」

「うん……だから、早く戻る。リア、それじゃあここは頼んだよ」

「ああ」

エレイズとセフィーロは馬車に戻り、なるべく速度を上げてくれるように御者に頼んだ。

コルドワークズ城は、演習場所から割と近いところにあるのでリザとローベルクはもう帰城していた。2人は真っ直ぐ、ブライグのところへ向かった。ウォーレンがない事をすれ違う兵達は不審に思ったが、リザの表情にひるみ、ローベルグからいつもの、のほほんとしたオーラが出ていない事を察して無理に引き留めようとはしなかった。

「ブライグさん！ 問題が起きたわ」

リザは開口一番に言った。

「……問題？ 兎に角、中へ入れ2人とも」

リザとローベルグは、帰城途中の出来事をつまびらかに語りエレイズ軍も同じ状況に陥ったがセフィーロの活躍で乗り切った事を伝えた。

「成る程ね。確かに問題だ。偽ウォーレンを仕立てても、戦場に行けばばれる。それに、あいつの力が無いと相当に厳しい事になるぞ。エレイズ嬢やラファインが優秀なのは確かだが、ドラゴン使いつてのはいるだけで敵味方問わず、影響が全く違う」

副官2人は大きく頷いた。若いリザであるが、気が強い事も幸いして指揮は上手い方だしローベルグという軍師もいる。実際、ウォーレンが不在であっても大抵の事は乗り切れる軍なのだ。……しかし、今回想定されている大規模な戦いとなると別だ。また、反閻魔法を完全に扱える人物としてもウォーレンは重要なのだ。

「ラファイン軍の方はどうした？」

「ライト・ピジョンを送りました。もうすぐ戻ってくるでしょうが、あそこにはレイルがいますし。ラファイン大將軍も、大貴族のご子息ですから剣術を幼少から習っています。恐らく、退けたかと。向こうの内では一番の実力者はこっちに向けられたようですね」

ブライグは頷いた。

「向こうも、よく解ってるようだな。3人の大將軍の内、最優先で

除くべきは誰か」

「取り敢えず、3軍で集まって話したほうがいいわね」

リザが言った時、丁度、ローベルグのライト・ピジョンが戻ってきて殆ど同時に誰のものは解らないがライト・バットが現れた。

「ライト・バットの使い手なんていたっけ？」

リザが首を傾げると、ライト・バットから情報が伝えられる。

『初めまして。エレイズ軍情報部のシュウといいます。
ウォーレン大將軍の件について、話し合いの場を持つことをエレイズ軍は提案致します』

「ラファイン大將軍も同じ意見みたいね」

リザが手紙を見て言った。

「ラファイン軍はやはり、被害なしか？」

「そうみたいです」

ブライグは頷いた。

「ベル、直ぐにイエスの返事と会議の場所については、3つの城の中間地点に当たるドルシア通りを提案しろ。あそこに、俺の視認不可魔法の実験に使っている建物がある。そこを使える」

「了解しました」

*

「エレイズ様が、俺も来るようにとの事だから。しばらく、王子様をよろしくねフレア」

「うん」

緊張感を持ってフレアは頷いた。まさか、ウォーレンが連れ去られるなどという事態が起きるとは誰が想定しただろうか……。

そこへ、ジェイドが入ってくる。手に持った何かをヨーゼフへ渡した。

「今日にでも、事が起こる可能性が出て来ました。こちらの動きやすい服装へお着替えになっておいってください」

「解った」

ヨーゼフは慌てもせず受け取る。誰の手も必要とせず、さつさと自力で着替え始める王族に色々な貴族を見てきたシュウは感心してしまった。

『単なる貴族だって一人で着替えも出来ない奴がいるのに』

「フレアはいつでも戦うつもりで。クーファとも一緒にいたほうがいい」

「解りました。ジェイドさんは……?」

「僕はセバスチャン隊長に呼び戻された。そちらの仕事をする」

そこへ、ヨナも入ってきた。

「この執務室に結界を張ります。ヨーゼフ様とフレア、クーファにはその中にいて頂きます。フレア、何か必要なものはありますか？閉めきつてしまいますが」

「大丈夫……だと思っています」

ヨナは頷く。

「ヨーゼフ様、私も大將軍達のところへ参ります」

「うん、解った……」

流石の気丈な王子も、長年自らの傍らにいて守ってくれていたヨナがいなくなる事には不安を覚えたようだがそれを隠すようにしつかりと頷く。既に着替え終わった彼は、頑丈な生地で出来た長いズボンに厚手のシャツ、それから剣帯という格好になっていた。

「よいですか、あなたが戦わぬのが一番なのですよ」

「解ってるさ」

ヨナはもう一度念を押すようにヨーゼフを見ると一礼して、部屋を後にした。それにジェイドも続く。

「フレア」

シウウは一瞬躊躇ったようだが、やがてにっこりする。

「無理しないでよ」

よく笑うシウウの、初めて見せる種類の笑顔でそれが何を意味していたのかフレアには解らなかった。ただ、彼女がもしも振り返ったならちよつと顔をしかめたヨーゼフが目に入った事だろう。

「おい、どう思う?」

クーファはフレアとヨーゼフ、どちらにともなく言った。

「何について?」

「全部だよ、全部。ウォーレン連行から今後の事まで」

2人とも、黙りこくつた。ここ暫く、この部屋の人数が3人（クーファを加えれば4）を割る事は無かったし、人がいれば必ずひつきりなしに考えが述べられたり対策が講じられていた。だが、今は氣味が悪いほどに静かになってしまった。

「相手の狙いが、大將軍を全て潰す事だったら……エレイズ大將軍とラファイン大將軍はどうしようというのかな。2人の軍にはそれぞれ、数こそ多くはないけど魔法以外にも長けた高位軍人がいる。ウォーレン大將軍と同じ状況には追い込めないね。

だとすると、より強力でタチの悪い魔法が持ち出されるのだと思うけど」

これも独白するようにヨーゼフが言う。

「……少人数で、集まったりして大丈夫なんでしょうか」

「そこは、ブライグさんを信用するしかないね。
ねえ、いつだと思う？ 彼らが取りかかるのは」

「もうすぐだろうな」

クーファは即答する。

「ヨーゼフよお、王の説得は本当に出来ねえのか？ ウラディスと
ダグラスが王城内立ち入り禁止になれば随分と違うぜ」

「……やってみようか」

ヨーゼフは、半ば諦めた表情だったがそう答えて立ち上がった。

「付いてきて」

「おう」

「はい」

話を聞かないにもほどがある！

「失礼します、父上」

ヨーゼフが取り次ぎもせずに入室すると、国王はさぞかし迷惑そうな顔で息子を見やった。

「何用だ。取り次ぎもない上に、その格好は……。その年になって傭兵の真似事か」

だが、ヨーゼフは一切ひるまない。

「重大なお話があります、父上」

「それは誰だ」

フレアを見て、更に訝しげな表情をする。騎士服を着てはいるが、鎧を纏わず、剣も持たぬ軽装は余りにも王の御前には不十分な格好であった。

「僕の護衛です。一度、対面なさったはずですよ。それはともかく。父上は、我が国に謀反を企む輩がいるとお考えになった事はおありですか」

「巫山戯た事を。何故、この安定した国内情勢で謀反などが起きねばならん。飢餓を訴える地域も無ければ、貧困に喘ぐ地域もない」

「人の野心というものは、そうやって割り切れるものではありませんよ」

「貴様は私に説教をしにきたのか！」

気の短い王は、かっと目を見開いて声を上げた。だが、それはヨ―ゼフはおるかフレアでさえ恐ろしがらせるには及ばなかった。その様子が更に王の機嫌を損ねたようだ。

「で、何が言いたい」

これ以上は無いほどの無関心さをもって、一応問い返してきた。

「では、率直に申し上げます。

我が国には、謀反を企む重臣達があります。それらはこの10年の間に四方へ手を広げ、今ではこの王城を占拠する事さえ夢物語ではないほどに大規模な集団となりました。首謀者の名は」

「くだらんっ！」

「父上、僕は遊びのつもりで申し上げているではありません」

「貴様などに付き合っているヒマはない、下がれ、馬鹿者っ！　しばらく顔も見とうないわっ」

「言っただでしょ？」

「何ですかアレ！　私、あつたまきました！」

完全に呆れ返っているヨーゼフ、憤慨するフレア。無言で腕を組むクーファ。

「悪いが、あれは殺されてしかるべき王かもな。ヨーゼフ、お前の父ちゃんはや」

「解ってる」

「でも、何であそこまで……」

「出てくる名前に心当たりがあつたからでしょ？」

フレアは目を丸くしてしまった。

「じゃあ、何で!？」

「あの人は、ダグラス宰相を重用して何でも彼の言うようにやってきた。その彼が謀反の首謀者の一人だと、能無しで引きこもりの息子に告発されたら国王の立場がない」

「立場なんて……」

「まあ、恐らく、これから自力でダグラスについて探り始めるさ。きっと間に合わないけどね」

ヨーゼフの目の色は暗い。それが、例え情は薄いといっても唯一の血を分けた肉親がこれから無惨な最期を遂げる予感による悲しみを映しているのか、自分の言葉が最後まで受け入れられなかった苛立ちを映しているのかは解らない。

「僕もねえ、どこかであの人が殺されてしまえばいいと思っていたんだよ。僕を息子として扱ってくれない恨みとかじゃなくて……。遠くにいるようでもさ、やっぱり親子だからかな。等身大のあの人が見えるんだ」

「そんな……」

フレアにしてみれば、全くその気持ちは判らない。片や、父が死んだ方がいいと思っていたと吐露した者、片や死んだ父の無念を晴らすと、そしてその事実関係を明らかにしようとする者。

「僕も尊敬する父親が欲しかったなア……。フレア、君が羨ましい」
そう言ったヨーゼフは、ひどく孤独に見えた。

*

「エレイズ、考え直してくれ！ 危険だっ」

珍しいほどに声を大きくするラファイン。だが、他の誰もそれに驚きはしない。当然の反応なのだ。

「どう考えても一番危険なのは、このままウォーレンを放っておくことだ。」

あいつが死んでもいいの？」

「それは……。だからといって、一人で乗り込むなど、莫迦のする事だ！ 向こうの狙いはそれなのかもしれないぞ！」

「じゃあどうしろと？ 全軍を率いて攻め込むか？ そんな事した

ら、王都がから空きになる。魔法使いの戦争は確かに、やり方によつては人数差をひっくり返せるが、それは普通の戦で、彼我の差が圧倒的な場合だけだ。また同じ魔具を使われたらどうする？」

延々と、この押し問答を繰り返している。

単身、ウォーレンを助けに行くといつて聞かないエレイズ。それを無謀と押しとどめようとするラファイン。どちらも、うっかりすれば領きたくなる理論を持っている。

「なら」

セフィーロが口を開いた事に誰もが驚く。

「俺がエレイズ様と共に行きます。軍の方は、リアに任せる事も出来ますし」

「1人が2人になったからといって！」

「落ち着いてくださいよ、ラファイン様」

フェーンが今にも立ち上がりらんばかりの、大將軍の肩を軽く叩いた。

「最善かもしれないですよ？」

「フェーンっ……」

「魔法、剣術それぞれの面から見てこの場で最強はこちらのお2人です。ウラデイスも恐らく、王都を離れる事はしないでしょう。ライアルトが気になりますが、そこはセフィーロさんが何とかするで

しょ？」

「ああ」

セフィーロは即答した。

「そして、見事ウォーレン大將軍が救出されたなら良いじゃないですか。もしも、お三方が戻る前に大規模な戦いが始まってもセバスチャンさんが見当をつけた場所に捕らわれているのであれば間に合います。ウォーレン大將軍のドラゴンは、フライドラゴンでしたよね？」

リザが頷いた。

「ドラゴン種では、ライト・ドラゴンに次ぐスピード。3人くらい背中に軽く乗せられるしね」

ラファインは、暫く考え込んでいたが、顔を上げてエレイズを見た。そして、隣のセフィーロに目を移す。全く、そっくりな目をしていた。持論を譲る気は無いと見える。このまま問答を続けても、得られるものはなく悪戯に時間を消費するだけのようだ。

「解った。……ただし、命を掛けなければ突破できない状況であった場合は戻ってきてくれ」

「ありがとう、ラファイン。じゃあリア、全部任せた」

「アッバウトな司令だぜ。ま、いいやな。終わる前に戻ってこいよな。エレイズ軍大勝利の場にエレイズがいなければしまらねえ」

「そしたら、リア軍に変更かな」

「冗談！」

危機感のない、日常会話のようなやり取りに全員が大丈夫そうだと
思わざるをえなかった。

ウォーレン救出作戦開始。……これ、作戦？

エレイズとセフィーロが早々に出て行くと、続きの話が始まった。

「私は、各軍の枠を超えて情報系魔法を得意とする者を集め、情報網を整備する事を提案しますわ」

ロザリアが言った。

「賛成です」

と、ローベルグ。

「こちら側が、圧倒的に人数が少ない状態で戦う事になるでしょうから。どれだけ情報が早く伝えられるかが勝負の分かれ目になるかと」

「そついう事」

ロザリアはにつこりしてから、エレイズ軍情報部のシュウ以外は見たことがない表情で続ける。

「指揮は私が執りますわ」

「ああ、適任だな」

必然的に、この場で一番発言権が大きくなったラファインが頷いた。

「フェーン、何人出せる？」

「そうですね……普段、斥候隊として情報系魔法を重視している者達が150名ほど。ロザリアさん、どのくらい必要ですか？」

「エレイズ軍の情報部隊は200名いるから……50名貸して頂きたいわ」

「解りました。この後すぐ選びます」

「では、ウォーレン軍からも同じだけ出しますね。あ、僕も加わりますので」

と、ローベルグ。

「それでいいわ。ダークヒル城は戦地から恐らく、遠すぎますから。ラファイン大將軍、ウォルターナ城の一角を本部に貸していただけますか」

「勿論だ」

*

エレイズとセフィーロは、王都の南に向かって馬を休まず駆け回っている。リアの確認、セバスチャンの予測に従って彼らは王都リールを出てずっと南下したところにあるネルヴァという土地を目指していた。人口の極めて少ない地域であり、元より評判の良い場所ではない。盗賊や、不法組織が蔓延っているようなところ。

「付き合わせてごめんね」

不意にエレイズが言ったのに対して、セフィーロは表情を変えずに

「俺はエレイズ様に剣を捧げたのですから」

とだけ答えた。魔法中心の国家であるレミユエルでは余り見られない、剣の誓い。相手から誓いを無効にされない限り命尽きるまで、その相手に従い続けるという、剣士が何よりも重んずるべき神聖な誓いである。

「絶対に死なないでね」

「承知致しました」

魔法使いを乗せた黒い馬と、剣士を乗せた白い馬はひたすらに南へ下る。

*

「俺をどうするつもりなんだ、え？」

「両手を縛られ、足もくくられてそんなに強気な人間を初めて見たよ」

ライアルトは、檻の中のウォーレンを呆れたように見た。

「どうするつもりか、……ね。あんたを殺せとは言われていないけど、大人しくしなかったら容赦するとも言われている。」

指をくわえて、全て終わるのを待っているといい。全て片付いた暁には、すっかり洗脳されてウラディスの腹心にでもなっているだろうさ」

大いに顔をしかめたウォーレン。

「俺が簡単に洗脳されると思うか？」

「元気な状態なら。魔力を封じ、僕が気絶させてしまえばあんたを洗脳なんて赤子の手を捻るようなものさ。対象が可愛くないぶん、更に容易い」

日頃、見下ろされる事に慣れないウォーレンだが今は自分は床から立ち上がる事も許されず、相手は優雅に立ちはだかっているわけで、そして更に、（認めたくなかったが）相手の方がレベルの高い容姿かもしれない。それらがウォーレンのはらわたを煮えくりかえらせるのだが、打つ手はない。

「まあ、姫君と騎士が助けに来るかもしれないけどね」

「……！ エレイズとセフィーロか！？ まさかつ」

「そんなに人望無い？」

「いちいち腹立つヤローだ」

「もし来たとしても、セフィーロは俺が倒すしエレイズについても対策がある。未来の傀儡が増えるだけだな」

そして、それでもまだ足りぬのかウォーレンの神経を逆撫でする発

言を追加する。

「まあ、エレイズが噂通り僕と並べる美貌を持つのなら。扱いは少し変えてあげてもいいけどね」

「こらっ！ てめえ、ただじゃおかねえぞっ！ 俺でさえ、副官が怖くて指一本も触れてないのにつ」

「やだなあ。あんたがそんなに怒ると、どんどんそうしたくなっちゃうじゃないか」

「もしも、これから先もこの2人の関係が続くのなら一生に一度の犬猿の仲と呼べる関係となるだろう。」

*

「どのくらい掛かったかな」

「3時間と経ってはいません。まだ無事と考えてよいかと」

エレイズとセフィーロは目的地に辿り着いた。

それは、古い城塞だった。灰色の石で作られた、低めの城で窓はかなり少なく鉄の尖った柵で覆われているから城塞というより牢獄にもみえる。周囲は鬱蒼とした森が広がっており、道も殆ど整備されていない。

「ロスタリア廃城か。趣味が良いとはいえないな」

エレイズはさっと城を見上げた。

100年以上前、大火災で城に住む者は皆死亡してそれ以来うち捨てられていた呪いの噂さえあるような城である。

「ちょっと下がって。強行突破するから」

エレイズはそう言って、両手を突き出して呪文を唱える。詠唱の直後、突然鉄の門の一部が何百年分も年を経たようにぼろぼろと静かに崩れた。これなら、いたずらに中の者を呼び出す事なく済む。この呪文は、物質だけでなく目に見えぬ結界も崩壊させるので何の躊躇いもなく2人はさっさとロスタリア廃城の荒れ果てた庭園に足を踏み入れた。

「ウォーレンの魔力は封じられてるか、結界の中にいるみたいだなア……」

「どうなさいますか」

エレイズは、セフィーロの問いに対して、にっこりと笑った。

「誰かに訊こう」

当然、穩便にはない。

それを承知した上で、何でも無さそうに頷いたセフィーロ。

中はかなり、肌寒く、そして薄暗い。まだ日中の為、数少ない窓から外の光が差し込んでいるがそれを補う人工的な光が無いのだ。エントランスホールだったらしい、その場所が高い天井も大理石の床も崩れかけている。日常的に使っているのではなく、今回、ウォーレンを閉じ込める為に用意した場所なのかもしれない。

「何者っ!!」

「見付けた」

普通「見付かった」なのだが、エレイズは微笑んでそう言うしセフイーロは全く慌てないので飛び出してきた見張りらしい男3人は立ち止まった。

「……何者だ」

もしや、雇い主の関係の者か……とさえ思い始めてもう一度聞き返してきた男達。エレイズとセフイーロは目を合わせて、声を出さずに会話する。

『どうしよっか』

『完全に敵とは思っていないようですね』

『フレンドリーに近付いて2人打ち倒して、1人案内用に生け捕り?』

『承知致しました』

「おい、聞いてるのか」

3人がいよいよ困っていると、エレイズは一撃必殺の笑顔を浮かべた。

「やあ、こんにちは。おつとめご苦労様」

「え……」

そのまま近付く。

「あいつは大人しくしてるかな」

3人は顔を見合わせた。

「あんたらは……ウラデイス大將軍の……」

「そうそう。様子を見に来たんだよね。ウラデイス大將軍の命令でさ」

そうしている内に、セフィーロの間合いに入った。

「!？」

その途端、セフィーロは素早く踏み出した。一太刀目で、正面の男を肩から薙ぎ払い、戸惑っている内に隣の者の頭を峰打ちして気絶させる。最後の一人はエレイズの右手から放たれた氷の槍で心臓を一突きにされる。

「顔に描いてある通り、下っ端だったねえ。入り口の見張りこそ、手を抜かないべきなのに」

「ええ」

セフィーロは気絶した男を後ろ手に縛り上げると、揺り起こした。

「うっ……」

目を覚ましたところで、失態に気が付いたようだ。

「き、貴様らっ、敵かつ」

「気付くのが遅かったね。ウォーレンはどこ」

「けっ、言つもんか」

強気に言い返した男だが、首に当てられた剣とそれを持つ男の目を見て考えを変えた。

『こいつは……』

敵に回せば、恐らく一番恐ろしい人格タイプである、これでも数々の恐ろしい者に雇われてきた男は思った。自分の意思より優先させるものを持っていて、その命令ならば生まれたての赤子を殺すことも厭わない人格だ。そして、見たところその優先させるものは隣で此の世のものとは思えない美しい笑みを浮かべている女だろう。

「……地下。廊下を西に進んで、一番奥にある独房」

「ありがと。セフィーロ？」

「はい」

『こっ……ころ……殺さないでくれっ！！！！！！』

本当に生命の危機を感じた時、声が出なくなる事を男は知った。

臨機応変って、絶対大事！

「他に誰か潜んでる？」

ぐるぐるに縛り上げられて、しょんぼり気落ちした様子で侵入者2人を案内している男にエレイズは問いかけた。

「ライアルトさんがいますから。表の見張りの俺達だけで」

「ほんと？」

「ほ、ほんとつす！」

『命が掛かってんだから嘔吐くわけねえだろうがっ！
くっそう、あんまりにも美人だから油断した』

今更しても仕方がない後悔を延々と心の奥でしている。この図を見れば、悪党はエレイズとセフィーロだと思われる事だろう。

地下の階段を降りると、外の光が届かない場所なので、初めて人工的な光が現れた。ぽつん、ぽつんと必要最低限の燭台が吊り下げられている。細い通路は、そこがもう牢獄のような印象であった。

「その奥に……」

もはや可哀想なくらい元気の無い男が言った時。反対側から人影が颯爽と現れた。その堂々たる態度と美しい姿はさながら、地下通路に吹くはずのない風が吹き抜けたようだった。

「お客か」

「ラッ……ライアルトさん……」

「お前は見張りの意味を解ってる？ 侵入者を案内するのが見張りの役目だ？」

「い……いえ、あの」

次に起こった事が理解できたのはセフィーロだけだった。

男とエレイズにとっては、気付けば、男の首が床に転がっていた。

「ようこそ、エレイズ大將軍、セフィーロ君」

「……」

剣を一旦しまったライアルトは、馬鹿丁寧に礼をした。今は金糸のような髪を頭頂部で一纏めにしている。暗がりのため、外で見るよりも更に美しく、女性じみて見える。

「あんたがライアルト、か。ウォーレンは元気？」

「とても。早く、彼が絶望して命乞いする惨めな姿が見たいんだけどね」

エレイズに一步近付いたライアルト。その間にセフィーロがすかさず入る。

「俺が止めておきます。ウォーレン大將軍を、早く」

「そう簡単にいくかな」

目にも留まらぬ早さで抜刀したライアルトが、セフィーロを無視してエレイズに斬りかかるが、それをセフィーロは見切って止める。

「へえ」

ライアルトの関心はすっかり移ったようだ。もう、そこをエレイズが駆け抜けて行っても何処吹く風であった。

「ウォーレン！」

「エレイズ！？ おい、本当に……何で！」

「それは後」

エレイズは門を壊したのと同じ魔法を使って、牢を壊した。

「セフィーロが時間を稼いでる。逃げるよ」

「あ、ああ……ちょっとコレ取ってくれ」

エレイズが頷いて、ウォーレンの拘束具を外しに掛かった。その瞬間、エレイズは牢の中に踏み込んだ事を大いに後悔した。振り向く

間もなく、背後で罨が作動したらしい。柵が天井から降りて

床が落下した。

「ああ、罨が作動した。この音、聞こえるかい？」

「……罨だと？」

剣がぶつかり合って、火花が散っている。それでもライアルトは背後に耳を傾ける余裕がなかった。

「うん。牢の中に複数名が入ると作動するシステムだね。地下の可愛いペットの部屋に落下する」

「魔獣か」

「闇属性のね」

「お前も魔法を？」

「まさか！ 俺には魔法なんて必要ない。君もそうなんじゃないか？」

「さあな」

今のところ、均衡状態が保たれていた。まだ互いの力量を掴みかねており、どちらにしても攻めあぐねている。

*

「ラファイン大將軍ったら、落ち着いてくださいよ」

フェーンは、会議を終えてから何度、そう言って敬愛する大將軍の肩を叩いたか解らない。

「行くのに3時間は掛かるんですし、見張りやらが手間を掛けさせるに決まってるじゃないですか。どうしたって5、6時間は掛かりますよ」

「しかし……」。

いや、そうだな。私が余計な心配をしても仕方がない」

ようやく、ラファインはそう言って、全ての心配事を一時頭から取り除くように深く息を吐いた。

「レイル」

「はい」

「出陣準備はどうなっている？」

「完了しました。いつでも動けるよう、待機させてあります」

頷いたラファイン。

上層部の意見は一致している。ウォーレンが攫われ、それを助けるためエレイズが王都を離れるという事はダグラス達は想定しているだろうと。だから、数時間の内に大規模な動きを見せるはずだと。王都占拠をするには、これ以上はないという程の好機が今なのだから。

ラファイン軍は全軍、隊伍を整えて広大なウォルターナ城敷地内の地下に待機していてエレイズ軍も密かに王都を目指して動いている。また、200名程を王城へ先発隊として潜入させている。……方法については、ラファインは聞いていないが、恐らく呆れて溜息を吐きたくなるような方法をとったのだと予想していた。ウォーレン軍も同じく。

「とうとうね。連絡を回して！」

ロザリアの言葉で情報部隊は動き始める。

その内数名は、同じ城内のラファインのところへ走った。

「ラファイン大將軍！」

「動きがあつたか」

すぐさま問い返したラファインに、情報部隊の者は頷く。

「ロータス、ヴォルグ、ハワードの軍が動き始めました。王城前広場へ向かっています。ウラディス軍にはまだ動きが見られません」

「数は」

「ロータス軍三千、ヴォルグ軍二千五百、ハワード軍同じく二千五百。計八千です」

「迎え撃つ。王城組に連絡は」

「既に」

「解った。レイル、フェーン！」

副官の2人は心得たように頷き、軍勢の元へ向かう。

*

「……始まったって」

フレアにも、情報部隊の連絡が入った。彼らは今、余程の事が無い限り外へ逃れるよりも寧ろ安全な結界の中にいる。

「ここにいて、大丈夫かな。ヨナの結界を疑う訳じゃないけど……。僕がここにいる事は、相手方も判ってる。強行突破された時に、身動きが取りづらいよね」

ヨーゼフの言葉に、フレアとクーファは顔を見合わせた。それは、2人にとっては特に問題である。クーファの攻撃は明らかに室内向

きではないし、フレアが最も得意とするのも炎の魔法。敵と共に蒸し焼きになりかねない。

「それから……父上はどうしたかな」

「あ……」

軍勢が動き出したのだから、国王の命を奪うならもうすぐ……もしくは既に。

「……参謀長には出るなって言われたけど……。臨機応変って母さんも言ってた！ 外に出た方が良いと思います、ヨーゼフ様」

「そうだね……うん」

「陛下の事は、私が見てきます！ クーファ、ヨーゼフ様をよろしくね」

フレアは答えを聞く間もなく、部屋を飛び出した。

「クーファ……」

王宮の方を見て、少し躊躇うヨーゼフにクーファはきっぱりと言う。

「王は無事なら、フレアが連れてくる！ 俺達は外へ出るぞ。裏手には恐らく、まだ兵が回ってねえ。王城の敷地から出て、王都も出ちまったほうが恐らく良い」

「解った」

ヨーゼフは様々な未練を振り払うように強く頷くと、クーファに続いた。

レミュエル王城は、正門の先に広大な庭園が広がって、その奥に中央宮と呼ばれる建物がある。中央宮は三つに分けられており、正門からは三つの入り口を見る事が出来る。その、一番大きく豪華な門が王宮……王の執務室から謁見室、主賓用室、そして寝室などがある部分。右手側が高位武官の宿舎となっており、そこから渡り廊下で王子宮へと繋がっている。左手側は高位文官の宿舎兼仕事場となっており、そこと高位武官宿舎、王子宮二階部分が王宮へと繋がっている。

フレアは王子宮の二階にある渡り廊下から、一気に王宮に入った。もはや、訝しんだり驚いたりはいらないが、普段はそこに立っている警備員がいない。取り次ぎを行う文官もいない。

「失礼致します！」

大声で呼びかけ、返事を待たずに王の執務室への扉を開くと……。

「遅かった」

玉座の崩壊と開戦。

その半時間ほど前。

「失礼致します」

恭しい一礼をして、王の執務室に入ったのはダグラス。王に呼び立てられたのだ。

「ヨーゼフがおかしな事を言いおってな」

「王子様が、で御座いますか」

ダグラスは特に表情を変えていない。

「この国には、謀反を企てている者があると」

「それはまた」

「わしは少し考えたのだ。この国に、謀反を企て、そして成功させる程の力を集められる者は誰かと。平民の大將軍2人だが、あれはそのような方向での野心があるとは思えん。また、ラファインは何代も前からレミユエル王家に忠誠を誓ってきた一族。そのような事を考えはしまい……それでだ」

王は、鋭くダグラスを睨め付けた。

「疑うべきとすれば、お前だ。ダグラス」

「失礼でなければ、何故そのようなお考えを持たれるにあたったかお聞かせくださいませぬか、陛下」

「簡単な話だ。お前は、ダグラス、わしよりも人望があるといって差し支えない。これくらいわしにも解っているつもりだ」

「そのような事を。わたくしめは陛下の忠実な僕に過ぎませぬ」

あまり、心がこもっていない事に自分の考えを述べる事に集中していた王は気付かない。

「お前が、まだ宰相としての任命を受ける前から事を進めていたとしたら？ 宰相として登用される事もお前の考えの内であつたら？

わしはとんだ間抜けだ」

黙って、観察するような目で王を見上げたダグラス。その目には、何かの思いつきとその思いつきへの自己肯定が映った。

「だから、ダグラス。

わしの考えが当たっているのであれば、思い直すのだ。わしはお前の能力を重宝しておるし、お前の望むものは何でも与える事が出来る。

何が望みだ？ 爵位か、金か、武力か、それとも……」

「陛下」

ダグラスは、遮り、立ち上がった。

「何でもと、そう仰るなら。1つ、頂戴しましょう」

「言ってみるがいい」

そして。あまりに突然であった。

一気に玉座に突進したダグラスの持つ短剣が王の喉もとを切り裂いた。

「はがつ……ダ……グラ……」

「申し遅れました。
お命を頂戴します。そして、確かに受け取りました」

もはや、王城にダグラスの敵は片手で数えるほどしかない。それに、全てが今日、動き出すのだ。証拠の隠蔽など、ただの時間と労力の無駄であるから彼は無造作にたった今、長年の主、この国の最高責任者の命を奪った短剣を投げ捨てると死体には一瞥もせずに退室した。

フレアが駆け込んだ時には、完全に王は冷たい屍をさらしていた。一瞬、躊躇ったが、これに構っている時間の余裕はない。手を合わせる、未練無くヨーゼフとクーファの元へ走る。耳には、既に戦いの音が届いている。とうとう、最後の時が近付いてきたのだ。数々の準備の終着点、そしてもしかするとフレアの望み　アークの死の真相を知ること　の終着点。

*

「ロザリア隊長！」

シウウが情報部本部に駆け込む。

「ラルトウール軍の数が想定より少ない事が解りました。恐らく、幾らかを裏に回して直接王子宮を叩こうという考えかと」

「……そうね。ラルトウール軍は比較的優秀なものね。解った、フレアと王城潜伏組のクロウに連絡して」

「了解しました」

「ウラデイス軍が見えないな」

ラファインの呟き。

「多分、時間をおいてこの城門前広場が混戦状態になった頃投入し、王城へ直接向けるのだと思います。」

ラファイン大將軍、ウォーレン軍を左翼に展開させておきます」

「ローベルグ……そうか、解った」

馬を寄せてきたローベルグに頷いたラファイン。ローベルグはリザの元へ駆け戻る。徐々にウォーレン軍が動き始めた。バーレーン軍がそれを拒もうと動き始めた事から、恐らくローベルグの読みは正しいと見える。

まだ戦場は、混戦とはいえない。互いに隊列を殆ど崩さぬまま、前衛達が探り合うように魔法を打ちあっている。ただ、今のところラファイン側の怪我人はともかく死人は一切出ていない。完全に相手のバリアを破る攻撃を出来る兵が今のところ動いていないようだ。数ではラファイン達が不利であるが、戦力とすれば大分逆転している。これを相手方が予想していない訳はないから、どういう手法に出てくるのが問題だ。気は抜けない。

右翼側では、リア指揮のエレイズ軍が猛攻を見せている。その先頭に立つのが、他でもない指揮官のリアである。燃え上がるたてがみのフレイム・ホースに跨り、相手に当たれば切り傷、刺し傷だけでなく火傷まで負わせる炎の槍を存分に振るっている。それを迎え撃っているのはトレヴァーン軍である。

「くそっ、聞いていないぞ。あの副官がここまで出来るなどと……！」

指揮官、ロータスはうろたえている。

エレイズが彼がどうあがいても手が届かない實力を持っているのは知っている。セフィーロが魔法に優れなくともそれを補って余りある剣の實力を持っているのも知っていた。だが、リアについては殆ど何も知らなかった。数度見かけたが、明らかに緊張感の無い態度、がりがりの体、やる気の無さそうな目から實力ではなくエレイズと親しいから副官を務めているものだと思っていた。だから、エレイズ軍ならば……エレイズ当人とセフィーロのいないエレイズ軍ならば自軍でも止められると思っていたというのに。どんな、先陣が大人に向かっていく子供のように蹴散らされていく。

そろそろ、作戦展開を変更する伝令を出すべきなのだが、この状況で、全力により炎の騎士を止めに掛ければ隊列が乱れて隙となる。あくまで、自然と乱戦に持ち込んでいくのが彼らの目標なのだ。こちらから動いて、弱みを見せても仕方がない。それに、今はまだウラディス軍の準備が整っていないはずである。今、理想の展開図となっても何も意味がない。

*

すっかり空になった渡り廊下を駆け抜け、王子宮に渡ったフレアはそのまま1階へ駆け下りる。ここまで来ると、意識を集中させずとも既に魔力漏洩防止の魔具を外したクーファの魔力の位置が手に取るように解る。

『まだ……敵とは鉢合わせてないみたい……』

戦いになってれば、もっと荒々しい魔力波が感じられるはずだ。恐らく、クーファとヨーゼフは順調に王子宮を出たのだろう。願わくば、そのまま薔薇園を突っ切り、馬場に行って適当な馬にでも乗って王城を、いや王都をしばしヨーゼフが離れてくれればいい。

だが、そうはいかないようだ。

「クーフア、ヨーゼフ様っ！」

追いついたフレアの目には、どんどん大きく目に映るようになってきた軍勢が見えた。

「フレア……父上は駄目だったの？」

責める調子は全く無い。無感動とさえ感じられる。単なる確認という口調だ。

「はい……。あたしが謁見室に入った時にはもう」

細かい話をしている場合ではなさそうだ。2個中隊くらいだろうか。大軍ではないが、城の裏手にこんなにも多くの兵が回ってきているとは思わなかった。恐らく、かなり前から準備しておいた兵なのだろう。

「あの紋章は、ラルトゥール伯爵の軍だ。トレヴァーン、バーレーン軍に比べれば随分と実力の高い軍だね」

ヨーゼフの説明を聞くが、フレアもクーフアもひるみはしない。

「クーファ、いけそう?。」

「まっかせとけ!。」

フレアは頷き、クーファと共にヨーゼフの前に並ぶ。

「早く潰して逃れるぞ」

「うん。ヨーゼフ様、大丈夫なので下がっていてくださいね」

白馬の王子？ 古い、古い。今時、一角獣へユニコーン。

軍勢との距離がある程度縮まったところで、相手方が一度止まる。

「エレイズ軍のフレアだな」

話しかけられるとは……また、顔が知れているとは思わず、フレアは驚いて相手を見た。ラルトゥール伯爵だ。若いが、十分にフレアの嫌う貴族然とした空気を纏っている。フレアの中では高貴な空気（例えばラファイン）と、貴族然とした空気は別物である。前者は美点と認めるが、後者は大嫌いである。

「あんた達と話す事なんてない」

平民の小娘に突っぱねられ、ハワード・ラルトゥールの自尊心は十分に傷ついたようだ。きつく顔をしかめた。

「全く、平民の娘はしつけがなっていないな。親の顔が見てみたいものだ」

「黙りなさい」

クーファとヨーゼフまで驚いたほど、鋭い声だった。

無礼と言われようと、平民と見下されようと構わない。だが、親……特に父親についてがどんな形であろうと、彼らの口から出るのは我慢ならなかった。事実上であろうと、彼らはウラディス……アイクを殺したと思われる者……に従っているのだから。

ラルトウールも、ただの都合上出世しただけの小娘ではないと悟ったらしい。さっきまでの嘲り半分の油断を捨てたように面を引き締める。

「気に障ったようなら謝ろう。」

とりあえず……こちらの話を聞いてもらいたい」

「……いいわ」

「簡単に言おう。こちらに寝返るつもりはないか。」

そうして、王子をこちらへ引き渡してくれば君や君が望む者には危害を加えないようにしよう。更に、戦いが終わった暁には王位に就くはずのウラデイス殿が重役を与えてくれるだろう」

フレアは、クスリと笑った。

「なっ……何がおかしい」

「そんな事で、あたしがあなた達の味方につくと思ってるの？ どうせ、あなた達がエレイズ様やウォーレン大將軍、ラファイン大將軍たちを斃せる訳がないじゃない。ウラデイスが王位？ 莫迦な事言わないでよね。卑劣な人殺しが国王になって、その下で働くなんて冗談じゃないっ！」

それと、もう1つ大事なのが……あたしが『望む者』の中にしっかりヨーゼフ様が入ってるって事よ。ここは譲らないわ。

つまり、却下よ。賛成よね、クーファ？」

「よく言っただぜ、フレアっ！」

てめえら、最後の最後までずるがしこく立ち回ろうとしやがって！

俺様が跡形無く燃やし尽くしてやるぜ！」

勢いよく応じたクーファは、上体を反らして息を吸い込む。フレアは巻き込まれぬよう、クーファの斜め後ろに立って、簡易バリアでヨーゼフを守る。召喚主であるフレアには影響がないが、それ以外の者にクーファの攻撃により発せられる魔力の余波は些かきついのだ。

そして――。

大慌てでバリアを張ったラルトゥール軍へ、クーファの炎が吹き付けられる。それは、この小さな蜥蜴と見間違いかねないドラゴンが発しているのがどうしても不思議な火力である。軍の正面をまるごと飲み込む規模、背後にいてもその熱風をバリアで防がなければ火傷をしかねない熱……。

「くそっ……」

流石にラルトゥールは、きちんと身を守ったらしいが下位召喚士の紋章をつけた者達は全滅であった。炭のようになっていた者もあれば、皮膚が焼けただれて馬から転げ落ち、苦しんでいる者も多い。さながら、地獄絵図である。

ヨーゼフはこっそり目を伏せたが、フレアはもう殆ど動じなくなっていた。今は使命感と、ぶつけどころの解らない怒りに心中を満たされているというのも大きい。

「降参するべきなのは、あんたたちの方って解らない？」

フレアが言うと、悔しげにラルトゥール伯爵は齒がみした。

「……ウラデイスを頼るような真似はしなくなかった」

「……なに？」

予想通りとも言えるが、ラルトウールが詠唱を始めた魔法……闇魔法をフレアも知っていた。

「まずい！」

フレアがすかさず、詠唱破棄のともないスピードで魔法を発動させラルトウールの真下から炎の竜巻を発生させた。……だが、それに飲み込まれて傷ついたのは周囲の兵だけである。ラルトウールは……無事である。

「何か、魔具を身につけてやがるな」

クーファが悔しそうに言い、もっと直接的な攻撃に出る。

クーファの金色の目が真っ赤に染まると、ラルトウールの周辺の地面が割れ、溶岩のように溶け出した。

「うわあああッ」

「逃げるッ」

だが、これも混乱して逃げ出したのは他の兵だけである。相当に、防御力の高い魔具を身につけていると思われる。彼の足下だけは常日頃と変わらぬ、緑の芝が残っていた。

「……何の魔法」

こうなつては、相手の魔法が発動してからいかに素早く対応できるかという問題に尽きる。ヨーゼフに動かないようにもう一度念押しをして、フレアも一歩引き下がった時だ。

強烈な光が発せられた。

それと同時に、天を裂くような咆吼。それがラルトゥール、そして後ろの兵達の口から出ていると気付くのに時間が掛かってしまったほど、それは獣じみた咆吼である。次に、彼らの体が一瞬で巨大化し、鎧が弾け飛び、人の顔から狼、獅子、虎といった猛獣に近い頭に変わり果てる。腕などはびっしりと固い、これも獣のものらしい黒や濃い茶色の毛で覆われる。

「魔獣化の魔法だ……」

フレアは目を丸くしてしまった。禁術中の禁術である。この術は、目の前で起こっている出来事そのままに人が魔獣へと変化する術。この術の反対呪文はない。他人を魔獣化する魔術であれば、他人の魔獣化を解除する反対呪文も作れたのだが、フレア達を知るのはあくまでも自身を魔獣化する術への反対呪文だけなのだ。

「何で、周りの人まで……」

「どんなドーピングやってるか解らねえが。恐らく、呪文を改造したんだな。」

恐ろしい後遺症があるってのに間違いはないだろうに」

クーファはそう言う。

魔獣化と共に、体は凄まじく頑丈になり理性も吹き飛んだようだ。溶岩の上も平気で渡り、フレアやクーファに迫る。クーファが炎を吐いても、直接に当たった数体が焼け落ちるだけで余波を受けた者ものまでが、さっきのようにやられてくれるのではない。フレアが炎の竜巻で覆い尽くしても、無事なものは憎いほど平然としている。

「まずい……」

相手が少数ならば、クーファとフレアの力を持つてすればこの恐ろしい魔人達も怖くはない。だが、互いを盾にして何の恐れもなく向かってくる理性無き大軍が相手となると、さばききれない可能性がある。事実、少しずつ距離は無くなり、フレア達は後ろに下がりがれなくなってきた。

*

『クロウ隊長、聞こえますか』

王城裏、南側でラルトゥール軍の後続部隊を相手取っていたクロウの元へ、シュウのテレパスが届いた。

「ええ」

こちらは闇魔法や、闇の魔具を使う者はおらず殆どクロウ達の勝ちが決まったような状態である。

『出来るだけ早く、王宮裏、薔薇園北口に向かってください。状況の正確な確認は済んでいませんが、強力な闇魔法の気配が察知されました。あそこにはフレアとクーファ、王子様しかいません』

「わかりました」

クロウは素早く指示を出し、70名の部隊にその場を任せ、自身で残りを率いて言われなくとも解る、強大で禍々しい魔力の方へ向かう。

彼らは、王城潜入していた時のまま銀の王宮直属兵の鎧を身につけていたがしつかりとエレイズ軍の紋章を付けている。クロウの左側を走るのは、純白の一角獣^{ユニコーン}。Aランクの氷属性幻獣族である。馬よりも一回り小さい体で、額からは30センチは超える真っ直ぐな金色の角が生えている。

「あれ、一体……！」

クロウの右側で馬を駆らせていたサラは、思わず声を上げた。目に入る、魔人達。その強大な体の向こうにいるはずのフレア達の姿は、全く隠れてしまっている。それでも、クーファとフレアが次々に倒しているから数は減じているものの軽く100はいるようだ。

「サラ、指揮を一時、任せます。フレアに現状の説明をしてきますので」

「解りました」

クロウは使っていた白馬からユニコーンに飛び移る。小柄で痩せているクロウだから、馬より小さいユニコーンであっても問題はない。

「飛んでください」

クロウのどこまでも丁寧な命令に従い、ユニコーンは2、3メートル

ルの助走をつけると軽々飛び上がった。空中高く上がり、踏みしめる。その足下には氷の足場が現れては消え、を繰り返している。

「フレア！」

先に気付いたのはヨーゼフだった。

「援軍だ！ それに、あれって……」

「よかった！ え？」

頭上を見上げたフレアは言葉を失う。

『何て綺麗……じゃなくなつてっ！！』

物凄く実際のな怒りの爆発。

「フレア、久し振りですね。

ヨーゼフ王子殿下、ご無事で何よりです」

驚いている一同には一切構わず、素早く簡単な挨拶を済ませたクロウは背後を軽く見やる。

「この場合は、我々が引き受けます。現在、正門前ではラファイン大將軍を中心に連合軍と反乱軍の戦いが本格化しており、この後はウラデイス軍が増援として参戦するかヨーゼフ様のお命を狙って裏手から王城に向かってくるか、まだ判断できない状況です。ですから、一刻も早くあなた達には王城を離れて頂きたい。王妃宮側から抜けるのが、恐らく最も敵と鉢合わせる確率が低いでしょう」

「わ……解りました。あの」

フレアは、今はそれを気にしている場合でないというのは重々承知していたのだが 尋ねる。

「エレイズ様達は、大丈夫なんでしょうか」

「未だ、連絡が取れずにいます。……が、万が一、エレイズ様達間に合わぬ事があっても大勢に影響は無いとみえます。今は何よりも、王子様に無事、生き延びて頂くことです」

そこで、フレアははっとした。

「あの、国王陛下が亡くなった事は」

クロウは僅かに眉を上げただけだった。

「報告有り難うございます。全体に伝えましょう。では、より一層ヨーゼフ様が生き残られる事が重要になったわけです。フレア、よろしく頼みます」

「……はい」

クロウが一切、止め処なく喋ったので3分も経っていないだろう。だが、その間にもう後ろの戦いは一変していた。魔獣化した者達には、確かに悉く理性や目的意識が吹き飛んでいるようだ。血に飢えた獣のように、自らに仇なす多勢を撃破する事に、集中力を奪われている。

その、戦場から見逃されたフレア達のもとへ、先程クロウが使っていた馬が駆けてきた。相当に賢い馬のようだ。

「使ってください。今なら、脇を一気に通り抜けられるでしょう」

「解りました」

その馬はかなり大きな体であつたから、小柄なフレアとヨーゼフを乗せる事には何の問題もない。フレアの方が馬に乗り慣れているから、フレアが前で手綱を掴み、ヨーゼフがその背中に捕まるかたち。クーファはフレアの肩に乗った。

「では、健闘を祈ります」

クロウはそう言い、戦場へ飛び込んでいった。

クロウの考え通り、すっかり興奮した魔獣化した者達は脇を駆け抜けていく本来真っ先に狙うべき王子とフレアには気が付かなかった。

「フレア、馬も使えたんだ」

「一応、軍人なので！」

忘れがちであるが、彼女も歴とした軍人である。しかも、エレイズ軍の上級兵である。

王宮の南西方向に、王妃宮はある。現在はその主はおらず、高位女官の居住区となっているそこを抜ければ、王宮裏の南門から外へ出ることが出来る。

「おいフレア、そう簡単にいくわけじゃなさそうだぜ」

全力で馬を駆けさせている今、吹き飛ばされないように必死になりながらクーファは指摘した。……それは、フレアも解った。

「大きな魔力……というか、変な魔力ね」

「ああ、気味が悪いぜ」

個性が一切ないのに、驚くほど強い魔力。冷たい手で心ノ臓を握られたら、これほどの不快さがあるだろうか。それほどまでに、嫌な魔力であつた。

「間違いないとみていいな」

「ウラデイス……読んでたわね」

「南東にも門がある。そっちへ行つたほうが良い」

ヨーゼフに言われ、フレアは頷いて馬の進行方向を変えさせるが……。

「やばいつ」

クーファの声と、フレアが馬を止めて簡易バリアを張つたのは同時だった。頭上から振ってきたのは……。

闇そのものである。

それは、フレアが球状に張ったバリアにぶつかりと跳ね返される事も、それを破ろうと働きかける事もなくゆっくりと油が伝うようにバリアを覆っていく。

「閉じ込めるつもりね……」

フレアの言葉に頷いたクーファは短く言う。

「出来る限り小さくなってろ」

「……」

次の瞬間、バリアが爆発した。

それは、外から見たら、そう見えるという事である。フレアとヨーゼフは瞬間的に熱風に包まれ、それがとんでもない音を立ててバリアごと闇を突き破ったのを見た。

「あ……あんたの力なの、クーファ？」

「おうよ！ 名前は……うーん、フレイム・バーストでどうだ！」

「今つけるんかいっ！」

景気の良いツツコミを入れてから、それどころではなかったと気を引き締め直すフレア。目の前にはウラディス1人と、ほんの20名かそこらの部下がいた。

フレイム・バーストにすっかり怯えてしまった馬からフレアとヨーゼフが下りると、さしもの賢い馬も逃げ出していった。もしかしたら、人間よりも感覚が鋭い獣にはこのウラデイスのものと思われる魔力は耐え難いというのもあったかもしれないが。

「流石、クーラファンドラ・フレイム・ドラゴン。凄まじい力だ」

「……ウラデイス」

フレアはきつと睨み付けた。クーファと共に、ヨーゼフの前に立つ。

「という事は、お前が炎の召喚士アークの娘か。道理で。アークの魔力を持った使用人など、不自然極まると思っていたが」

フレアは、ウラデイスとの初対面時を思い出した。一瞬、目があったに過ぎないが彼はフレアからアークの魔力を感じ取っていたらしい。

疑いが確信に変わる。

「あんたが……」

怒りで震える体を押さえ、奥歯が鳴るのを止め、相手を見やる。

「あんたが、父さんを……」

最後の一言は、まるで獣の呻き声のようだった。

「殺したの？」

そして、確信は事実へと……それはあつさりと姿を変えた。

「そうだ。人の好い彼は何とも扱い易かった。

彼にもう少しだけ非道さがあれば、あの時屍をさらしていたのは俺だったろうがな。この世には何も悪いものはないのだと信じているような、憐れな男だったぞ。お前の父親は……。その点、お前には望みがありそうだ。救えぬ悪がこの世にある事を知っている目だ」

「そうね」

カタカタと、フレアの歯が怒りで鳴る。

「今、知ったわ」

「ヨーゼフ下がれっ!!」

その時、クーファが叫んだのとヨーゼフが従ったのが一瞬でも遅れていたら、どうなっていたか解らない。

稀代の大魔法使いが……生まれながらの誰よりも恵まれた魔力に加え、それと同じほどの力を持った父親から受け取った魔力を持った少女が抑制を、失った。

魔力が暴発し、彼女の魔力を最も具現化するに相応しい強大な炎の波となって周囲を焼き尽くすばかりに、それが広がった。

「あれが……フレアの力？」

半ば呆然と、辛うじて魔力の爆発に巻き込まれるのを逃れたヨーゼフは茫然自失のていで呟いた。

「驚く事じゃねえ……」

クーファはフレアを凝視したまま言う。

「俺を永久召喚した魔力が、日頃あれだけ抑制されてたのが寧ろ、驚くべき事だ。」

だが、コントロールが効いてねえ。危険だ」

最後の方はクーファの独白であつた。クーファはフレアの元へ直進した。

「おいフレア！ 気を取り直せつ、全部巻き込む気かつ。それに、今ガス欠になってどうする！」

ぎりぎりで……それは、フレアの理性を取り戻させたようだった。

彼女は、まるで今初めて自分の隣にクーファがいることに気が付いたような様子でそちらを見た。

「こ……これ、あたしが？」

「そうだ。兎に角、落ち着け。ヨーゼフまで巻き込むところだったんだぞ」

はつとしたようにフレアは振り返ってヨーゼフを見た。まだ、驚愕

覚めやらぬ様子でこちらを見ているヨーゼフ。

「…………ごめん、なさい」

「まあいい。多分、ウラデイスは無事じゃな…………あ？」

クーファは我が目を疑ったような声を出した。

フレアも、自分が引き起こした状況を未だによく理解できていないが、ウラデイスのその異常さには気が付いた。彼の後ろの者達は残らず、火傷に苦しみ、喘いでいるか既に灰と化しているというのに…………彼だけは、笑みさえ浮かべて平然と立っていた。

「成る程。素晴らしい力だ」

「フレア、火傷はともかく、灰になった連中はお前のせいだけじゃなさそうだぜ」

「…………え？」

クーファがそう言ったのを聞いて、ウラデイスは頷いた。

「なに。凄まじい攻撃だったのですね。こやつらの魔力を奪い取って強力な防壁を作らせてもらったまで。余り驚く事ではない」

「味方を…………」

やっと我に返ったヨーゼフが、激したように言つとウラデイスは笑みを浮かべたままそちらを見た。

「おや、王子様。

故意でなかったとしても、あなたの護衛は同じ事をするところだったのですよ。もし、ここにより多くのあなた方の味方が密集していたらどうなっていた事か。

実害が無くて、何よりですな」

「一緒にするなっ！」

「そーだてめえっ、元はと言えばてめえがなあっ！！」

激した口調で叫ぶヨーゼフとクーファを余所に、フレアは呆然としていた。

「あたし……そんな」

「おい、フレア、ともに耳貸してるんじゃねえ！」

「でも、あたし、一歩間違ったらヨーゼフ様を殺してたっ」

「ええいつ、うるたえるなっ」

その、動揺を……突かないウラディスではない。

「フレア、クーファ、危ないっ！！」

ヨーゼフが叫んだと同時に、それは起きた。

「え……」

「何だっ！？」

2人の……クーファは宙にいたので正確にはフレアの足下から闇が現れた。それは実体を持った影のようである。円を描くように広がり、2人を囲むその影は生き物のようにゆらゆらと揺れながら中心……フレアとクーファに迫る。

「くそっ」

クーファが炎を吐くが、それは意味をなさない。その闇には決まった形状が無いらしい。水に浮いた油のように、何かが当たっても形を変えるだけで消える事はなく、ゆったりと距離が詰まる。フレアが作った結界も、するりと抜けてくる。

「知らないのか。結界魔法は元を辿れば、闇の魔法が起源なのだ。唯一、禁止されていない闇魔法といっても過言でない」

「だから、闇じゃ闇は防げねえってか。くそっ」

「そして、闇はそれを打ち消す光以外の、何者の干渉も受けない。光に最も近い炎であっても同じ事。闇に喰われるといい、炎の召喚士、炎のドラゴン」

馬鹿と忠実は紙一重（by 孤高の美貌剣士）。

ウラデイスの悠々とした台詞が終わる頃には、闇がすっかりフレアとクーファを覆い尽くした。だが……。

「なめんじゃないわよっ！」

「なに……？」

闇の中から、くぐもった声が聞こえると同時に、強烈な光が無数の刃のように闇を切り開いて炎の召喚士と炎のドラゴンは姿を現した。

「光属性の魔法も使えたか……」

慌てはせずとも、厄介なものを見るように顔をしかめたウラデイス。

「時間ありがとうね、ウラデイス大將軍！」

「……は？」

「反省タイムには10秒あれば十分！ さあクーファ、蹴りつけるわよっ」

「よおっし！ 流石、天下一の単細胞！」

「全然、褒め言葉じゃない」

奇しくも、ヨーゼフとウラデイスの喧嘩がぴったり重なった。

*

時はしばし戻り、場所も変わる。

セフィーロとライアルトの戦いは、一進一退を繰り返していた。どちらも、今まで自分と並ぶ相手と戦った事が無かった。任務遂行、ただそれだけを考えているセフィーロはともかくライアルトはいつしかこの戦いを楽しみ始めてさえいた。

「何故、君の様に強い者が人の下に付いているのかが解らないな」

「お前もウラデイスに雇われているのだろう」

「生活の為に働いてるだけさ。俺は奴に忠義を誓ってなんかいないし」

セフィーロは特に、興味を持たなかったようだ。もとより、余計な事に気を散らす事を好まない性格である。純粹なまでに、ライアルトを退ける事だけを考えているのだった。それも、ライアルトが彼に関心を持った……もつと言ってしまったえば今までの相手の中で一番に面白いとさえ思っただ理由である。

ライアルト、誰にも仕える事なく自分の腕だけを信じてどんな場

合でも自分の為だけに剣を振るってきた剣士にとって、セフィーロの持つ強い他者への忠誠心は未知のものであった。

幾たびも、剣をぶつけ合い、時に相手を傷つけ傷つけられている内にだいたい、互いの力量を理解していた。それは、全く同様の理解だった。

この敵は、もしかしたら自分より強いのかもしれない……。

一度、間が開いた。互いに、かなり疲労が出始めている。致命傷には決してなりえないものの、互いの傷は少くない。消耗戦となった場合、恐らくセフィーロの方が僅かに体格が良い分、分があるだろうがセフィーロは時間を掛ける事を望んでいない。すぐにでも、唯一の主の無事を確認に行かねばならないのだ。

つまり、互いに早期決着が望まれた。

そして、行動に移したのはまた同時だった。

2人、同時に今までで一番の気合いを込めて踏み出す。多少の傷はもう厭わず、まさに光速で2者は斬り結ぶ。相手より早く、速く……それだけを求める戦い。

だが、その中で敢えてセフィーロはそれに逆らった。

凄まじい突きが繰り出される瞬間を、相手より一拍遅らせた。だが、死んだり身動きを取れない傷を負う気も、セフィーロには毛頭なかった。ライアルトの剣が貫いたのは絶妙に身をかわしたセフィーロの肩であつた。それでも、普通なら痛みで絶叫するか身を悶えるだけの攻撃のはず。しかし、セフィーロは眉一つ動かさずライアルトの脇腹を貫いた。

狙いは心臓であつたが、セフィーロも人間であるから痛みで手元が少し狂つた。だが、明らかに深手を負つたのはライアルトの方で、その証拠に彼は膝から崩れた。

ライアルトの手が、彼の剣を掴みきれなくなつたところでセフィーロは自分の剣を引き抜くと、真っ赤に染まつた刃を拭つて鞘に収めた。主の手を離れ、セフィーロの肩を貫いたままの剣を次に抜いてライアルトへ返した。

「肉を斬らせて骨を断つ……か。そんな馬鹿をする者がいるとはね」

「俺に与えられているのは、死ぬなという命令だけだ」

ライアルトは剣に手を伸ばそうとしたが諦め、そのまま目を閉じた。

「行けばいいさ」

「そうさせてもらつ」

不思議な事に、剣を握つてライアルトが初めて味わつた敗北は悔しくもなく、苦くもなく、相手を逆恨みする気持ちも全く生まれなかった。

『ああ、何て……』

微笑みが浮かぶ。最後に、こうやって笑ったのはいつだったか。

『素晴らしい』

静かなる称賛だけが彼の胸を充たしたのであった。

コートの肩部分が裂けていたから、それを切り離して簡易な包帯の代わりとして傷を縛った。痛みは強いが、行動に大きな支障が出るほどではない。廊下の突き当たりに行くと、崩れた牢……その先は無かった。見事に床が抜け落ちていて、下からは戦いの音がしていた。恐らく、大將軍二人はその中である。セフィーロは一縷の躊躇いさえ見せずに飛び下りた。

「エレイズ様」

「セフィーロ！」

感動の声を出したのは、エレイズではなく部屋の隅にいたウォーレンである。一切働かず、地下を照らす光の魔法の発動も数々の魔獣との戦いも全てエレイズに任せきっているウォーレンにセフィーロが無言で冷たい目を向けると彼は大慌てで説明する。

「手足は良かったんだが、首の、魔力解除の拘束具が取れねえんだ！」

「……成る程」

確かに、見たところ頑丈そうな造りであるそれは首にぴったり密着していて強い攻撃を加えれば本人が無傷では済まないと見える。

「しかも、エレイズが言うに強制解錠呪文に反応して畏……恐らく爆発かなにかが発動する仕掛けになってるらしくてな」

だが、セフィーロはもう聞いていなかった。すぐさま敬愛すべき大將軍の元へ行く。

その間、さつと全体を見渡した。

随分と広い。エレイズの魔法で全体が照らされているが、奥行きは2、30メートルあるだろう。ほぼ正方形の空間らしい。床や壁は頑丈な石で出来ていて、元はあったのかもしれないが部屋の中には何もない。魔獣の数は50以上。どれも、漆黒の毛並みを持つもので赤や金に怪しく目が光っている。獅子や虎、狼など攻撃性の高い魔獣ばかりだ。また、蛇や幻獣族などなかなかにぞつとしないものも多くある。

「どうも、全部Sランクみたいなんだよね」

並んだセフィーロにエレイズは言う。

「アイス・ウルフの“咆吼”では1体も消えなかった」

猛獣系の魔獣が使う技……というより、“ただの雄叫び”。これも立派な攻撃となり、大抵Sランク魔獣の“咆吼”を受ければAランク以下の魔獣は余程頑丈な種でない限り自然消滅してしまう。

「という事で、一体ずつ地道に片付けてるんだけど」

「承知致しました」

魔獣が飛びかかってきた。

最初の一匹。黒い狼型の魔獣がセフィーロに襲いかかる。それを何の問題もなくかわしたセフィーロはまだ空中にいた狼の横腹を切り裂く。鮮血の代わりに、真っ黒な闇の魔力が流れ出て魔獣は消える。セフィーロを強敵と認知したか、残りの狼型魔獣が一気に襲いかかってきた。

「おい、ご主人。あいつは大丈夫なのか」

「セフィーロ？ 心配ないよ。こういう状況では私よりずっと強い」

「けっ……じゃあ、下がってるか？ お嬢さん」

「冗談よして」

アイス・ウルフが飛び出したのと、残る魔獣が2体の獲物に飛びかかったのが同時である。巨大な吠え声と共に、魔獣達のもど笛を食いちぎるアイス・ウルフ。力勝負では敵わないから、素早くバリア

を張って体当たりから身を守り、罾を仕掛けて魔獣達の足場を氷付けたりなどして動きを封じると巨大な氷柱で魔獣の体を真つ二つにするエレイズ。

それから、10分と掛からなかった。セフィーロは自分に襲いかかってきた全ての魔獣を片付けるとすぐさまエレイズとアイス・ウルフの方へ向かい、戦闘に終止符を打った。

「やるじゃねえか、お前」

アイス・ウルフは……当然、表情は変わらないわけだがにやりとしたように言った。

余談だが、人の言葉を扱える魔獣はSランク魔獣の全てと、例外的にウサギ型魔獣である。それ以外は人の命令を理解出来るが、扱う事は出来ない。

「これ、どうしよう」

エレイズがウォーレンの首を難しそうな顔で眺めた。

「俺が喉ごと食いちぎってやる」

「うっん、それじゃ意味無いんだよねえ」

「……エレイズ、もっと強く反対してくれよ」

そこで、セフィーロが

「ライアルトが鍵を持っている事はないでしょうか」

と。

「どこにいるか解る？」

「恐らく、動けないでしょうから……ここまでの通路に」

エレイズは頷いた。

「じゃあ、まずここを出ないと」

彼らは短く話し合い、まずエレイズが巨大な飛行魔獣を召喚して1人乗せて地下から出る。そして、鍵を手に入れて戻り、ウォーレンの拘束具を外してドラゴンで強引に脱出……という事に決まる。

「まったく。大魔法使いの作戦ってやつはどうしていつも適当なんだから」

呆れたように言うアイス・ウルフであった。

とにかく、エレイズが召喚したのは大型のBランクドラゴン、氷属性のワイバーンであった。

「ドラゴンはBしか召喚出来ないんだよねえ」

と呟いたエレイズ。

「どうする？ セフィーロが行ったほうが、話が早いかな？」

「……そうかもしれません」

恐らく、最後の表情を見るとライアルトは少なくとも自分にはもう敵対の意思を持っていないのだろうとセフィーロには思えた。

「じゃあ任せた」

ワイバーン……青い巨大な翼竜の背から降り立ったセフィーロは急ぎ、ライアルトのところへ戻った。同じ場所で、今は壁にもたれて座っている。

「留めでも差しに来たのかい？」

「いや。質問に来た。」

ウォーレン大將軍の魔力封印を解きたいのだが」

ライアルトは返り血に濡れていながら、やはり美しい顔でセフィーロをしばらく見つめていたがやがて微笑んだ。

「あの大將軍はどうも嫌いだけど、あなたは好きだ。あげるよ」

二人称が変わっている事には突っ込まず、セフィーロはライアルト

が震える手で差し出した鍵を受け取った。

「済まないな」

こんなあつさり片が付く事に、些か驚いてはいたが表情には一切出さずにセフィーロはさつさと地下へ戻った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7204v/>

炎の召喚士フレア

2011年10月10日00時25分発行